

都城市文化財調査報告書第23集

TEN JIN BARU - SITE  
**天 神 原 遺 跡**

—— 民間の事務所・倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1993年3月

宮崎県都城市教育委員会



天神原遺跡遠景



天神原遺跡（第1・3調査区）遠景

## 序 文

この報告書は、民間の事務所・倉庫建設に伴い、都城市教育委員会が受託事業として実施した、都城市早水町に所在する天神原遺跡の発掘調査報告書であります。

平成4年4月から同年6月にかけて実施した発掘調査の結果、中世から近世にかけての遺構・遺物が大量に発見されました。

本書の刊行を通じて、こうした貴重な文化財が市史解明の一助となり、歴史教材として生かされるとともに、今後の学術研究に少しでも寄与できることを願っています。

また、近年では民間開発に伴う発掘調査の割合が激増しており、官民相互の理解と協力により、文化財の保護と地域開発が円滑に行われていくことを願うとともに、関係各機関のより一層のご理解・ご協力をお願い申し上げます。

最後に、発掘調査に従事していただいた市民の皆様をはじめ、現場における調査や出土資料の整理から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、多くの先生方に対して心より厚くお礼申し上げます。

1993年3月31日

都城市教育委員会

教育長 隈元幸美

## 例　　言

1. 本書は、株式会社サン・ダイコー（現 株式会社ダイコー）の事務所・倉庫建設工事に先立ち、平成4年度に都城市教育委員会が受託事業として実施した、天神原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化課主事補横山哲英が担当した。また、発掘調査の経費は、事業委託者である株式会社サン・ダイコーが負担した。
3. 発掘調査地点は宮崎県都城市早水町3508-3番地外で、調査期間は平成4年4月10日から同年6月10日までである。なお、実質調査面積は約3,120m<sup>2</sup>である。
4. 出土遺物の整理作業（水洗・注記・復元等）は、都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵室において行った。
5. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、都城市文化課矢部喜多夫主事・下田代清海・吉村則子・阿久根昌子らの助力を得て、横山が行った。また、遺構分布図の作成及び遺物の取り上げには、コンピュータ・システム“S I T E”を用いた。なお、本報告書中で示した遺構の計測値は、検出面での現存値を表している。
6. 掲載した遺物の実測・製図は、横山・池谷香代子・猪股幸千代・雁野あつ子・水上和子が行った。
7. 遺構・遺物の写真撮影は、作業員の協力を得て横山が行い、遺跡の空中写真については、株式会社スカイサーベイに委託した。
8. 本書で使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔絶対高である。
9. 本書の執筆と編集は、横山があたった。
10. 出土陶磁器に関しては、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏の鑑定・ご教示を賜った。
11. 文献史料については、都城市文化財専門委員重永卓爾氏のご指導・ご教示を賜った。
12. 本書に関する遺物・記録類（写真・図面等）は、都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵室で収蔵・管理している。
13. 本書では、次の通りの略記号を用いている。

S C - 土 坑      S D - 溝状遺構      S F - 道路状遺構（硬化面）

# 目 次

巻頭口絵 天神原遺跡空中写真

序 文

例 言

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

## I. はじめに

1. 発掘調査に至る経緯	10
2. 調査の組織	11

## II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置	11
2. 周辺の遺跡	11

## III. 調査の内容

1. 遺跡の基本層序	13
2. 調査区の設定と内容	13
3. 出土遺物（土師器類）の分類について	14

## IV. 調査の記録

1. 第1調査区の内容	16
1) 遺構	16
2) 包含層内出土遺物	28
2. 第2調査区の内容	
1) 遺構	40
2) 包含層内出土遺物	44
3. 第3調査区の内容	
1) 遺構	45
2) 包含層内出土遺物	59

## V. まとめ

# 挿 図 目 次

第1図 天神原遺跡位置図	10
第2図 天神原遺跡周辺地形図	15
第3図 天神原遺跡グリッド配置図	17
第4図 天神原遺跡（第1調査区）遺構分布図	18
第5図 第1調査区（北半部）検出遺構土層断面図（I）	19
第6図 第1調査区（北半部）検出遺構土層断面図（II）	20

第7図	第1調査区（南半部）検出遺構土層断面図（I）	23
第8図	第1調査区（南半部）検出遺構土層断面図（II）	24
第9図	第1調査区（南半部）検出遺構土層断面図（III）	25
第10図	S F - 1 硬化体変遷図（1）	26
第11図	S F - 1 硬化体変遷図（2）	27
第12図	第1調査区・S D - 4 内出土遺物（1）	29
第13図	第1調査区・S D - 4 内出土遺物（2）	30
第14図	第1調査区・S D - 7 内出土遺物	30
第15図	第1調査区・S D - 8 内出土遺物（1）	30
第16図	第1調査区・S D - 8 内出土遺物（2）	31
第17図	第1調査区・S D - 8 内出土遺物（3）	32
第18図	第1調査区・S D - 3 内出土遺物	32
第19図	第1調査区・S C - 3 内出土遺物	32
第20図	第1調査区・P i t 群内出土遺物	32
第21図	第1調査区・包含層内出土遺物（1）	32
第22図	第1調査区・包含層内出土遺物（2）	33
第23図	第1調査区・包含層内出土遺物（3）	34
第24図	第1調査区・包含層内出土遺物（4）	35
第25図	第1調査区・包含層内出土遺物（5）	36
第26図	天神原遺跡（第2調査区）遺構分布図	41
第27図	第2調査区検出遺構土層断面図（I）	42
第28図	第2調査区検出遺構土層断面図（II）	43
第29図	第2調査区出土遺物	44
第30図	天神原遺跡（第3調査区）遺構分布図	46
第31図	第3調査区検出遺構土層断面図（I）	48
第32図	第3調査区検出遺構土層断面図（II）	49
第33図	S F - 7 硬化体変遷図	50
第34図	第3調査区・S D - 16 内出土遺物	51
第35図	第3調査区・S D - 15（上層）出土遺物	51
第36図	第3調査区・S F - 3 内出土遺物	51
第37図	第3調査区・S C - 5 内出土遺物	51
第38図	第3調査区・S C - 6 内出土遺物	52
第39図	第3調査区・P i t 群内出土遺物（1）	52
第40図	第3調査区・P i t 群内出土遺物（2）	53
第41図	第3調査区・包含層内出土遺物（1）	54
第42図	第3調査区・包含層内出土遺物（2）	55
第43図	第3調査区・包含層内出土遺物（3）	56
第44図	第3調査区・包含層内出土遺物（4）	57
第45図	第3調査区・包含層内出土遺物（5）	58
第46図	第3調査区・包含層内出土遺物（6）	59

## 表 目 次

第1表	第1調査区出土遺物一覧表(1) .....	37
第2表	第1調査区出土遺物一覧表(2) .....	38
第3表	第1調査区出土遺物一覧表(3) .....	39
第4表	第2調査区出土遺物一覧表 .....	44
第5表	第3調査区出土遺物一覧表(1) .....	60
第6表	第3調査区出土遺物一覧表(2) .....	61
第7表	第3調査区出土遺物一覧表(3) .....	62
第8表	第3調査区出土遺物一覧表(4) .....	63

## 図 版 目 次

図版1	第1・3調査区全景(真上より)、第1調査区南半部遺構群検出状況(北東より)、第1調査区南半部遺構群(西より)、第1調査区SC-1断面、第1調査区南半部遺構群(真上より)、第1調査区北半部遺構群(真上より)、第1調査区SD-7・8検出状況(西より)、第1調査区SD-4(北より)、第1調査区SD-8内土師器出土状況、第1調査区SD-4・7・8内出土遺物、第1調査区包含層中出土遺物、第1調査区出土土師器①(坏類)、第1調査区出土土師器②(小皿類) .....	70
図版2	第1調査区出土土師器[坏・I a HM類(143)、坏・II b SM類(54)、坏・II' a HP類(191)、坏・II' b HP類(78)、坏・II' b HP類(196)、坏・III' b HP類(89)、小皿・II' a HP類(192)、小皿・III a HP類(81)、小皿・III' a HP類(86)] .....	71
図版3	第2調査区全景(真上より)、第2調査区遺構検出状況(北東より)、第2調査区遺構完掘状況(北西より)、第2調査区遺構完掘状況(南東より)、第2調査区SD-1・12・13・14切合部、第2調査区SD-1・12断面、第2調査区出土土師器[坏・I b SM類(256)]、第3調査区東部遺構群(真上より)、第3調査区SF-3～6完掘状況(南より)、第3調査区SD-15・16完掘状況(西より)、第3調査区SD-15・16とSC-7の切合部 .....	72
図版4	第3調査区SF-7(第1次硬化面)検出状況(南より)、第3調査区SF-7(第3次硬化面)検出状況(北より)、第3調査区SF-7(第3次硬化面)検出状況(南より)、第3調査区SD-15・16・SF-3・SC-5・6内出土遺物、第3調査区包含層中出土陶磁器、第3調査区出土土師器①(坏類)、第3調査区出土土師器②(小皿類)、第3調査区出土土師器[坏・I' b SP類(313)、坏・III a SP類(491)、小皿・II' a HP類(456)、小皿・III a SM類(494)] .....	73

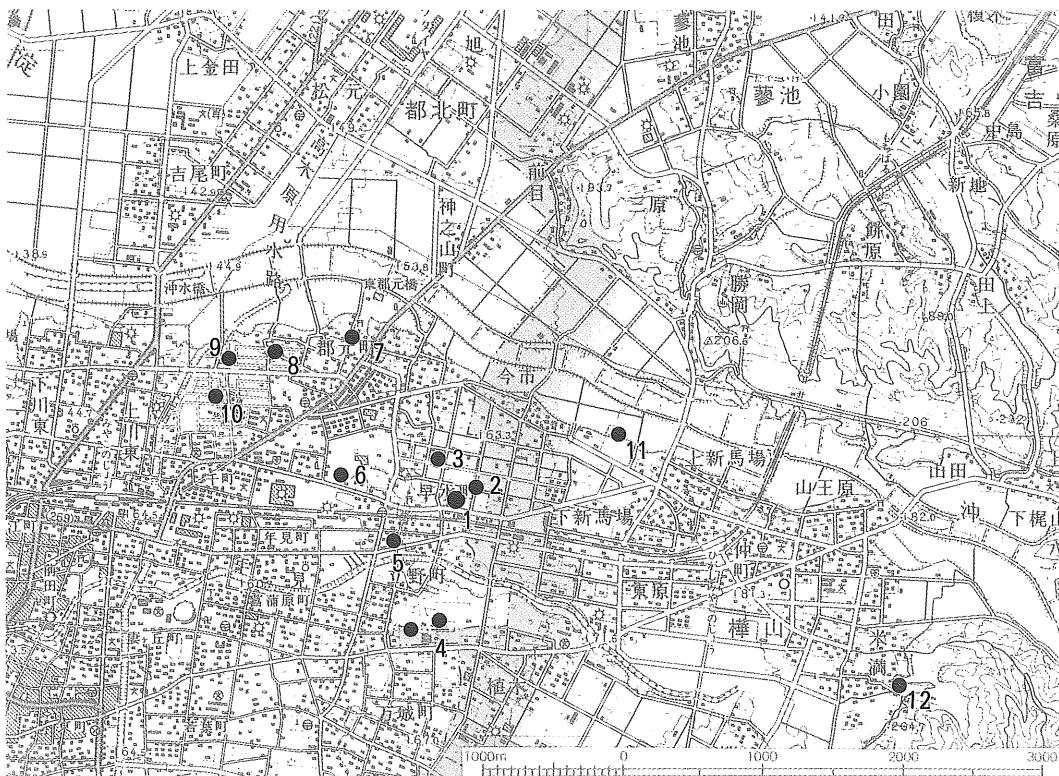
# I. はじめに

## 1. 発掘調査に至る経緯

平成3年9月、都城市教育委員会は、宮崎県都城市早水町の旧家畜市場跡地に事務所・倉庫の建設を計画していた株式会社サン・ダイコーから、同早水町3508-3番地外における埋蔵文化財の所在の有無について照会を受けた。当該地一帯は、昭和61年度に実施した都城市遺跡詳細分布調査で、古墳・中～近世の遺物散布地（祝吉第3遺跡：市内遺跡番号4010）であることが確認されていたため、同文化課は、さらに詳細な遺跡の残存状況を把握する目的で、平成3年12月9日から同12日にかけて確認調査を実施した。その結果、開発予定地全域で、良好な残存状態の弥生時代～中世の遺物包含層と、中世の遺構群（溝状遺構・柱穴等）が確認された。

この調査結果を受け、平成4年3月、同社と文化課の間で埋蔵文化財の取扱いに関する協議が行われ、平成4年3月26日付で、当市教育委員会と株式会社サン・ダイコーの間に、『天神原遺跡開発における埋蔵文化財に関する協定』が締結された。その内容は、「工程上掘削の必要な事務所予定地については、工事着手前に発掘調査を行い、記録保存の措置をとる。駐車場予定地のうち、遺構が検出された部分については確認調査を行い、その他の部分については盛土による現状保存とする。」というものであった。この協定をうけて、平成4年4月2日付で『天神原遺跡開発における埋蔵文化財発掘調査委託契約書』がとり交わされた。

なお、現場における発掘調査は、平成4年4月10日から同年6月10日まで実施し、引き続き遺物の整理を行った。



1. 天神原遺跡
2. 樺山・郡元地区遺跡
3. 祝吉御所跡
4. 向原第1・2遺跡
5. 年見川遺跡
6. 牟田ノ上遺跡
7. 久玉遺跡
8. 松原地区遺跡
9. 祝吉遺跡
10. 祝吉第2遺跡
11. 上沖遺跡
12. 中米満遺跡

第1図 天神原遺跡位置図

## 2. 調査の組織

発掘調査は株式会社サン・ダイコーの委託を受け、都城市教育委員会が主体となって実施した。

調査の組織は、以下の通りである。

調査責任者	都城市教育委員会	教 育 長	隈 元 幸 美
調査総括	都城市教育委員会文化課	文化課長	成 竹 清 光
調査事務局	都城市教育委員会文化課	文化課長補佐	遠 矢 昭 夫
	都城市教育委員会文化課	文化財係長	海 田 茂
	都城市教育委員会文化課	主 事 補	田部井 寿 代
調査担当者	都城市教育委員会文化課	主 事 補	横 山 哲 英
発掘作業員	阿久根勇吉、阿久根敏恵、阿久根昌子、福丸貞行、福丸治男、福丸秀則、大山ミツ子、満安エミ子、下田代清海、松永浩一、和田利雄、吉村則子、細山田登、細山田茂、有水トミ、壇清人、鶴松雄、曾原主吉		
整理作業員	池谷香代子、猪股幸千代、雁野あつ子、水上和子		

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

天神原遺跡は、宮崎県都城市早水町字天神原に所在する。都城市は宮崎県の西南端に位置する県内第2の都市で、東側に鰐塚山系、西側に霧島山系がひかえた、南北に細長い都城盆地の中央（盆地底）に市街地が形成されている。当盆地は、中・南九州を結ぶ交通の要衝という地理的特性から、古来より様々な地域の影響を受けてきているが、中世の後半頃以降、島津氏の庶流・北郷氏の所領としてその支配下に置かれていた関係上、経済圏域から言語・風習に至るまで、日向国よりもむしろ隣接する薩摩・大隅地方に強い影響を受けた地域である。

地形的には、盆地の中央を北流する大淀川を境に、南・西半部では成層シラス台地、東半部では開析扇状地が発達しており、当遺跡もこうした扇状地の一つである一万城扇状地の中央に立地している。遺跡の周辺では、市内有数の湧水池であり、湖底から神事に使用されたとみられる土師器（古代末～中世）が多く出土した早水池や、ここを水源に同扇状地の北縁を西流する大淀川の支流・沖水川に向かって流下していた旧小河川などが多数みうけられ、これらを取巻くように弥生時代以降の遺跡群も点在していることから、この地域が水源をはじめとする恵まれた住環境の下、かなり早い段階から盆地開発の一拠点となっていたことが推察される。

### 2. 周辺の遺跡

天神原遺跡が所在している早水地区をはじめとして、都城市東部地区一帯ではこれまでにも多くの遺跡が調査・確認されている。今回の調査地点を含む祝吉第3遺跡（市内遺跡番号：4010）の範囲内にも、島津氏発祥の地とされ、その居館跡があったと伝えられる祝吉御所跡（県指定史

跡) などが所在している。なお、今回の調査地点は、昭和61年度の遺跡詳細分布調査で確定した祝吉第3遺跡の範囲が広大すぎるため、便宜的に調査を実施した地点の字名に依拠して天神原遺跡と命名し、新たに都城市遺跡台帳に登録することとした。

さて、本遺跡の周辺では、これまでにも（古代を除く）弥生～中・近世にかけての時期の遺跡が数多く確認されている。まず、当遺跡の東側には中・近世の集落址である樺山・郡元地区遺跡<sup>(1)</sup>が隣接しており、西側約800mの位置には、弥生時代後期～古墳時代初頭・中世の遺構・遺物が出土した牟田ノ上遺跡<sup>(2)</sup>が所在している。さらに、これらの遺跡が立地している一万城扇状地の北縁部には、弥生時代後期・終末期～古墳時代初頭頃の集落が確認された祝吉遺跡<sup>(3)</sup>・祝吉第2遺跡<sup>(4)</sup>、中世から近世にかけての大集落址である松原地区遺跡群<sup>(5)～(7)</sup>や久玉遺跡<sup>(8)～(10)</sup>などが所在している。また、当遺跡が位置している早水地区の南側を西流しながら、一万城扇状地を開析している大淀川の支流・年見川流域にも、弥生時代後期前半頃の向原第1遺跡や弥生時代後期～古墳時代初頭頃の向原第2遺跡<sup>(11)</sup>、弥生時代中期～後期頃の年見川遺跡<sup>(12)</sup>などが点在している。これらのうち、東接する樺山・郡元地区遺跡については、検出された遺構の特徴・時期が当遺跡で確認したものとほぼ同じ傾向を示しており、遺跡としての立地条件や占地状況などもかなり類似していることから、これらを一連の遺跡（大集落址）、もしくは密接な関係を持った小集落址群として捉えられるのではないかと考えている。この他に、当市に隣接する北諸県郡三股町でも、当遺跡と同じ扇状地上に立地する中米満遺跡<sup>(13)</sup>、上沖遺跡<sup>(14)</sup>といった中世集落遺跡や、中世山城跡などが多数確認されており、今回の調査で得られた資料についても、こうした周辺遺跡の出土資料との比較・検討を進めながら、位置付けを行っていく必要があると思われる。

#### 註

- (1) 谷口武範・近藤協・山田洋一郎 1992 『樺山・郡元地区遺跡』 宮崎県教育委員会
- (2) 衆畠光博 1991 「牟田ノ上遺跡」 『平成2年度遺跡発掘調査概報』  
都城市文化財調査報 告書第13集 都城市教育委員会
- (3) 北郷泰道 1981 『祝吉遺跡』 都城市文化財調査報告書第1集 都城市教育委員会
- (4) 面高哲郎 1982 『祝吉遺跡』 都城市文化財調査報告書第2集 都城市教育委員会
- (5) 矢部喜多夫・重永卓爾・寺師雄二 1989 『松原地区第I・II・III遺跡』 都城市文化財調査報告書第7集 都城市教育委員会
- (6) 矢部喜多夫 1989 「松原地区第遺跡」 『昭和63年度遺跡発掘調査概報』  
都城市文化財調査報告書第10集 都城市教育委員会
- (7) 矢部喜多夫 1992 「松原地区第II-2遺跡」 都城市文化財調査報告書第16集  
都城市教育委員会
- (8) 矢部喜多夫 1989 「久玉遺跡」 『昭和63年度遺跡発掘調査概報』  
都城市文化財調査報告書第10集 都城市教育委員会
- (9) 矢部喜多夫 1990 「久玉遺跡（第2次調査）」 『平成元年度遺跡発掘調査報告』  
都城市文化財調査報告書第11集 都城市教育委員会
- (10) 矢部喜多夫 1991 「久玉遺跡（第3次調査）」 『平成2年度遺跡発掘調査概報』

- (11) 矢部喜多夫 1992 「久玉遺跡（第4次調査）」 都城市文化財調査報告書第16集  
都城市教育委員会
- (12) 衆畠光博 1990 「向原第1・2遺跡」『平成元年度遺跡発掘調査報告』  
都城市文化財調査報告書第11集 都城市教育委員会
- (13) 小田富士雄 1990 「年見川遺跡」『宮崎県史 資料編考古1』 宮崎県
- (14) 「中米満遺跡」 1986 『宮崎県文化財調査報告書』 第30集 宮崎県教育委員会
- (15) 「上沖遺跡発掘調査」 1980 『宮崎県文化財調査報告書』 第23集 宮崎県教育委員会

### III. 調 査 の 内 容

#### 1. 遺跡の基本層序

本遺跡の基本土層は、6層に分層できる。このうち遺物包含層となるのは第IV層で、遺構検出面は第V-b層上面である。ただし、今回の調査で確認した中・近世の遺構は、本来第IV層から掘り込まれていたと推測しているが、同面での検出はほとんどできなかった。

第I層：礫やコンクリート塊などを含む灰オリーブ色砂質シルト層で、旧耕作土および近・現代の盛土層である。層厚約60cm。

第II層：乳白色の軽石粒（白色パミス）を含む黒色砂質シルト層である。層厚0~10cm。

第III層：乳白色の軽石層。文明3~8年（1472~1476年）頃に噴出したといわれている桜島起源の火山性軽石層にあたる。溝状遺構や土坑の埋土など、局部的にしか堆積していない。  
層厚5~20cm.\*

第IV層：黄白色の軽石粒（オレンヂパミス）を含む黒色粘質シルト層で、軽石粒の含有度は下部になるにつれて高くなる。層厚20~25cm。

第V-a層：黄白色の軽石粒を基調とする層で、黒色粘質シルトを大量に含む。第V-b層の漸移層にあたる。層厚5~15cm。

第V-b層：黄白色の軽石層。霧島火山御池火口を起源とする軽石層で、噴出時期は今から約4,000年前頃と推定されている。層厚80~100cm。

\* 重永卓爾 1991 「IV. 小結—桜島に起源を有する文明 Tephra の年次について」

『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』 都城市文化財調査報告書第14集 都城市教育委員会

#### 2. 調査区の設定と内容

調査は、開発対象区域全体を公共座標のN・S線に一致する10m×10mのメッシュで区割する、グリッド法を用いて行った。グリッド・ナンバーについては、コンピュータ・システムによって遺構の実測と遺物の取り上げを行うため、あらかじめ公共座標メッシュの左隅に定めておいた基

点をもとに、縦軸（南北）方向をアルファベット、横軸（東西）方向を算用数字で表示することとした。[第3図] なお、実際に調査を実施した事務所・駐車場予定地は、対象区域の南半・西端にそれぞれ独立していたため、これらを便宜上、第1調査区（事務所建設部分）、第2調査区（駐車場用簡易舗装付設部分）と称することにした。また、包含層の広がりを確認するため、調査途中で新たに第3調査区（第1調査区の北側トレンチ）を設けた。

調査の結果、全ての調査区で主に中世段階の溝状遺構、道路状遺構、柱穴、土坑などが検出され、それらに伴う舶載・国産陶磁器類、土師器、石製品等が出土している。

### 3. 出土遺物（土師器類）の分類について

今回の調査で出土した遺物の主流を占めているのが、土師器の壊・小皿の類である。これらの多くは破損した細片であるが、底部片にみとめられる切り離し技法の違いや、胎土・焼成状況の差異といったわずかに残されたデータを少しづつ積み重ねていくことによって、当方における土師器の編年作業の一助となるとともに、これらの背後に控えた生産集団の在り方についても、推測できるのではないかと考えた。そこで、今回は出土した土師器類を下記の項目に照らし合わせて分類し、一括して一覧表に掲載した。ただし、詳細については紙数の都合上今後の検討課題とし、技法や胎土などに認められる特徴のみを簡単に触れることとした。

1. 切り離し技法
  - 糸切り(I類)：基本的に糸状の切り離し具を用いたもの。
  - ヘラ切り(II類)：ヘラ状の工具を用いた切り離し技法。
  - 疑似糸切り(III類)：ヘラ状工具の一種を用いた切り離し技法と思われるが、糸切りの糸目のような同心円状の痕跡がかなり深く残っているため、ヘラ切りの亜種と考えた。
2. 底部端の切り込み
  - 切り込みあり：底部端（体部下端）に、意図的にヘラのような工具で(I・II・III類) 切り込みが施されているもの。
  - 切り込みなし：そういう痕跡の認められないもの。  
(I・II・III類)
3. 板状圧痕
  - あり(a)：底部に板状圧痕のあるもの。(原体にバリエーションあり)
  - なし(b)：板状圧痕の認められないもの。
4. 焼成
  - 堅緻(H)：内外面とも堅緻で、摩耗の少ないもの。
  - 脆弱(S)：脆弱で、かなり摩耗の進んでいるもの。
5. 胎土
  - 単土系(M)：黄白・白色の单一胎土使用。
  - 混土系(P)：上記の胎土に、橙色系の土が混和されているもの。
6. 色調
  - (内外器面の色調)
    - 第1群(橙色系)
    - 第2群(灰褐色系)
    - 第3群(褐色系)
    - 第4群(黄橙色系)
    - 第5群(黄褐色系)
    - 第6群(黄色系)
    - 第7群(灰白色系)
    - 第8群(青灰色系)



第2図 天神原遺跡周辺地形図

## IV. 調査の記録

### 1. 第1調査区の内容

第1調査区は、事務所・倉庫建設予定地部分である。現状は草地とグラウンドであるが、以前当該地に所在していた競馬場や家畜市場を取り壊す際に整地工事を行っているため、表土の填圧が著しく、調査はまず重機によってこうした表土部分を除去する作業から入った。また、さきに実施した試掘調査の結果、表土から第Ⅲ層までは遺物や遺構がみとめられなかつたので、これらの部分を取り除いた上で、第Ⅳ層以下について手作業による調査を行つてゐる。ただし、建物の基礎や産業廃棄物を埋めた穴などによる破壊がかなり進んでおり、当調査区の総面積約2,100m<sup>2</sup>の半分が、第V-b層（御池降下軽石層）までいたる攪乱をうけていた。

調査の結果、当調査区では、溝状遺構11条、道路状遺構1条、柱穴約200箇、土坑4基が確認されたが、第Ⅳ層下部で検出した道路状遺構以外、すべて第V-b層上面での検出である。これらはいずれも第V-b層中に掘り込まれており、埋土によって2タイプ（Type A：オレンヂパミス混入黒色粘質シルト、Type B：白色・オレンヂパミス混入黒色シルト）に大別できるが、各埋土中の文明降下軽石層の堆積部位によって、さらに細分することが可能であった。また、約350点の遺物が包含層（第Ⅳ層）下部及び各遺構の埋土中から出土しているが、とくにSD-4・8の埋土内やその周辺部に集中する傾向がみとめられた。なお、今回出土した遺物の大半が土師器片で、時期決定の材料となる陶磁器類は極めて少量であった。

#### 1) 遺構

<溝状遺構>

SD-2 [第4・8・9図]

調査区南西端で検出した溝で、SD-3、SF-3と並走している。長さ約11.1m、幅0.7~2.3m、深さ0.13~0.65mで、底の浅い台形状の断面形を呈している。埋土は主に砂質度の高いType Bで、中層付近に文明降下軽石が堆積している。なお、東端部はSC-1、SD-5によって切られている。主軸の方向はN-88°-Eで、遺物の出土はなかった。

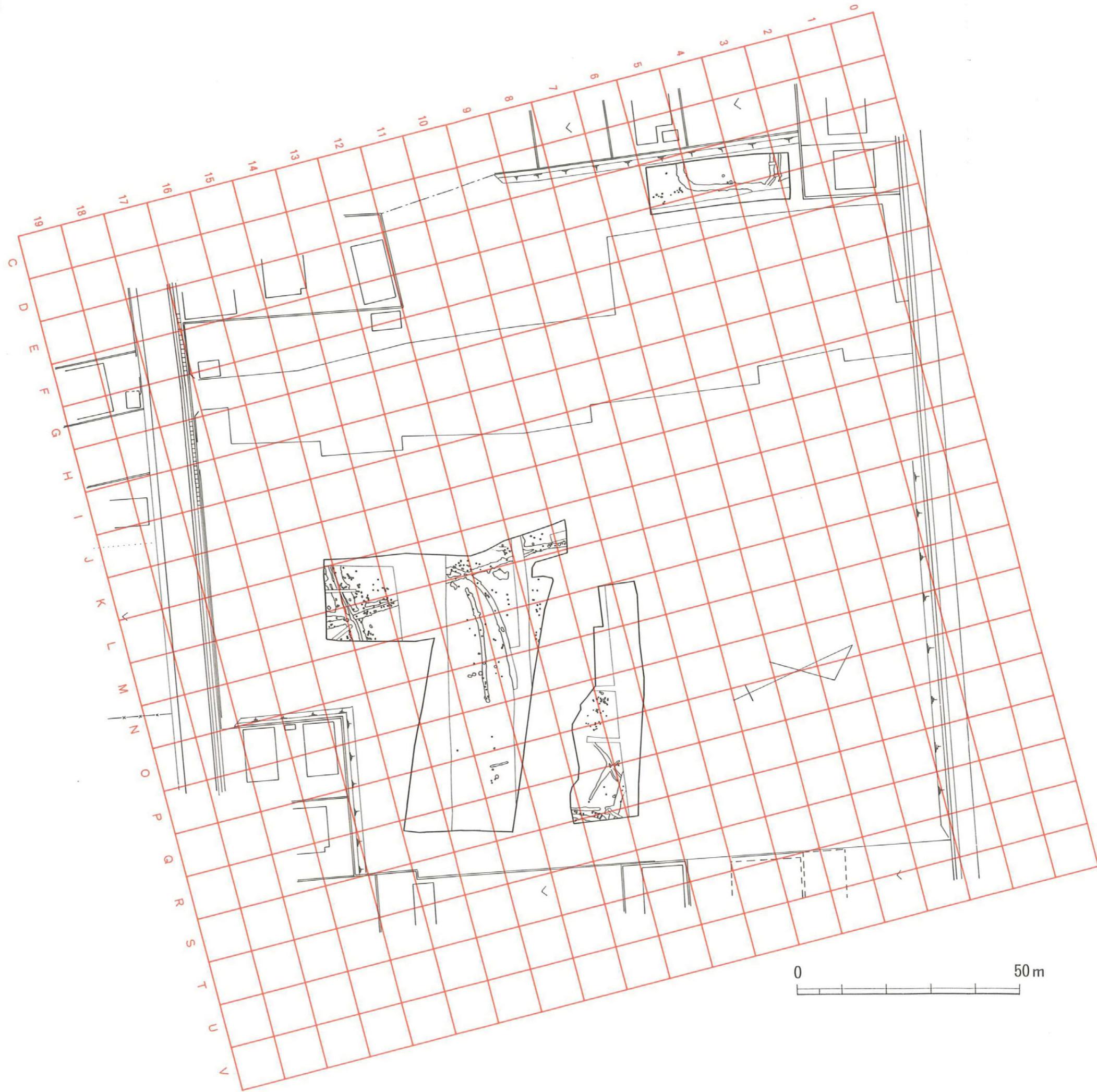
SD-3 [第4・8・9・18図]

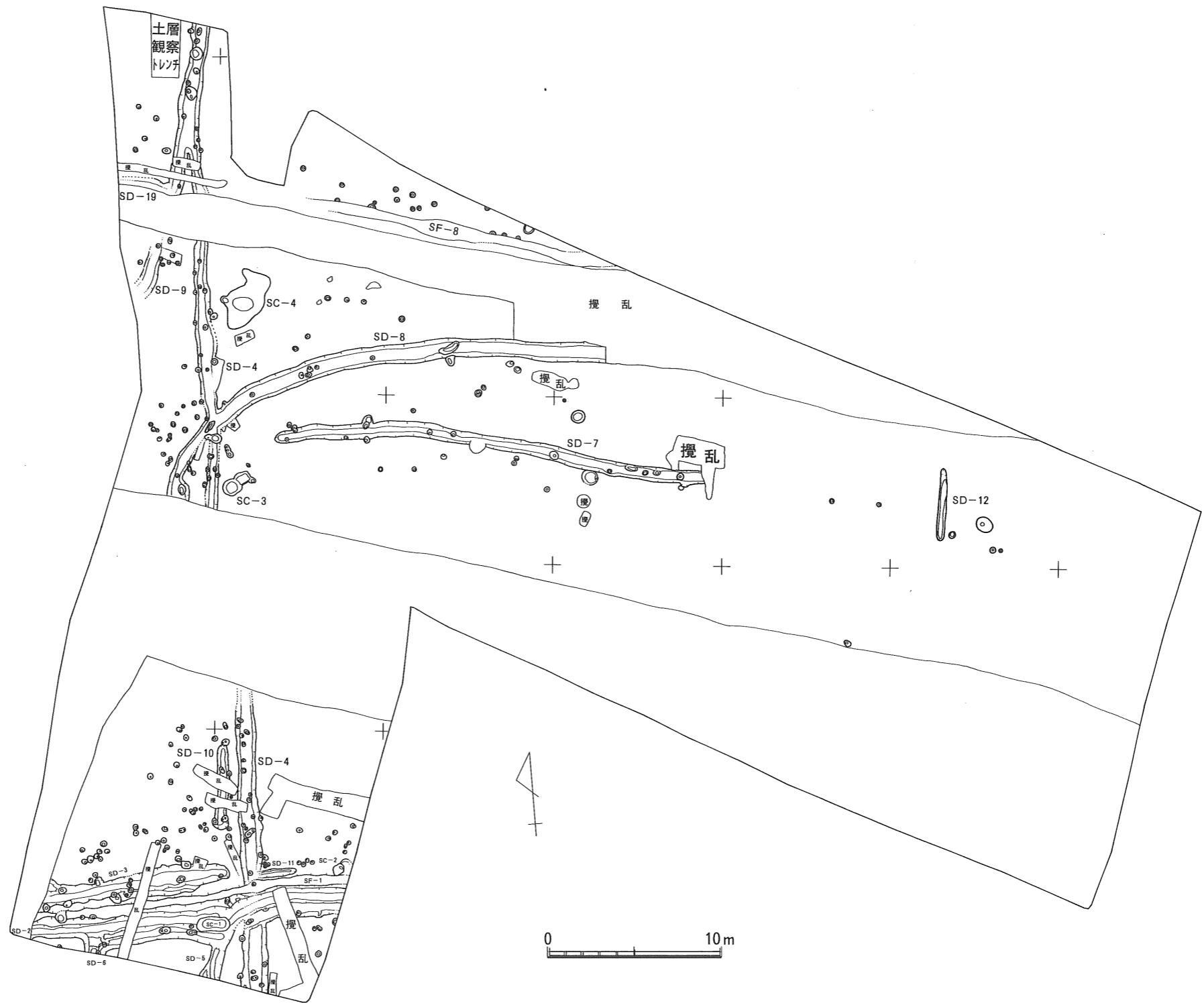
SF-1を挟んでSD-2と平行に走る、長さ約11m、幅1.0~1.8m、深さ0.46~0.8mの溝である。断面形は、SD-2と同じ裾の広い台形を呈しており、主軸の方向はN-86°-Eである。埋土は下半分がType Aで、上層から中層にかけて文明降下軽石の堆積がみとめられる。また、礫や軽石が多く含まれている。遺物は、最上層から薩摩焼の擂鉢片（18C代）が1点、下層から土師器の壺・小皿片が各1点ずつ出土している。

SD-4 [第4・5・7・9・12・13図]

調査区の北端から南端へとほぼ直線的に縦走する溝である。一部攪乱を受けているが、長さ約57.5m、幅0.6~1.5m、深さ0.2~0.4mと推定される。なお、この溝の埋没後に、SD-9・19が作られている。断面形は基本的に幅の広いU字形であるが、方形平底になっている部分も

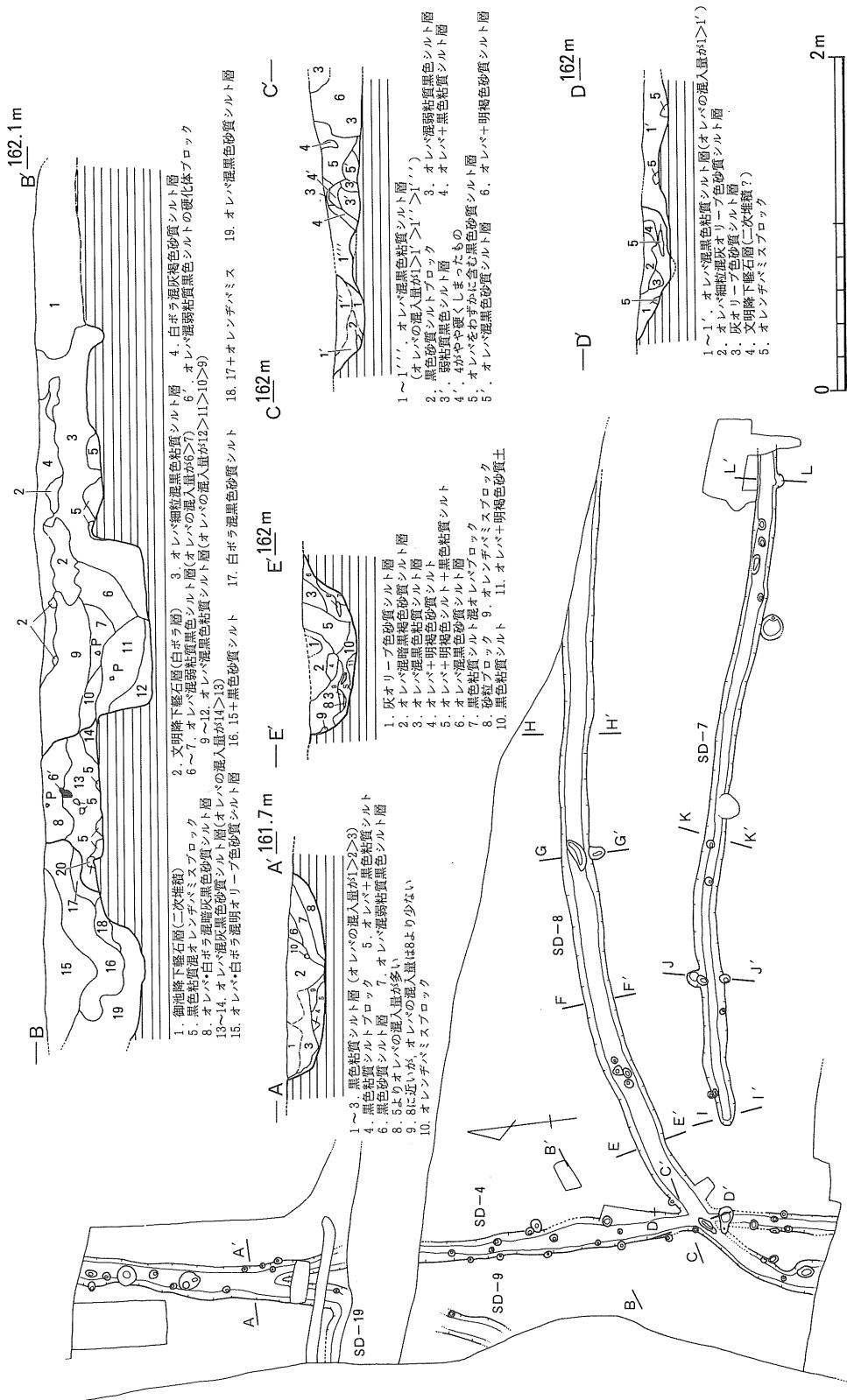
第3図 天神原遺跡 グリッド配置図

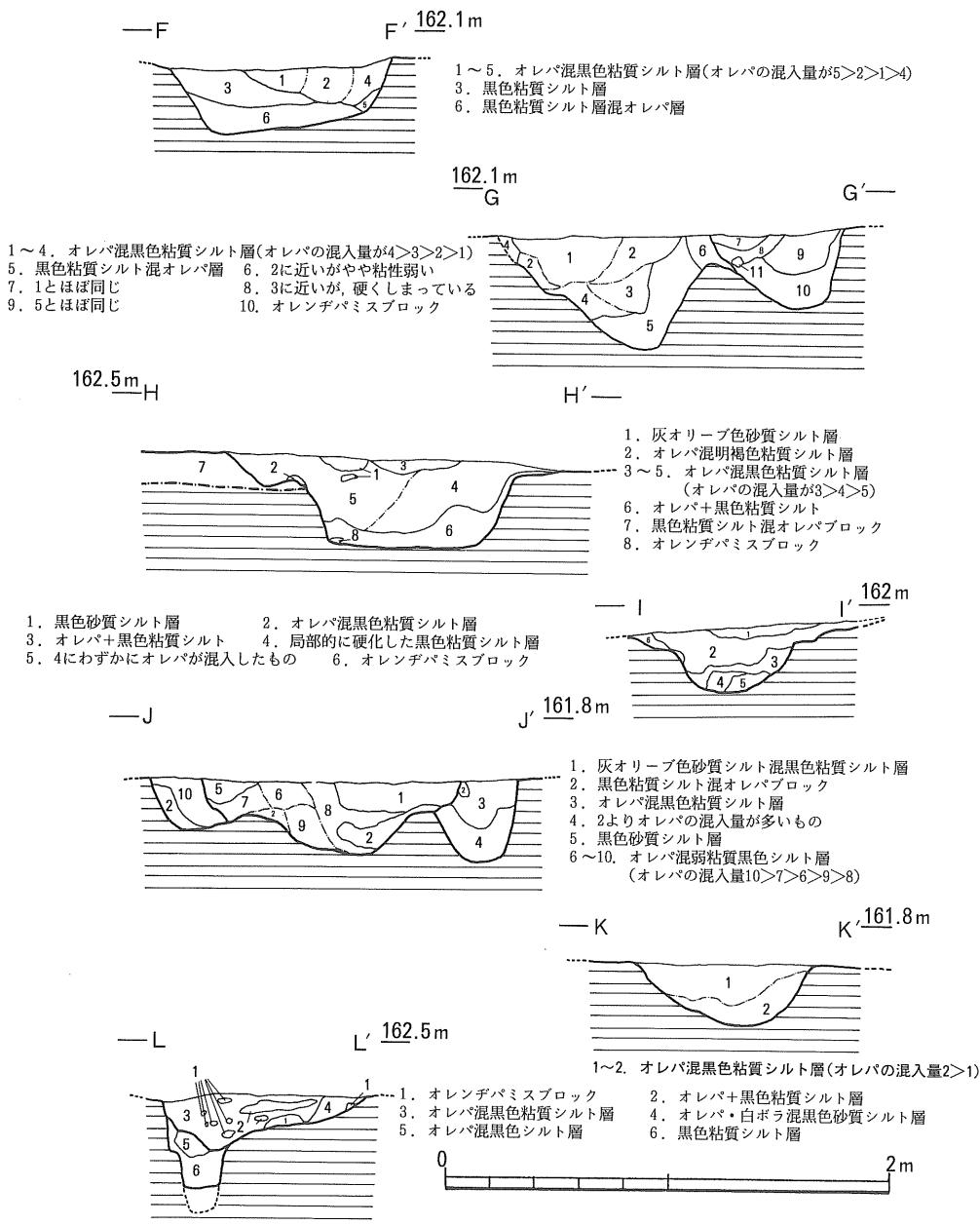




第4図 天神原遺跡（第1調査区）遺構分布図

第5図 第1調査区（北半部）検出遭構土層断面図（I）





第6図 第1調査区（北半部）検出遺構土層断面図（II）

ある。埋土はT Y P e Aで、主軸方向はN-2°-Wである。上層から土師器・小皿片が2点、中層から須恵器・壺の肩部片1点、土師器・坏片7点、小皿片5点、下層から土師器・高台付碗2点、土師器・坏片9点、小皿片14点、用途不明の銅製品1点が出土している。

#### SD-5 [第4・8・9図]

S F-1と一部並走する、円弧状の溝である。長さ約10.5m、幅1.0m、深さ0.38~0.42mで、主軸の方向はN-20°-E~N-88°-Eである。断面は、南・東側の法面がほぼ真っ直ぐ立上がり、北・西側の法面がやや傾斜しながら立上がる不整台形を呈している。埋土はT Y P e Aであるが、中層に文明降下軽石が堆積している。また、西端のコーナー部分でSD-2を切り、埋没段階ではSC-1に切られている。なお、南端部では、北側に向かって降りる階段状の硬化面が、埋土中及び第V-b層上面にみとめられる。遺物は全く含まれていない。

#### SD-6 [第4・8・9図]

今回検出したのは、長さ約1.1m、幅1.3m、深さ0.4mの落ち込みであるが、調査対象区域外へと延びているため、全貌は不明である。断面の観察では、東側法面のみがしっかりと確認でき、西側部分が曖昧であるため、SD-6の西側で局部的にみとめられる硬化面などともあわせて、この溝を切って作られた別の遺構が存在した可能性も考えられるが、今回の調査では明確に区分することができなかった。埋土はT Y P e Aで、ほとんど埋没した段階で降った文明降下軽石が最上層に堆積している。出土遺物はない。

#### SD-7 [第4・6・14図]

SD-8の内側に位置する溝で、やや蛇行しながらN-75°-W方向に延びている。長さ25.5m、幅0.7~1.0m、深さ0.25~0.32mで、断面形はSD-4同様U字形を呈している。埋土はT Y P e Aである。東端は攪乱を受けているが、西端部は意図的に閉じられたような印象を受ける。遺物は、中層から同安窯系青磁碗片と土師器・小皿片がそれぞれ1点ずつ出土している。

#### SD-8 [第4~6・15~17図]

N-85°-W方向に約18m直進した後、9(m)Rのカーブを描きながら南西方向へと進む溝である。東端・南端が攪乱を受けているため全体像はつかめないが、何らかの区画を意図するような機能も考えられよう。長さ29m、幅0.7~1.2m、深さ0.26~0.33mで、断面形はU字形、埋土はT Y P e Aである。規模や形態などはかなりSD-7に類似している。なお、途中でSD-4によって切られている。遺物は、上層から薩摩焼の碗(18C代)が1点、土師器・坏片9点、小皿片7点が、下層から硬質砂岩製磨石1点、土師器・坏片16点、小皿片21点が出土している。

#### SD-9 [第4図]

今回の調査では局部的にしか検出できなかったが、SD-4埋没後に作られており、途中からSD-19が派生していると考えられる。長さ約3.0m、幅0.8~1.0m、深さ0.3mで、攪乱のため接点は不明であるが、N-22°-E方向に延びてSD-4に接続していたようである。断面形は浅いU字形、埋土はT Y P e Aである。出土遺物なし。

#### SD-10 [第4・7図]

SD-4とほぼ平行に走る、長さ約5.0M、幅0.6~0.9M、深さ0.26Mの小溝である。この長さ

で完結しているので、溝状遺構よりも土壙の範疇に含まれるかもしれない。埋土はT Y P e Aで、主軸の方向はN-7°-Eである。遺物はみとめられない。

#### S D - 11 [第4・9図]

これもS D - 10と同じような小溝で、S D - 4を切っている。長さ約2.2m、幅0.4~0.5m、深さ0.3m、T Y P e Aの埋土で、主軸の方向はN-85°-Eである。出土遺物なし。

#### S D - 12 [第4図]

長さ約4.3m、幅0.4~0.5m、深さ0.25m、主軸方向N-8°-Eの小溝である。埋土はT Y P e Aで、断面形はS D - 10・11と同様に、浅いU字形を呈している。出土遺物なし。

#### S D - 19 [第4・5図]

S D - 4埋没後に作られた、S D - 9から派生している小溝である。半分は攢乱を受けて破壊されており、今回検出したのは長さ約2.2m、幅0.7m、深さ0.3mのみである。N-75°-W方向に延びて調査区外へと続いているが、S D - 9とともに方形に区画する機能を果たす溝であった可能性もある。断面形態及び埋土は、S D - 4・9と同じである。出土遺物なし。

### <道路状遺構>

#### S F - 1 [第4・8~11図]

S D - 2・3・5に伴う道路状遺構で、5層の硬化面を確認している。平均的な規模は、長さ約18.5m、幅0.3~0.7mで、各硬化層の検出面（第V-b層上面）からの高さは約0.35~0.8mである。各面ともほぼ平坦であるが、凹凸の激しい部分やブロック状に点在しているところもあり、それぞれの使用時期によって、若干様相が異なるようである。主軸方向はN-87°-Eで、調査区外へ延びているようであるが、調査区の西端部分ではかなり硬化面の形成が退化していることから、遺構としての中心部は今回検出した部分の東側であると推定される。遺物なし。

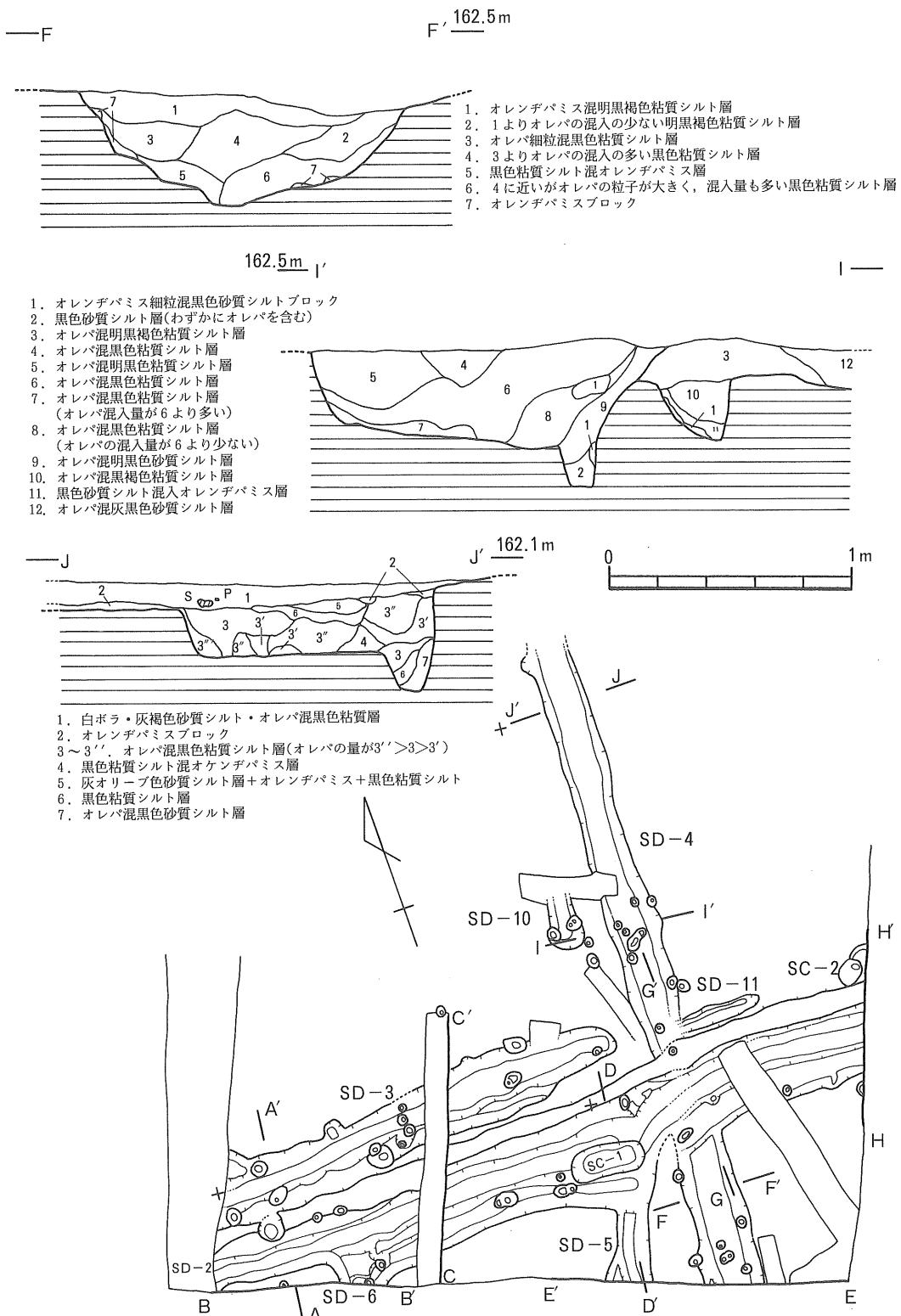
#### S F - 8 [第4図]

調査区の北端部をN-74°-W方向へ走行する黒色粘質シルトの硬化体である。東端は攢乱を受けて消失しており、西端はブロック状になりながら消滅している。長さ約18.0m、幅0.5~1.1mで、検出面からの高さは約0.05mである。T Y P e Aを埋土にもつ柱穴を切っていることから、少なくともそれ以降の時期の道路と思われる。出土遺物なし。

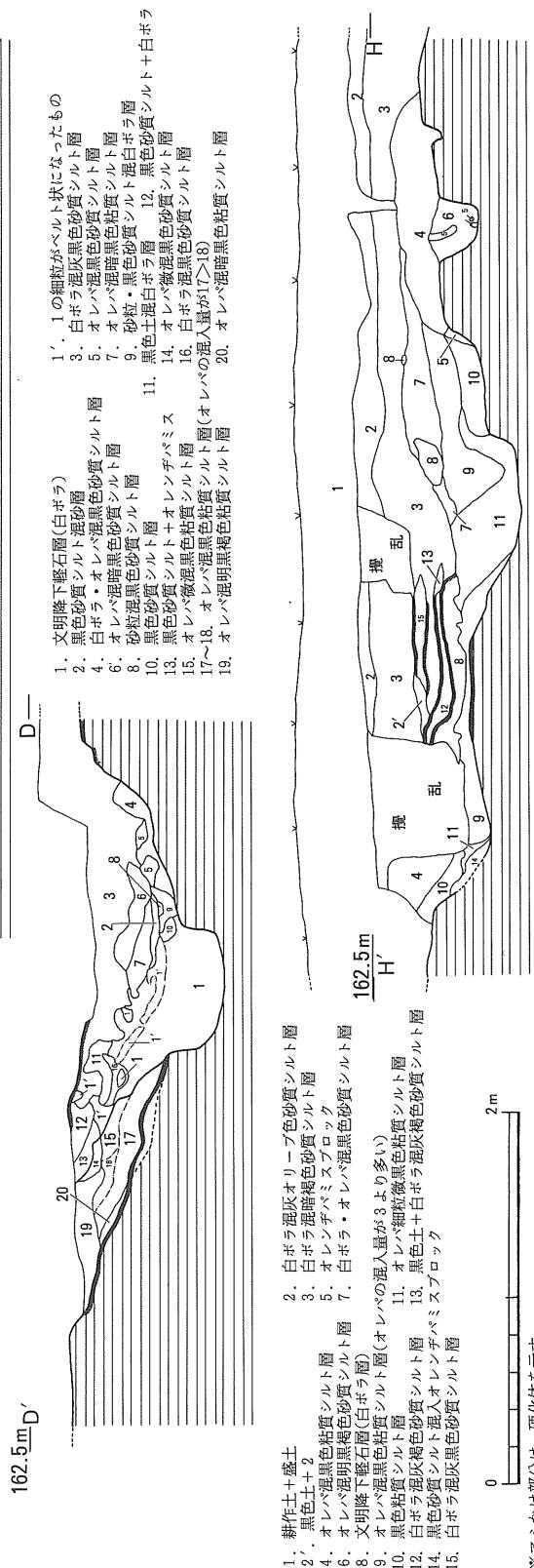
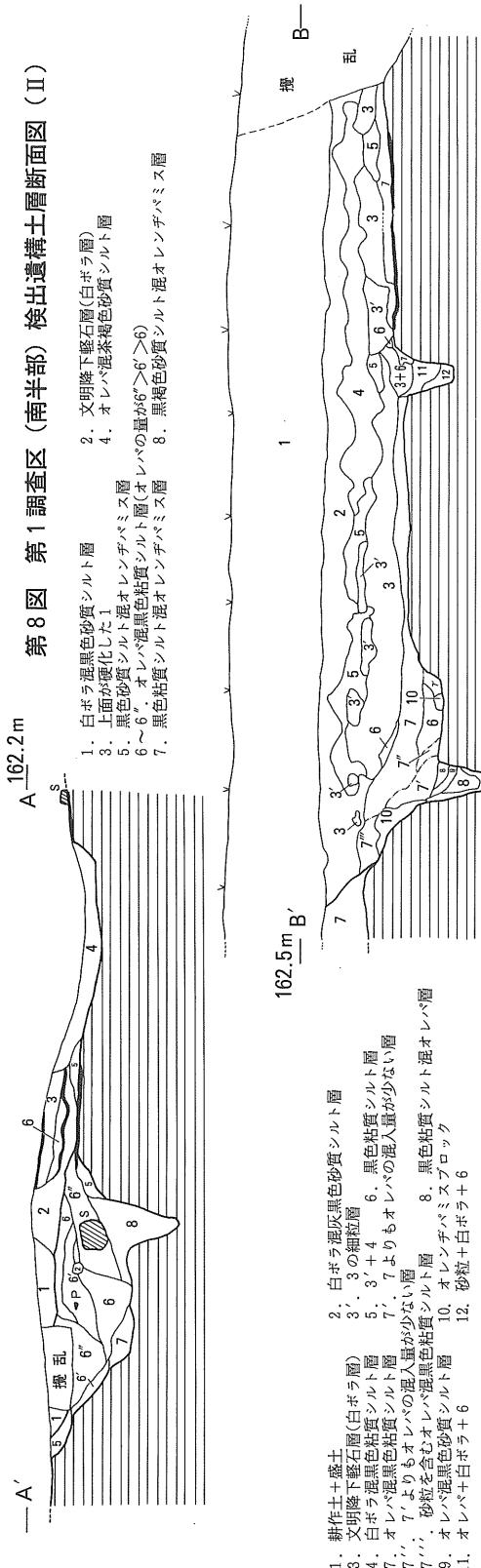
### <土 坑>

#### S C - 1 [第4・8図]

S D - 2・5を切って作られた楕円形の土坑である。長軸2.0m、短軸約0.85m、深さ約0.8mで、主軸の方向はN-86°30'-Wである。法面がほぼ真っ直ぐに立ち上がる平底の土坑で、用途等は不明であるが、文明降下軽石が中層から下層にかけてびっしりと堆積している点や、S D - 5からS C - 1に向けて降りる階段状の硬化面が確認されている点などから、何らかの特殊土壙である可能性を示唆しておきたい。遺物はみとめられない。



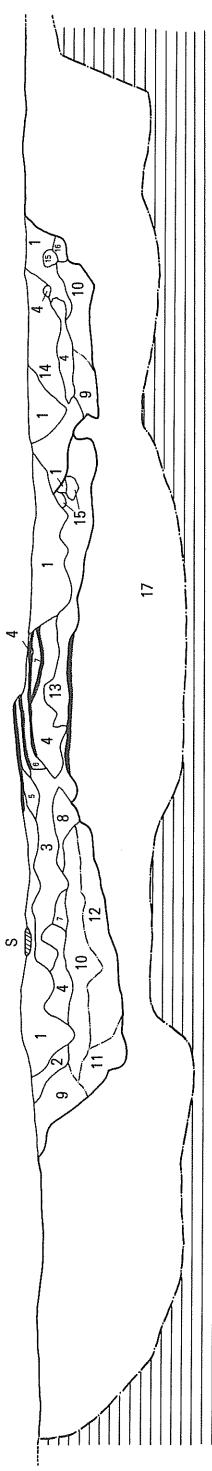
第7図 第1調査区（南半部）検出遺構土層断面図（I）



※アミかけ部分は、硬体を示す。

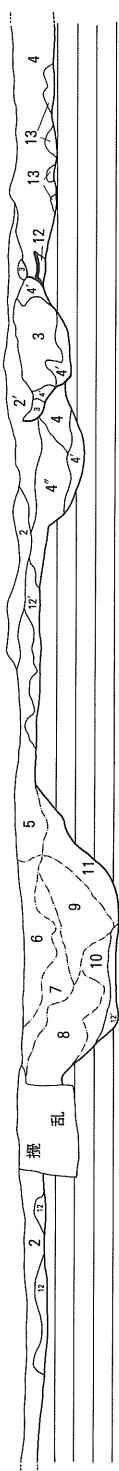
—C

C 162.4 m



—E

E 162.7 m



第9図 第1調査区(南半部)検出構土層断面図(III)

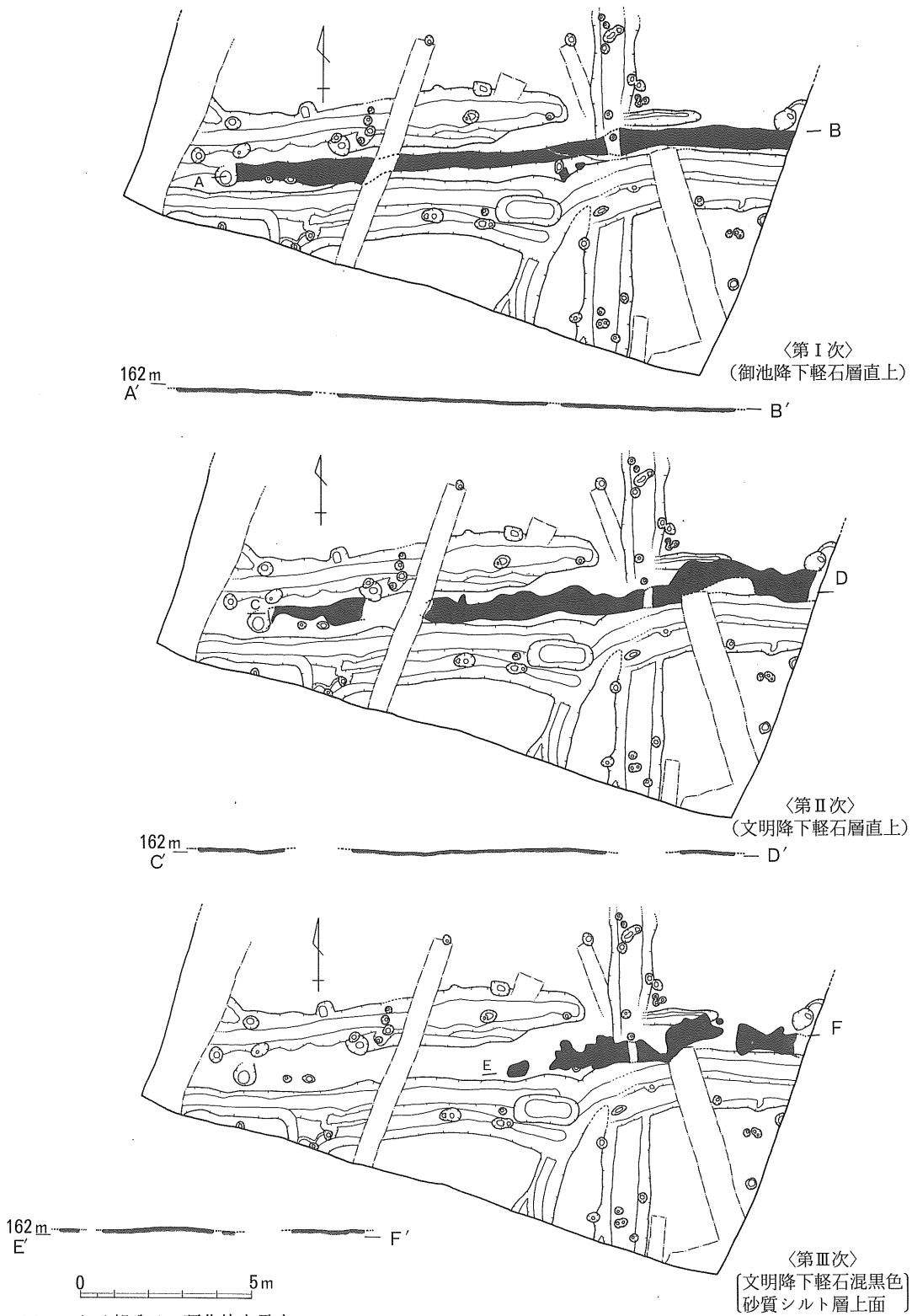
1～3. オレバ混黒色粘質シルト層(オレバの混入量が11.7>9.9)  
4. 白ガラ・オレバ混黒色粘質シルト層  
5. 白ボラ程灰黒色粘質シルト層  
6. オレバ混黒色粘質シルト層  
7. オレバ混黒色粘質シルト層  
8. 5が硬くしまったものの層  
9. 文明降下隆石層(白ボラ層)  
10. 7+8  
11. 白ボラ程灰黒色粘質シルト層  
12. 黑色粘質シルト層  
13. 6とほぼ同じ層  
14. オレバ混黒色粘質シルト層  
15. 銛分の充當したオレバ混黒色粘質シルト層  
16. 黑色土層ナレンヂベミス層  
17. 2のやや硬化的もの  
18. 1のやや硬化的もの  
19. オレバミス層  
20. オレンヂベミス層

\*アミかけ部分は、硬化体を示す。

1～3. オレバ混黒色粘質シルト層(オレバの混入量が11.7>9.9)  
4. 白ガラ・オレバ混黒色粘質シルト層  
5. 白ボラ程灰黒色粘質シルト層  
6. オレバ混黒色粘質シルト層  
7. オレバ混黒色粘質シルト層  
8. 5が硬くしまったものの層  
9. 文明降下隆石層(白ボラ層)  
10. 7+8  
11. 白ボラ程灰黒色粘質シルト層  
12. 黑色粘質シルト層  
13. 6とほぼ同じ層  
14. オレバ混黒色粘質シルト層  
15. 銛分の充當したオレバ混黒色粘質シルト層  
16. 黑色土層ナレンヂベミス層  
17. 2のやや硬化的もの  
18. 1のやや硬化的もの  
19. オレバミス層  
20. オレンヂベミス層

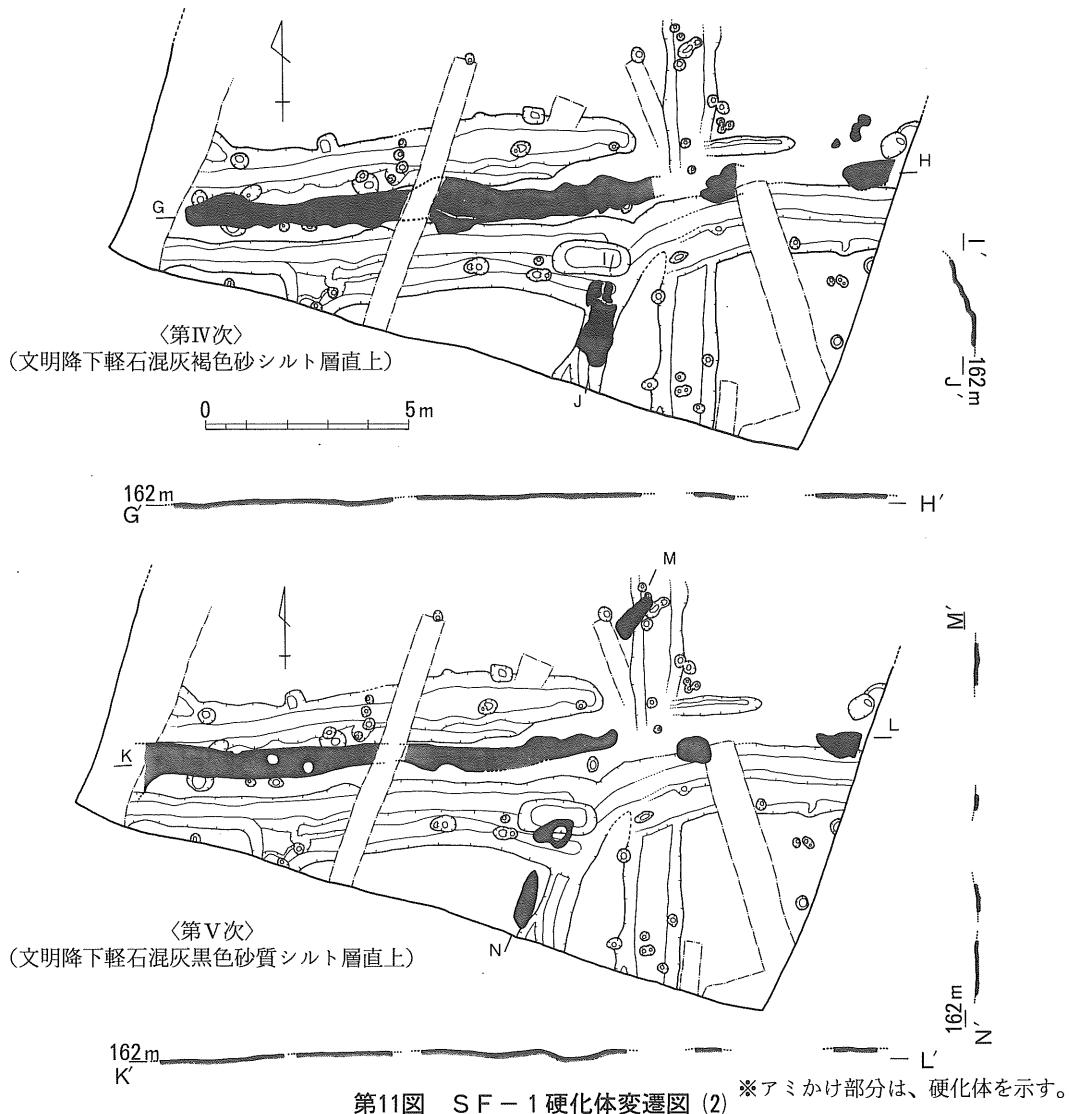
1～3. オレバ混黒色粘質シルト層(オレバの混入量が11.7>9.9)  
4. 白ガラ・オレバ混黒色粘質シルト層  
5. 白ボラ程灰黒色粘質シルト層  
6. オレバ混黒色粘質シルト層  
7. オレバ混黒色粘質シルト層  
8. 5が硬くしまったものの層  
9. 文明降下隆石層(白ボラ層)  
10. 7+8  
11. 白ボラ程灰黒色粘質シルト層  
12. 黑色粘質シルト層  
13. 6とほぼ同じ層  
14. オレバ混黒色粘質シルト層  
15. 銛分の充當したオレバ混黒色粘質シルト層  
16. 黑色土層ナレンヂベミス層  
17. 2のやや硬化的もの  
18. 1のやや硬化的もの  
19. オレバミス層  
20. オレンヂベミス層

※アミかけ部分は、硬化体を示す。



\*アミかけ部分は、硬化体を示す。

第10図 SF-1 硬化体変遷図(1)



第11図 SF-1 硬化体変遷図 (2)

#### SC-2 [第4・8図]

S F - 1 際で検出した橢円形の土坑である。長軸1.0m, 短軸約0.8m, 深さ約0.25mで, 主軸の方向はN-1°-Wである。埋土は下層がT y p e Aで, 中層に文明降下軽石のブロックがみとめられる。出土遺物なし。

#### SC-3 [第4・19図]

S D - 4 際の直径約1.0m, 深さ約0.5mの土坑である。T y p e Aの埋土をもつ。埋土中の括遺物として, 土師器・小皿片が4点, 肥前系の碗(18C前葉～中葉), 頁岩製砥石, 土師器・坏片がそれぞれ1点ずつ出土している。

#### SC-4 [第4図]

S D - 4 際の不整形土坑である。長軸3.7m, 短軸2.1m, 深さ約1.4mで, 主軸の方向はN-56°

30' - E である。法面は凹凸が激しく、底部はほぼ平らになっている。埋土は Type A である。出土遺物なし。

#### <柱 穴> [第20図]

今回の調査では、約200箇の柱穴が検出されているが、掘立柱建物跡と確認できるものはなかった。なお、柱穴中からの出土遺物としては、土師器・坏片 8 点、小皿片 4 点があげられる。

#### 2) 包含層内出土遺物 [第21～25図]

##### ①陶磁器類

第IV層（包含層）中から出土している陶磁器類の総数は14点で、内訳は舶載磁器類が3点、国産磁器が1点、国産陶器が10点である。詳細は一括して出土遺物一覧表に表記したので割愛するが、これらの年代を概観すると、舶載青磁や瀬戸・美濃系陶器を中心とする13C～16C中葉頃（第1期）と、薩摩焼が大量に流通する18C～19C代（第2期）の2時期に大別することができるようである。こうした時期的傾向は、遺構の年代観ともほぼ符合しており、当遺跡の存続期間や一時的な断絶を傍証する上で、これらは少量ながらもきわめて有用な資料である。

##### ②土師器

ここに掲載した土師器の総数は、坏51点、小皿60点であるが、図化不能の破片まで加えると、約300点ほどが出土している。各類ごとの割合は、下記の通りである。

坏 (51点)				小 皿 (60点)			
I 類	6%	I' 類	2%	I 類	2%	I' 類	0%
II 類	24%	II' 類	31%	II 類	40%	II' 類	20%
III 類	10%	III' 類	27%	III 類	17%	III' 類	21%

	坏	小皿
板状圧痕あり	39%	22%
板状圧痕なし	61%	78%

総じて、各類の割合や II・II' 類が他に卓越している傾向は、坏・小皿とともにほぼ共通しているが、板状圧痕が残存しているものの割合に着目すると、小皿で板状圧痕のみとみられるものは、坏と比べてかなり限定された少数因子となるようである。

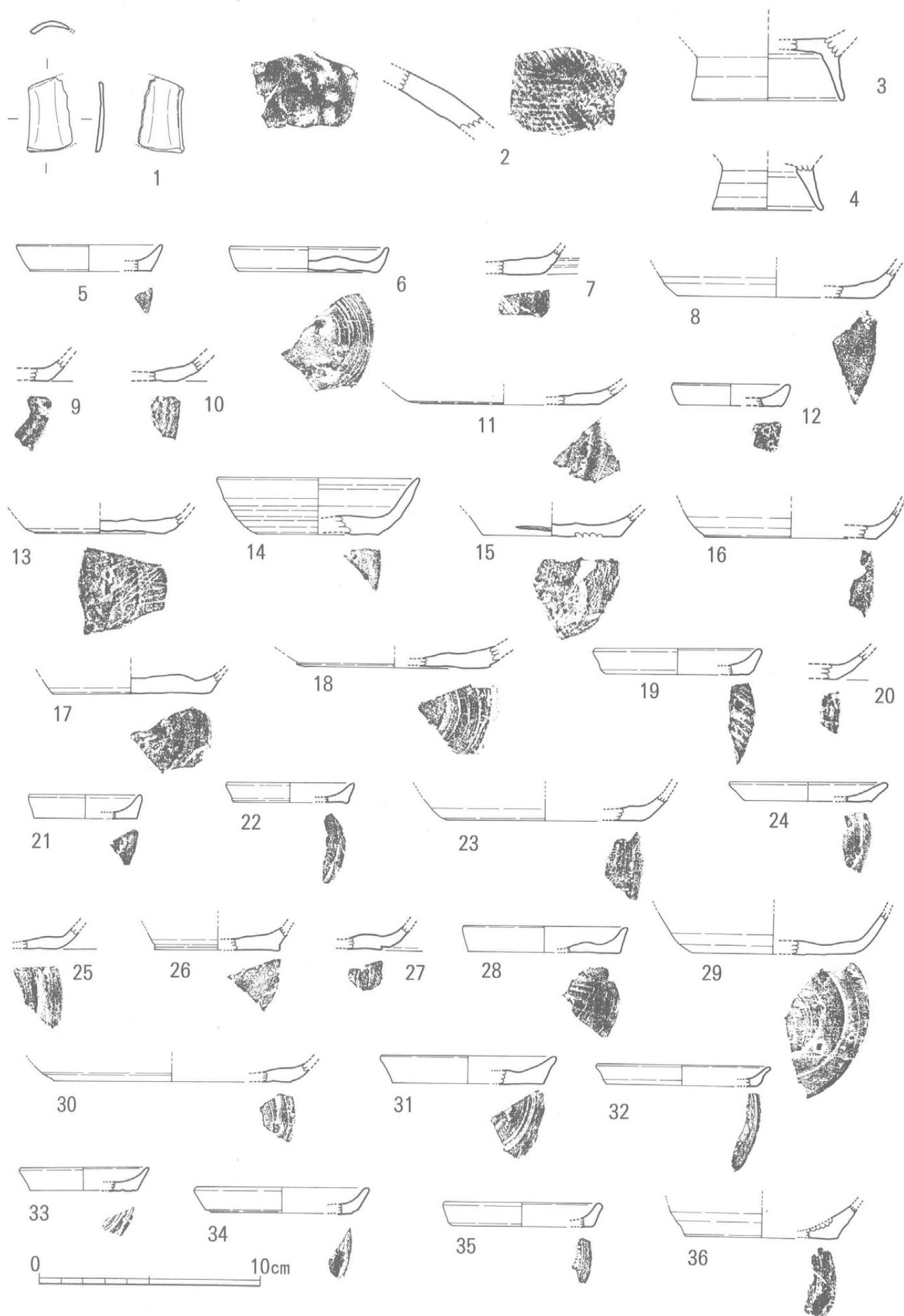
##### (3)石製品

軽石製品と滑石製石鍋片が、それぞれ1点ずつ出土している。軽石製品は円柱状に加工されており、その形状及び上部端の欠損状況から、軽石製五輪塔の一部（風輪の臍部）と推測される。滑石製石鍋は、鍔が口縁部の直下に削り出されるタイプのものである。体部の立ち上がりが直線的というよりは、やや内湾気味であるものの、森田氏による石鍋編年の C 群<sup>\*</sup> に相当すると考えられ、時期としては13C～15C後半頃に比定できるようである。

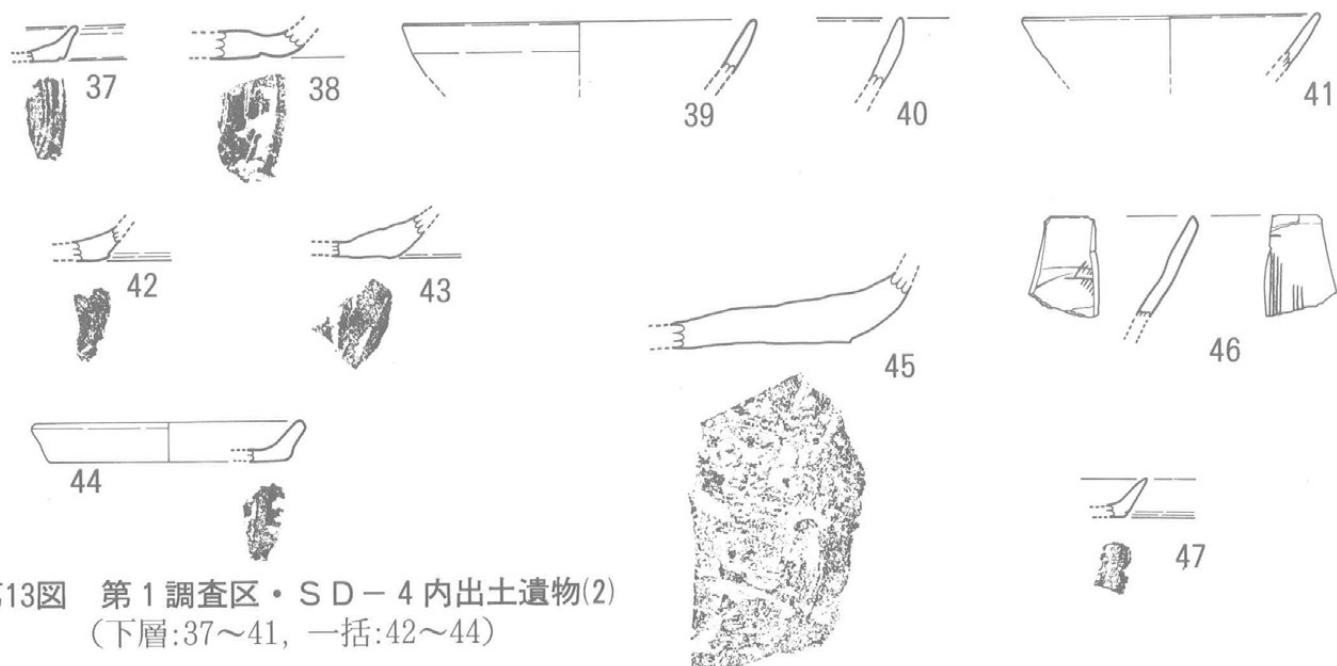
##### ④土製品

直径約2.5mの突起物状の土製品である。側面には焼成前に施された穿孔が3ヶ所みとみられる。二次転用品の可能性もあるが、用途等は全く不明である。

\* 森田 勉 1983年 「滑石製容器」 『仏教芸術』 148 仏教芸術学会

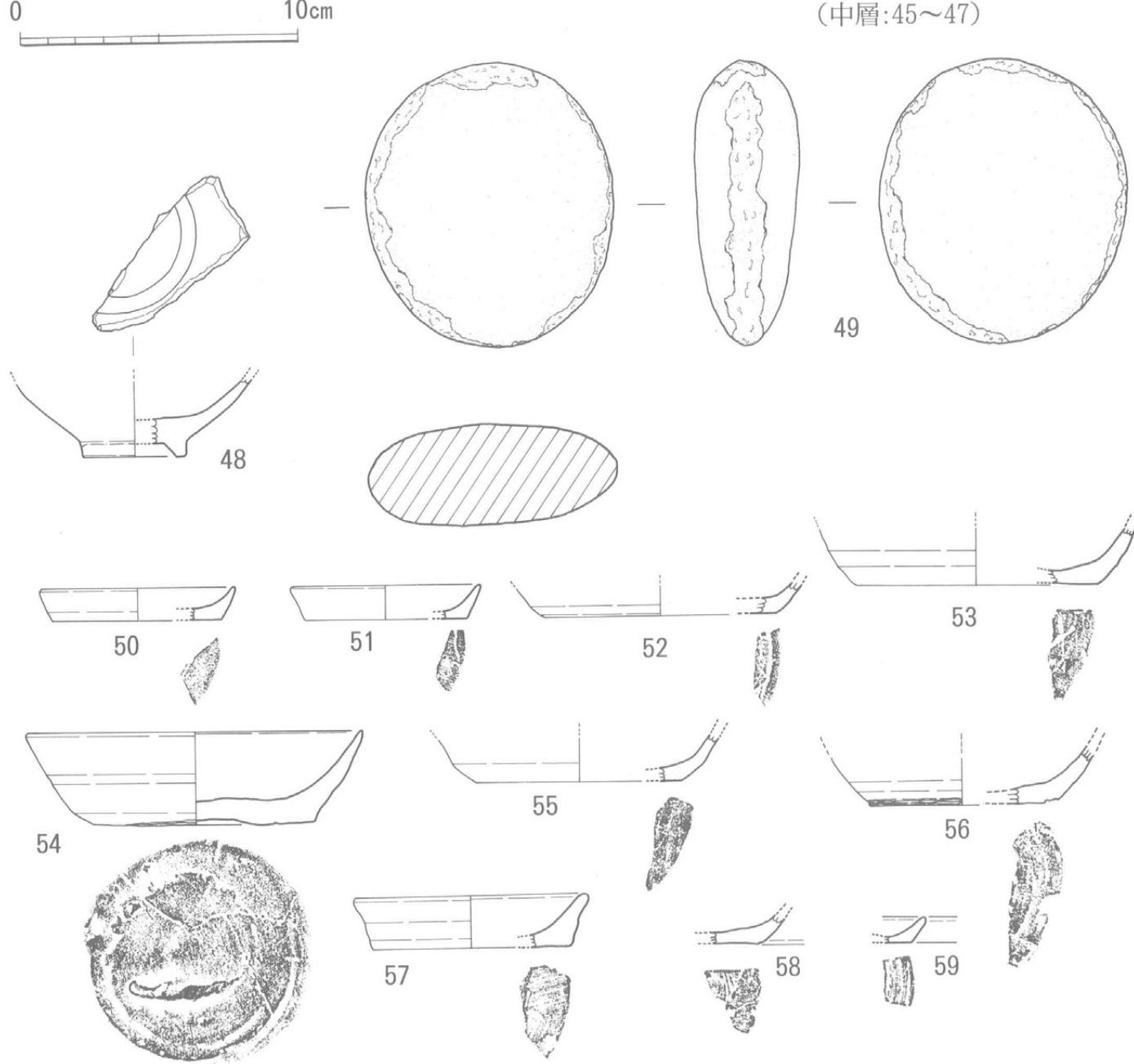


第12図 第1調査区・SD-4 内出土遺物(1) (上層:5・6, 中層:2・7~18, 下層:1・3・4・19~36)

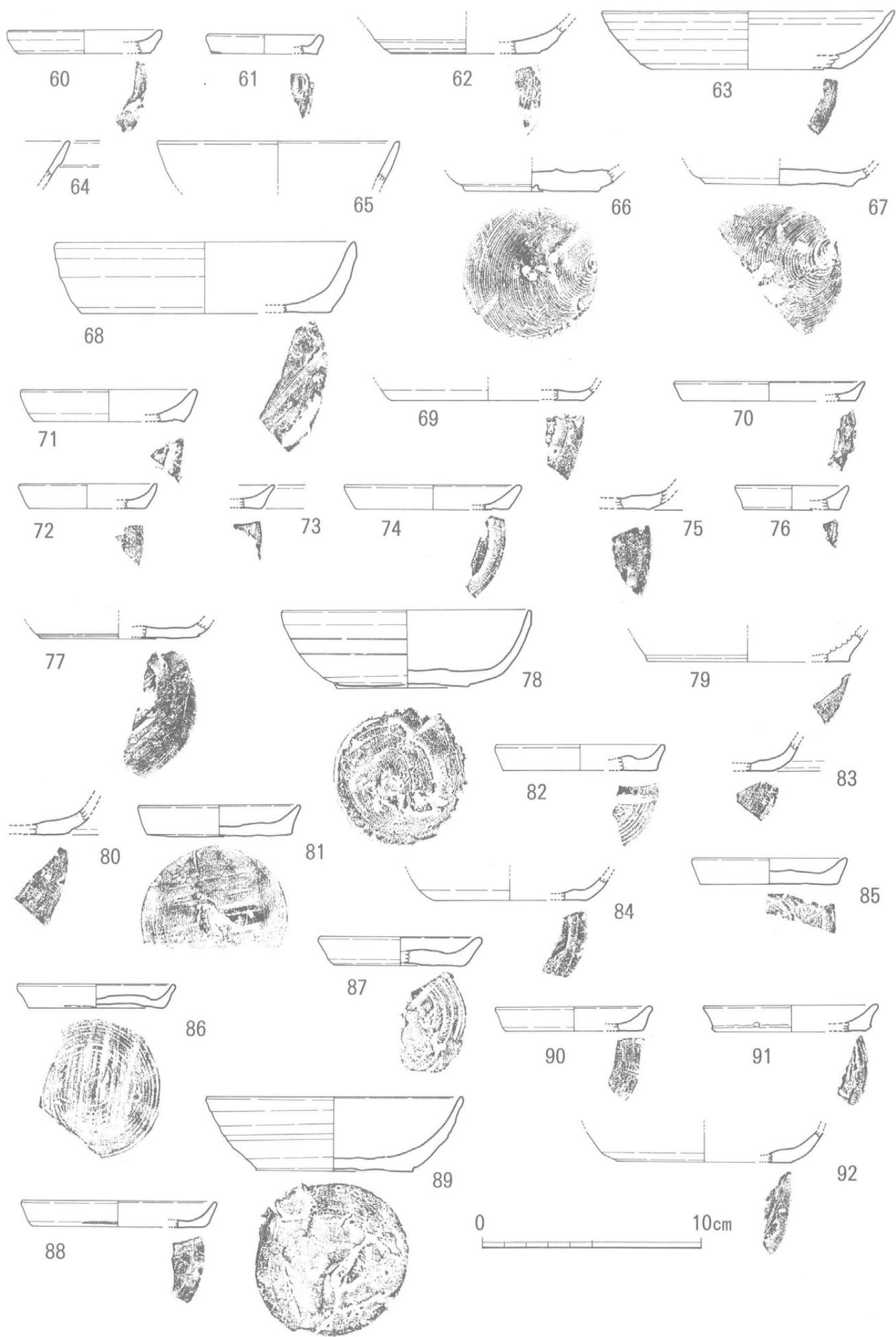


第13図 第1調査区・SD-4内出土遺物(2)  
(下層:37~41, 一括:42~44)

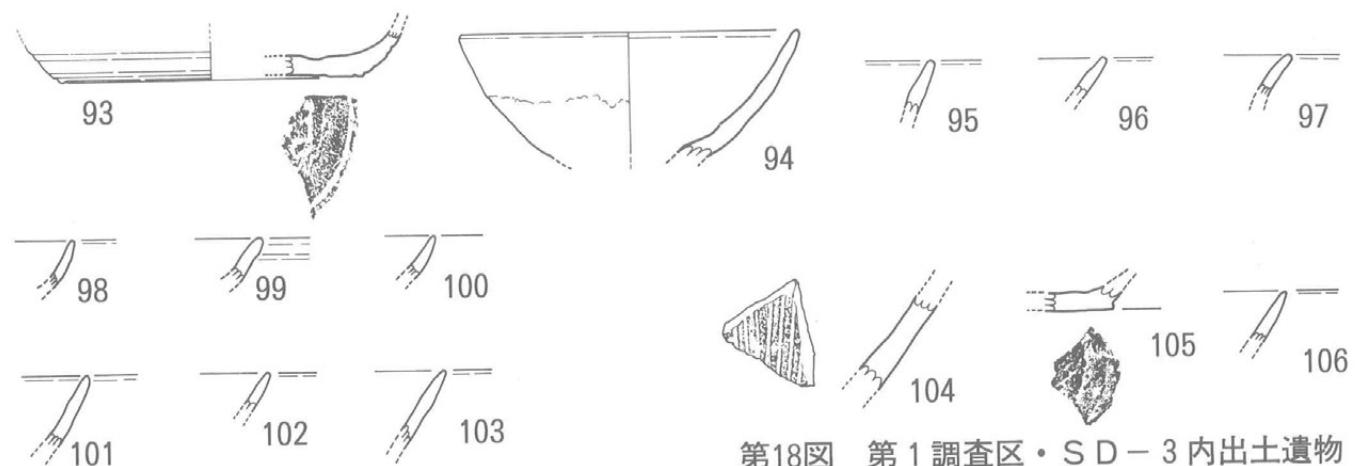
第14図 第1調査区・SD-7内出土遺物  
(中層:45~47)



第15図 第1調査区・SD-8内出土遺物(1) (上層:48・50~59, 下層:49)

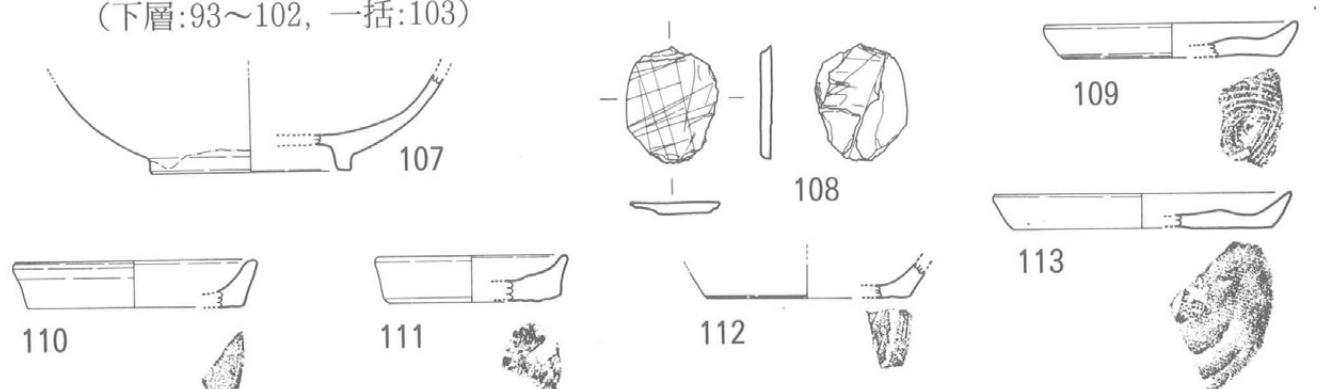


第16図 第1調査区・SD-8内出土遺物(2)  
(上層:60~65, 下層:66~92)

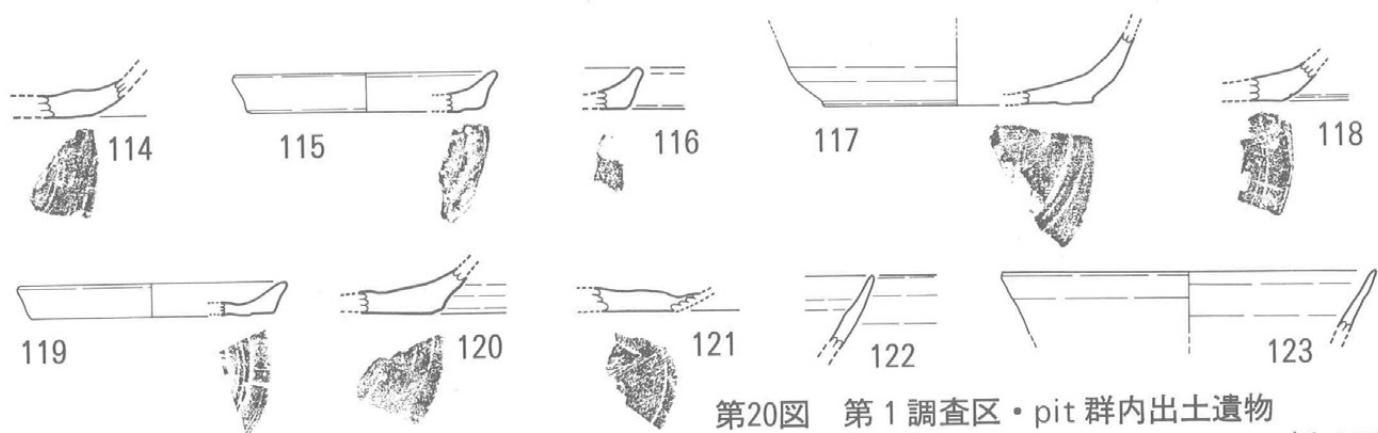


第17図 第1調査区・SD-8内出土遺物(3)  
(下層:93~102, 一括:103)

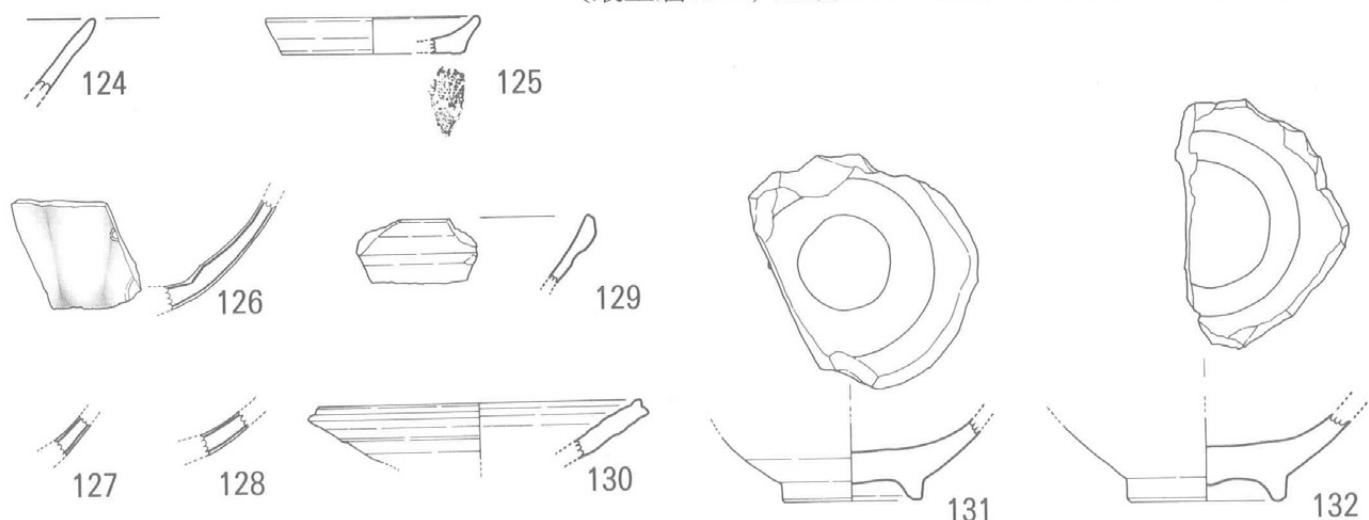
第18図 第1調査区・SD-3内出土遺物  
(最上層:104, 下層:105・106)



第19図 第1調査区・SC-3内出土遺物 (一括:107~113)

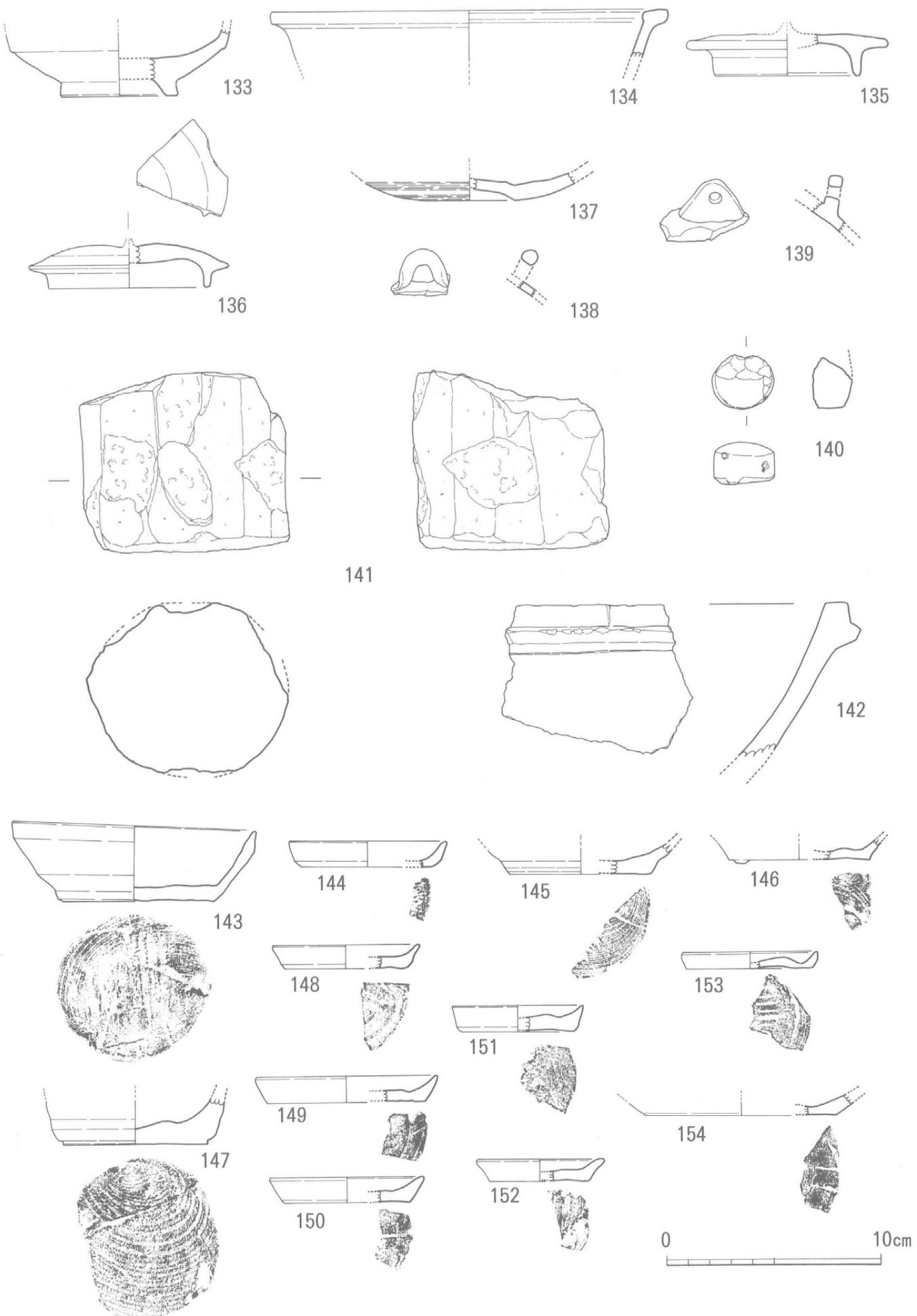


第20図 第1調査区・pit群内出土遺物  
(最上層:114, 上層:115~118, 中層:119~124, 一括:125)

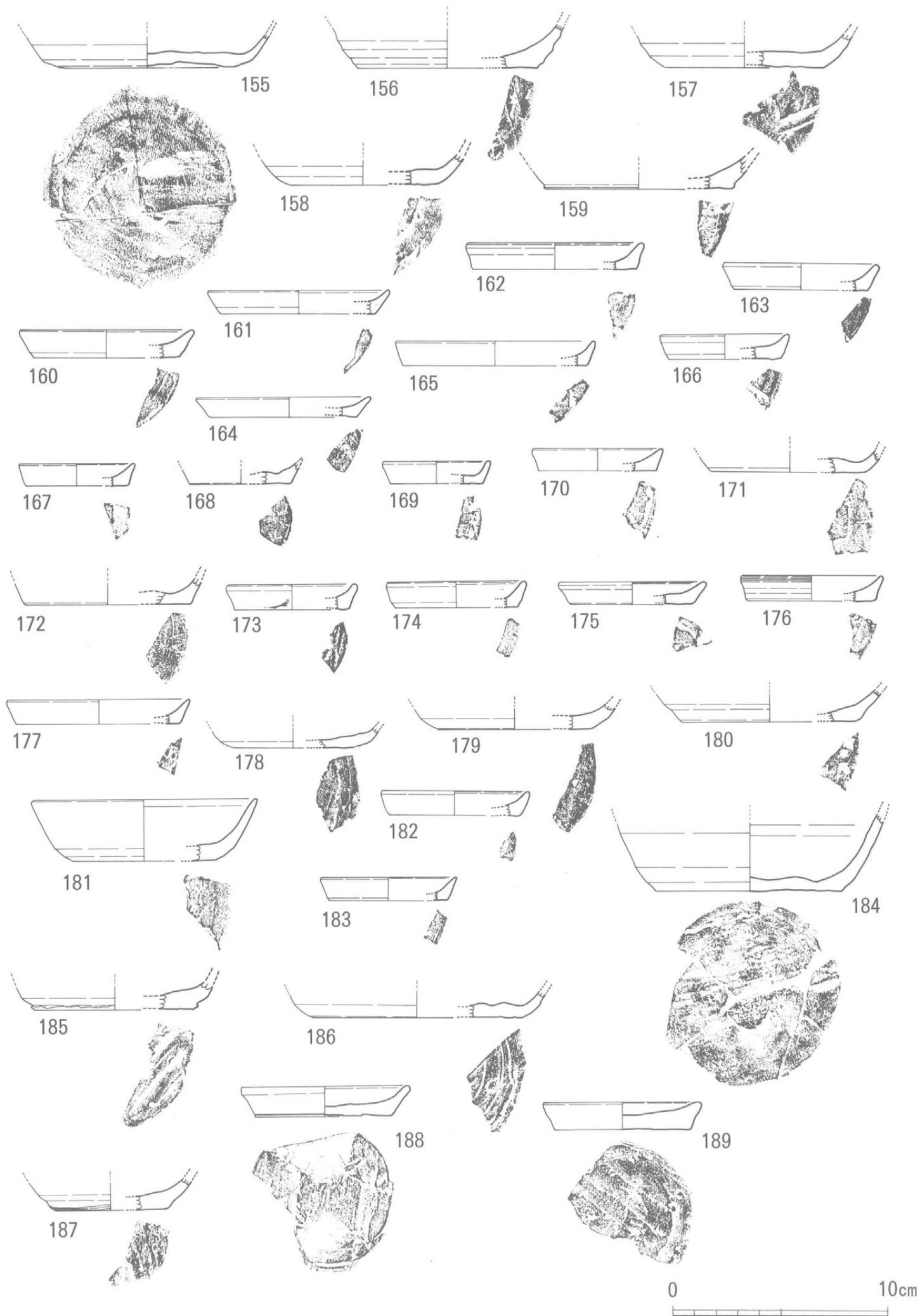


第21図 第1調査区・包含層内出土遺物(1)

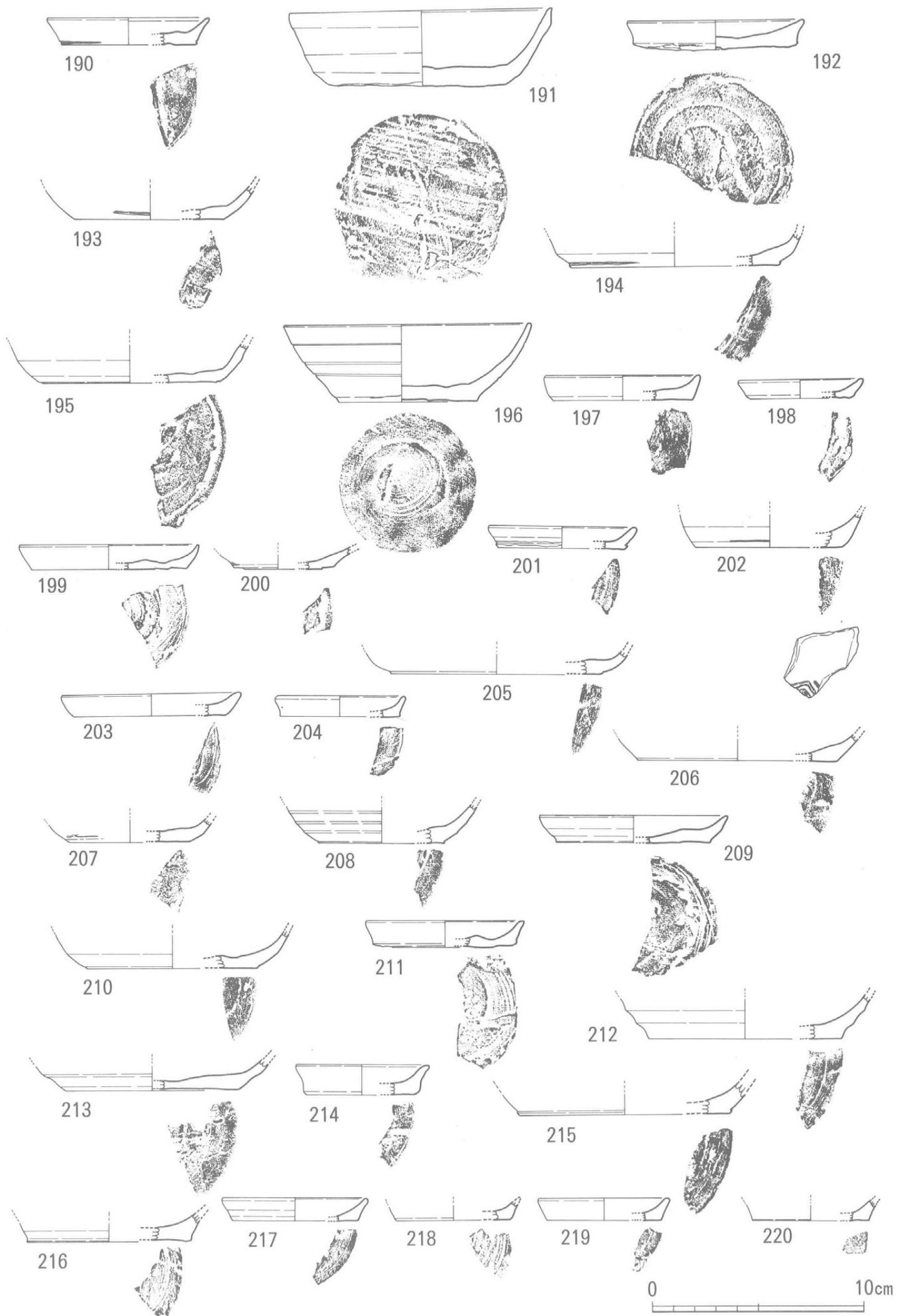
0 10cm



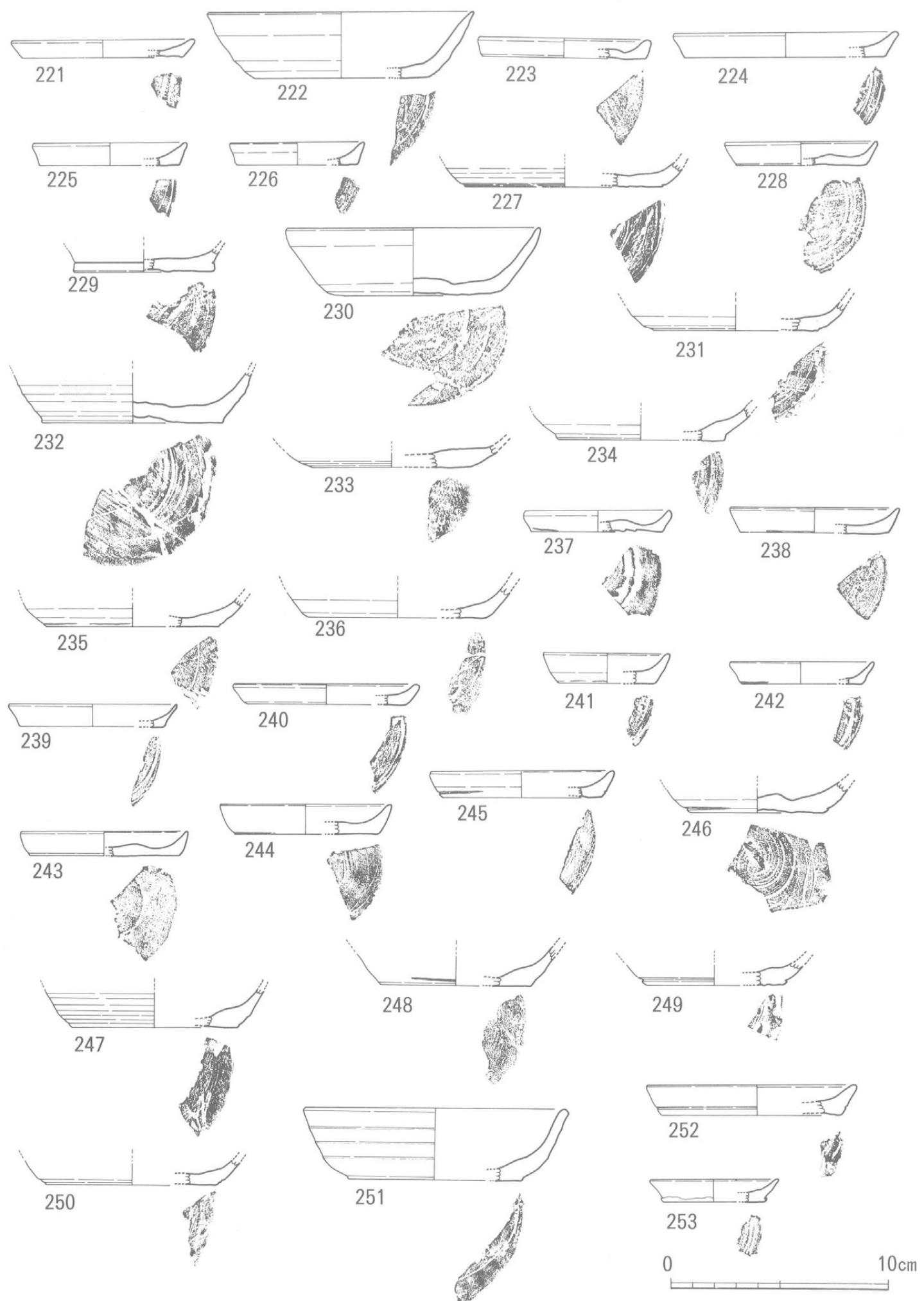
第22図 第1調査区・包含層内出土遺物(2)



第23図 第1調査区・包含層内出土遺物(3)



第24図 第1調査区・包含層内出土遺物(4)



第25図 第1調査区・包含層内出土遺物(5)

番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考	番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考
1	L-11(SD-4)	下層	金属製品	銅製品		46	M-12(SD-7)	中層	青磁・碗	樹脂文、同安窯系	12C~13C
2	M-15(〃)	中層	須恵器・壺			47	N-12(〃)	"	土師器・小皿		II'bHP4類
3	L-12(〃)	下層	土師器・高台付碗			48	L-12(SD-8)	上層	陶器・碗	蛇ノ目輪剥き、蘆摩焼	18C代
4	L-11(〃)	"	"			49	M-11(〃)	下層	磨石	硬質砂岩製	
5	" (〃)	上層	土師器・小皿		II bHP1類	50	O-11(〃)	上層	土師器・小皿		II bHP1類
6	" (〃)	"	"		"	51	M-11(〃)	"	"		"
7	" (〃)	中層	"		II aHP1類	52	M-12(〃)	"	"		"
8	M-15(〃)	"	土師器・壺		II bHP1類	53	M-11(〃)	"	土師器・壺		II bSP6類
9	M-14(〃)	"	"		"	54	" (〃)	"	"		II bSM6類
10	" (〃)	"	"		"	55	O-11(〃)	"	"		II'aSP4類
11	M-15(〃)	"	"		"	56	" (〃)	"	"		II'aSM6類
12	" (〃)	"	土師器・小皿		"	57	N-11(〃)	"	土師器・小皿		III aHP4類
13	" (〃)	"	土師器・壺		II bSP1類	58	M-12(〃)	"	土師器・壺		III bHP1類
14	" (〃)	"	"		II bSP4類	59	" (〃)	"	土師器・小皿		"
15	M-14(〃)	"	"		III bHP1類	60	M-11(〃)	"	"		III bHP4類
16	M-15(〃)	"	土師器・小皿		"	61	M-12(〃)	"	"		"
17	" (〃)	"	"		III bHP4類	62	M-11(〃)	"	土師器・壺		III bHM6類
18	" (〃)	"	"		III'bHP1類	63	" (〃)	"	"		"
19	L-12(〃)	下層	"		II aHP1類	64	" (〃)	"	"		HP1類
20	" (〃)	"	土師器・壺		II bHP1類	65	O-11(〃)	"	"		SP1類
21	" (〃)	"	土師器・小皿		"	66	M-11(〃)	下層	"		I bHM4類
22	M-12(〃)	"	"		II bSP4類	67	N-11(〃)	"	"		"
23	L-11(〃)	"	土師器・壺		II bHM4類	68	L-12(〃)	"	"		II aSP1類
24	L-12(〃)	"	土師器・小皿		"	69	" (〃)	"	"		II bHP1類
25	L-11(〃)	"	"		II bSM1類	70	M-11(〃)	"	土師器・小皿		"
26	" (〃)	"	"		II'bHP1類	71	" (〃)	"	"		"
27	" (〃)	"	"		II'bHP4類	72	L-12(〃)	"	"		"
28	M-15(〃)	"	"		III aHP1類	73	M-12(〃)	"	"		"
29	L-11(〃)	"	土師器・壺		III aSM6類	74	M-11(〃)	"	"		"
30	" (〃)	"	"		"	75	" (〃)	"	土師器・壺		II bSP4類
31	L-12(〃)	"	土師器・小皿		"	76	" (〃)	"	土師器・小皿		II bSM6類
32	" (〃)	"	"		"	77	L-12(〃)	"	土師器・壺		II'aHP1類
33	" (〃)	"	"		"	78	M-12(〃)	"	"		II'bHP4類
34	L-11(〃)	"	"		"	79	" (〃)	"	土師器・小皿		"
35	" (〃)	"	"		"	80	M-11(〃)	"	土師器・壺		II'bSP4類
36	M-12(〃)	"	土師器・壺		III bSM6類	81	" (〃)	"	土師器・小皿		III aHP1類
37	L-12(〃)	"	土師器・小皿		III'bHP1類	82	" (〃)	"	"		"
38	" (〃)	"	土師器・壺		III'bSP6類	83	M-12(〃)	"	土師器・壺		III bHM6類
39	" (〃)	"	"		HP1類	84	M-11(〃)	"	"		III bSP4類
40	" (〃)	"	"		"	85	" (〃)	"	土師器・小皿		III bSM4類
41	" (〃)	"	"		"	86	" (〃)	"	"		III'aHP1類
42	一括(〃)		"		II bHP1類	87	" (〃)	"	"		"
43	" (〃)		"		"	88	" (〃)	"	"		III'aHM6類
44	" (〃)		土師器・小皿		"	89	" (〃)	"	土師器・壺		III'bHP1類
45	O-12(SD-7)	中層	須恵質・捏鉢 東播系			90	L-12(〃)	"	土師器・小皿		III'bHP4類

第1表 第1調査区出土遺物一覧表(1)

番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考	番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考
91	M-11(SD-8)	下層	土師器・小皿		III'bHP4類	136	N-11	IV	陶器・土瓶蓋	薩摩焼	18C~
92	M-12(〃)	"	土師器・坏		III'bSP6類	137	N-12	"	陶器・土瓶底部	スス付着、薩摩焼	18C代~
93	N-11(〃)	"	"		"	138	N-11		陶器・土瓶把手	薩摩焼	19C代
94	M-12(〃)	"	"		HP1類	139	一括		"	"	"
95	" (〃)	"	"		"	140	M-14	IV	土製品	側面に穿孔あり	
96	" (〃)	"	土師器・小皿		"	141	一括		輕石製品	空輪の臍部か?	
97	" (〃)	"	"		HP4類	142	L-12	IV	石鍋	滑石製	
98	M-11(〃)	"	"		"	143	O-12	"	土師器・坏		I aHM1類
99	" (〃)	"	"		HM4類	144	L-14	"	土師器・小皿		I bHP1類
100	" (〃)	"	"		"	145	M-11	"	土師器・坏		I bHM1類
101	" (〃)	"	土師器・坏		SP1類	146	L-14	"	"		I bSM4類
102	" (〃)	"	土師器・小皿		"	147	L-11	"	"		I'bSM6類
103	一括(〃)		"		SP4類	148	M-11	"	土師器・小皿		II aHP1類
104	L-15(SD-3)	最上層	陶器・擂鉢	薩摩焼	18C代	149	一括		"		"
105	L-14(〃)	下層	土師器・小皿		II bHP1類	150	L-12	IV	"		"
106	" (〃)	"	土師器・坏		HP4類	151	N-11	"	"		"
107	一括(SC-3)		磁器・碗	肥前系	18C前葉~中葉	152	L-11	"	"		II aHP4類
108	" (〃)		砥石	頁岩製		153	M-11	"	"		II aHM6類
109	" (〃)		土師器・坏		I'bHP1類	154	"	"	土師器・坏		II aHM8類
110	" (〃)		土師器・小皿		II bHP3類	155	L-12	"	"		II aSP4類
111	" (〃)		"		II bSP4類	156	M-11	"	"		II aSM4類
112	" (〃)		"		II'bHP1類	157	L-12	"	"		II aSM6類
113	" (〃)		"		IIIbSP4類	158	一括		"		II bHP1類
114	L-14(Pit)	最上層	土師器・坏		III'bSP4類	159	"		"		"
115	N-11(〃)	上層	土師器・小皿		II bHP1類	160	M-11	IV	"		"
116	M-14(〃)	"	"		"	161	M-14	"	土師器・小皿		"
117	N-11(〃)	"	土師器・坏		IIIbSM7類	162	一括	"	"		"
118	" (〃)	"			III'aHM7類	163	L-12	"	"		"
119	L-12(〃)	中層	土師器・小皿		II aHP1類	164	"	"	"		"
120	" (〃)	"	土師器・坏		II'bHP1類	165	一括	"	"		"
121	" (〃)	"			III'aHM5類	166	"		"		"
122	L-14(〃)	"	"		HM6類	167	"		"		"
123	" (〃)	"			SP4類	168	"		"		"
124	L-12(〃)	"	"		"	169	M-11	IV	"		"
125	一括(〃)		土師器・小皿		II bHP1類	170	"	"	"		"
126	M-15	IV	青磁・碗	鎬蓮弁文	13C~14C前葉	171	L-12	"	"		"
127	N-11	"	"	胎土が黒味強い	15C~16C前半	172	一括		土師器・坏		II bHP4類
128	一括		"	浅いタイプの碗?	16C中葉	173	"	IV	土師器・小皿		"
129	"		白磁・碗			174	"	"	"		"
130	"		陶器・おろし皿	瀬戸・美濃系	15C~16C	175	"	"	"		"
131	M-11	IV	陶器・碗	サメハダ、薩摩焼	19C~	176	"	"	"		II bHP6類
132	L-14	II	"	蛇ノ目輪剥き、薩摩焼	18C~19C	177	L-12	"	"		II bHM2類
133	N-11	IV	陶器・火入れ	蛇ノ目輪剥き、薩摩焼	18C代	178	"	"	土師器・坏		II bSP4類
134	N-12	"	陶器・鉢	薩摩焼	19C~	179	N-11	"	"		"
135	N-11	"	陶器・土瓶蓋	"	18C~	180	"	"	"		"

第2表 第1調査区出土遺物一覧表(2)

番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考	番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考
181	L-12	IV	土師器・坏		II bSM6類	218	一括		土師器・小皿		III bHP1類
182	一括		土師器・小皿		"	219	M-12	IV	"		"
183	"		"		"	220	L-12	"	"		"
184	O-11	IV	土師器・坏		II'aHP1類	221	M-12	"	"		III bHP4類
185	一括		"		"	222	M-11	"	土師器・坏		III bHP5類
186	M-12	IV	"		"	223	M-12	"	土師器・小皿		"
187	L-12	"	"		"	224	一括		"		III bHM6類
188	L-14	II	土師器・小皿		"	225	"		"		III bSP6類
189	M-14	IV	"		"	226	"		"		III bSM6類
190	N-11	"	"		"	227	L-10	IV	土師器・坏		III'aHP1類
191	L-12	"	土師器・坏		II'aHP4類	228	L-12	"	土師器・小皿		"
192	M-11	"	土師器・小皿		"	229	O-11	"	"		"
193	一括		土師器・坏		II'aHM4類	230	一括		土師器・坏		III'aHP4類
194	L-11	IV	"		II'aSP4類	231	M-11	IV	"		"
195	M-11	"	"		II'aSP6類	232	L-14	"	"		III'aHM4類
196	M-12	"	"		II'bHP1類	233	一括		"		III'aSM4類
197	M-11	"	土師器・小皿		"	234	L-12	IV	"		III'bHP1類
198	N-11	"	"		"	235	"	"	"		"
199	L-11	"	"		"	236	M-14	"	"		"
200	L-12	"	"		"	237	L-11	"	土師器・小皿		"
201	一括	"	"		II'bHP6類	238	一括	"	"		"
202	M-11	"	土師器・坏		II'bHM1類	239	M-11	"	"		"
203	M-12	"	土師器・小皿		II'bHM4類	240	L-14	"	"		"
204	M-11	"	"		II'bHM6類	241	L-12	"	"		"
205	L-11	"	土師器・坏		II' SP4類	242	M-12	"	"		"
206	N-11	"	"		"	243	L-12	"	"		"
207	L-12	"	"		"	244	L-11	"	"		III'bHP4類
208	M-11	"	"		II'bSP6類	245	M-11	"	"		"
209	"	"	"		II'bSP7類	246	L-11	"	土師器・坏		III'bHP6類
210	M-14	"	"		II'bSM6類	247	M-11	"	"		"
211	M-11	"	土師器・小皿		"	248	"	"	"		III'bHM6類
212	L-10	"	土師器・坏		IIIaHP1類	249	N-11	"	"		"
213	N-11	"	"		"	250	L-11	"	"		III'bSP4類
214	L-12	"	土師器・小皿		"	251	N-10	"	"		III'bSM6類
215	M-14	"	土師器・坏		IIIbHP1類	252	M-12	"	土師器・小皿		"
216	一括	"	"		"	253	M-11	"	"		"
217	L-12	"	土師器・小皿		"						

第3表 第1調査区出土遺物一覧表(3)

## 2. 第2調査区の内容

この地点は駐車場予定地であり、遺構検出面まで工事の影響が及ぶ可能性は低かったが、試掘の際に溝状遺構が確認されているので、その走行を確認するために面積約350m<sup>2</sup>の第2調査区を設定した。当区も第IV層上面までは重機で掘り下げ、それ以下の層について手作業による調査を実施したが、第IV層（遺物包含層）がさほど残存していなかったため、実質的には第V-b層上面で確認した溝状遺構の調査に終始した。

この調査区で検出した遺構は、溝状遺構5条、道路状遺構1条である。特にコの字形を呈した溝（SD-1）は、西側に延びて、方形に区画する役割を果たしていたと推察されるが、調査対象区域外へ続いているため、その全容を明らかにすることはできなかった。また、この溝状遺構に伴うとみられる道路状遺構が床面付近で検出されているほか、約20箇の柱穴が溝の法面およびその周辺部で確認されている。遺物は、溝状遺構内よりわずかに出土しているのみで、内区と推定される部分からの出土は皆無である。なお、当区で検出した遺構は、すべて第1調査区で示したType Aの埋土をもち、一部に文明降下軽石を含むものがみられる。

### 1) 遺構

#### ＜溝状遺構＞

##### SD-1 [第26~28図]

南北方向に約17.5m、西側方向にそれぞれ約6.5mずつ延びるコの字形をした溝である。幅員1.2~1.65m、深さ0.5~0.65mで、断面形はV字に近いU字形である。屋敷地等を区画するための溝と考えられるが、内区と推定される部分での柱穴の検出数は少ない。攪乱を受けているので不明確だが、北東端部がやや東側に振れて分岐しているようにもみえるので、同様の溝が東側に延びていた可能性も想定できる。埋土はType Aで、南北方向の軸はN-18°-Eである。遺物は出土していない。

##### SD-12 [第26・28図]

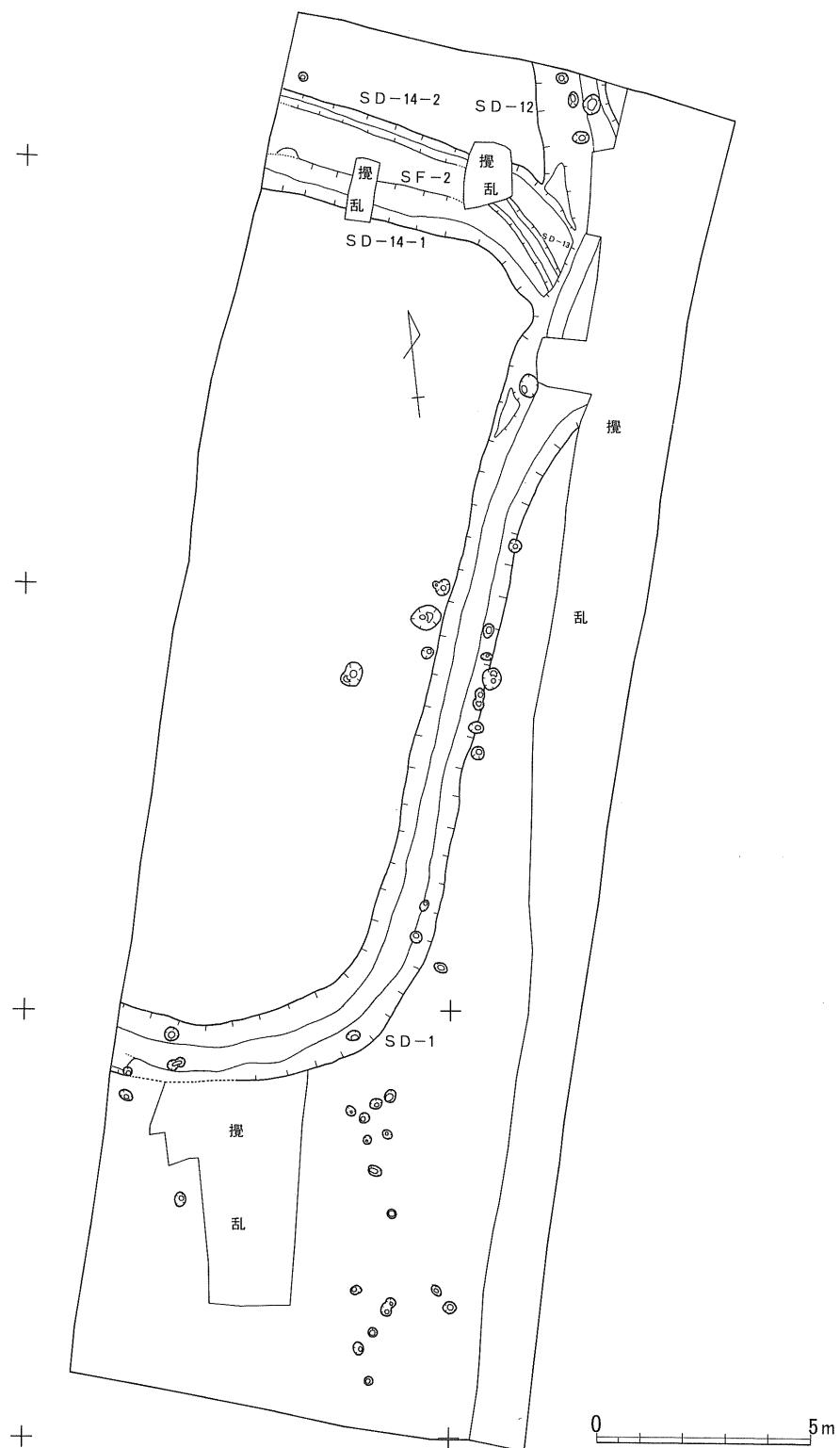
SD-1の北端を切って、N-6°-W方向に進む溝である。攪乱が著しく、今回の調査で確認したのは長さ約6.1m、幅1.7mのみである。深さは約0.7mで、断面形は中央部のやや盛り上がった逆台形状を呈している。やや蛇行しており、一部は東進する可能性もある。下層はType Aの埋土だが、中層には文明降下軽石が堆積している。出土遺物なし。

##### SD-13 [第26~28図]

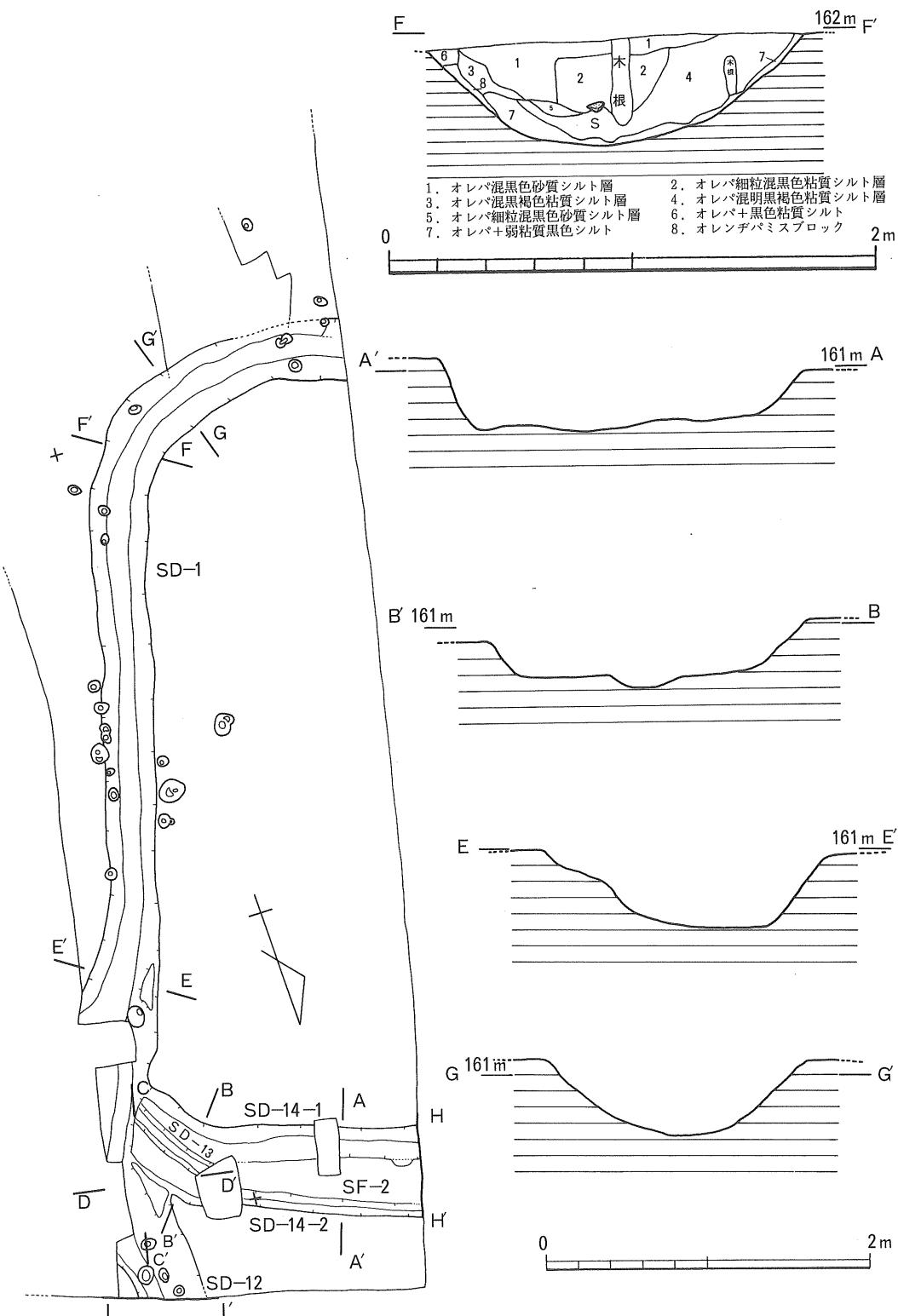
SF-2中央の窪みに対応すると考えられる小溝である。長さ約2.25m、幅0.4~0.5m、深さ約0.06mで、主軸の方向はN-59°30'-Wである。断面は浅いU字形、埋土はType Aである。なお、東側に向けて傾斜しているため、この溝の延長上にあると思われるSF-2中央の窪みは、オレンヂパミス混入黒色粘質シルト層中にみとめられる。出土遺物なし。

##### SD-14-1 [第26~29図]

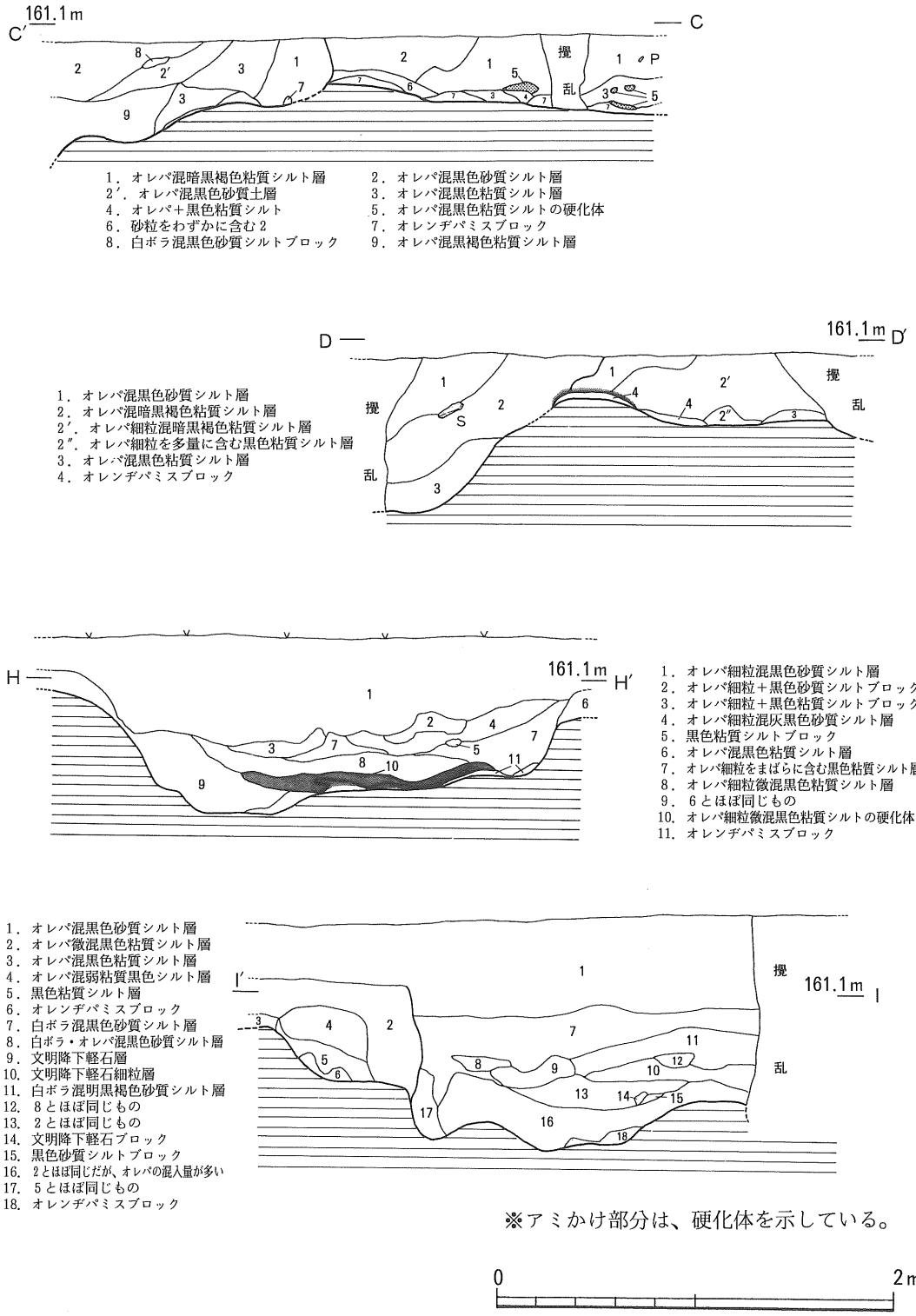
SF-2、SD-14-2に並走し、テラスを有した平底の溝である。長さ約7.5m、幅0.8m、深さ約0.62mで、主軸の方向はN-64°-Wである。5.5mほど東進した後、南東方向（SD-



第26図 天神原遺跡（第2調査区）遺構分布図



第27図 第2調査区検出遺構土層断面図（I）



第28図 第2調査区検出遺構土層断面図（II）

1方向)へ屈曲している。埋土はType Aである。中層から弥生土器の壺口縁部片1点、土師器・小皿片1点が出土している。

#### SD-14-2 [第26~28図]

SF-2と共に伴するV字状の小溝で、検出した長さは約4.7m、幅0.36~0.4m、深さ0.3~0.45m、埋土はType Aである。主軸の方向は、SF-2とほぼ同じN-66°-Wである。出土遺物なし。

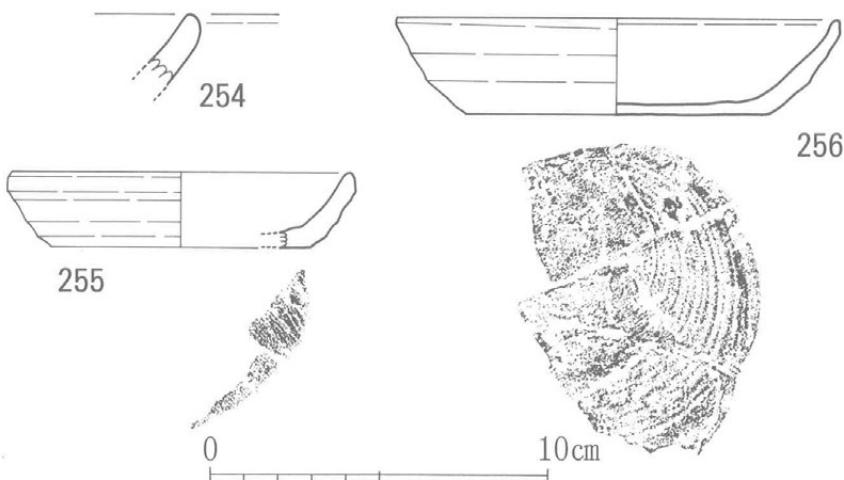
#### <道路状遺構>

#### SF-2 [第26~28図]

SD-14-1がほぼ埋没した段階で、その上部に形成された硬化体である。オレンヂパミス混入黒色粘質シルト層中と御池降下軽石層上面で確認でき、局部的な凹凸と中央部の窪み(SD-13)を除くとほぼ平らである。側溝状の小溝(SD-14-2)を伴っており、西側から徐々に幅員を広げつつ、わずかに傾斜しながら東進している。出土遺物なし。

#### <柱穴>

約20箇の柱穴が、SD-1の法面周辺で検出されているが、掘立柱建物跡としては確認できなかった。また、埋土中からの遺物の出土もなかった。



#### 2) 包含層出土遺物 [第29図]

包含層(第IV層)中からは、土師器・壺片1点が出土している。他の調査区で確認している壺と比べて、器高が低く、口径・底径とともに大きめであるため、壺というよりもむしろ、皿に近い器形である。

また、器壁は全体的に薄手であるが、とくに底部においては、それが顕著である。底部の切り離し技法は糸切りで、I b SM4類にあたる。

なお、SD-14-1から出土している小皿も、属性的にはこの壺に類似しており、胎土・色調が一致していることも勘案して、当遺跡で確認している土師器群の中に、こうした類いの一群が存在している可能性を示唆することもできるのではないだろうか。

番号	地区 (遺構)	層	種別	特徴など	備考
254	F-3(SD-14-1)	中層	弥生土器・壺		
255	E-3( " )	"	土師器・小皿		II b SM4類
256	"	IV	土師器・壺		I b SM4類

第4表 第2調査区出土遺物一覧表

### 3. 第3調査区の内容

第1調査区北側の遺物包含層の広がりを確認するために設けた東西方向のトレンチが、第3調査区である。ここでも第IV層上面までは重機で掘り下げるが、第1調査区同様攪乱がひどく、遺物包含層が残存していたのは、総面積約670m<sup>2</sup>のほぼ半分であった。

この調査区でも出土した遺物の主流は土師器であり、第1調査区と同じように、局部的（S C - 5周辺）に密集する傾向が認められた。遺構は、調査区中央部に柱穴群・土坑が散在し、東側半分に道路状遺構5条・溝状遺構4条が集中するというような状況であった。なお、当区で検出した遺構の埋土も、第1調査区同様2種類に大別できた。

#### 1) 遺構

＜溝状遺構＞

##### S D - 15 [第30～32・35図]

調査区の北東部をN-52°30' - W方向に進む平底の溝である。S D - 16埋没後に作られており、埋土の最上層には文明降下軽石が堆積している。検出したのは長さ約6.0m、幅0.6～0.8m、深さ約0.28mである。なお、この溝がほぼ埋没した段階でその上面に作られたのが、S F - 5・6である。上層から、鎬蓮弁文の青磁・碗（12C～14C初頭頃）が1点出土している。

##### S D - 16 [第30～32・34図]

S D - 15に先行する平底の溝で、長さ約10.5m、幅0.9～1.2m、深さ約0.34mである。主軸はN-52° - Wで、S D - 15とほぼ平行である。遺物は、上層から土師器・坏片が3点、中層から坏片が1点、下層から鎬蓮弁文の青磁・碗（13C～14C中葉頃）1点、坏片2点が出土している。また、一括資料として、肥前系染付・碗（16C中葉～後葉頃）2点、土師器・小皿片2点がある。

##### S D - 17 [第30・31図]

調査区の南東部をN-26° - E方向に走行する溝状遺構である。長さ約6.5m、幅0.7～0.8m、深さ約0.35mで、断面は非常に浅いU字形を呈している。S F - 7に接しているが、埋土の状態からそれに先行するものと考えられる。出土遺物なし。

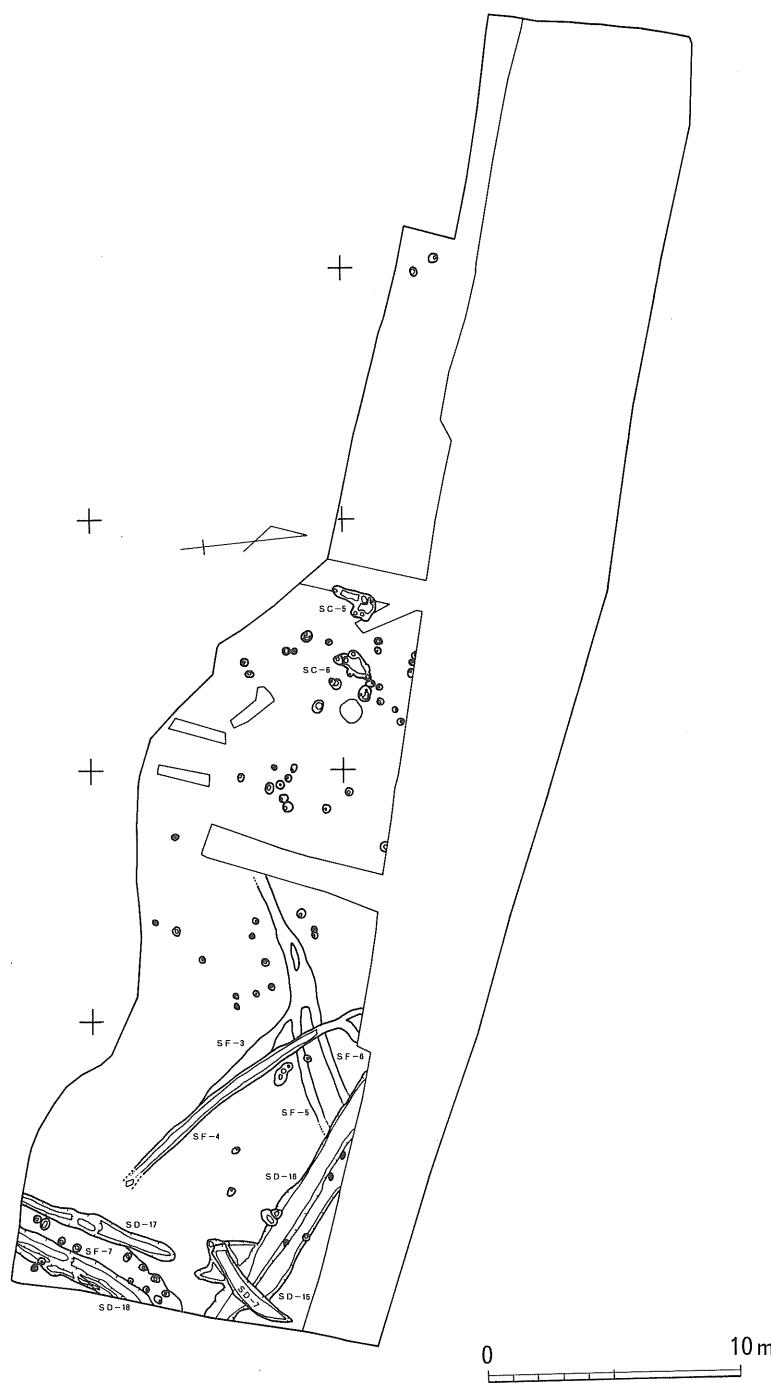
##### S D - 18 [第30～32図]

S F - 7に並走する溝で、長さ約5.3m、幅1.0～1.1m、深さ約0.6m、主軸方向N-34°30' - Eである。断面形はS D - 17と同じU字形で、埋土も同じくT Y p e Aである。ただし、断面の観察から、S D - 17がこれに先行していることが確認できる。出土遺物なし。

＜道路状遺構＞

##### S F - 3 [第30～32・36図]

S F - 5から派生したブロック状の硬化体で、N-60°30' - W方向に延びている。確認したのは長さ約5.0m、幅0.3～0.7m、検出面からの高さ約0.06mで、T Y p e Aの土が硬化したものである。途中でS F - 4に切られている。遺物は、硬化体上面に食い込む形で、須恵器・壺



第30図 天神原遺跡（第3調査区）遺構分布図

片、青磁染付・湯呑碗片（18C後半頃）が各1点、土師器・坏片が4点出土している。また、下面からは、土師器・小皿1点が出土している。

S F - 4 [第30～32図]

N-37°-W方向に、S F - 3・5～7、S D - 17・18を切りながら延びる硬化面である。S F - 3・5・6上では、御池降下軽石層上面にできた深さ約3cm程度の浅いU字状の落ち込みが硬化しており、S F - 7、S D - 17・18上ではT Y P e Aの土が硬化したブロックとして点在している。確認した長さは約12.0m、幅は0.4～0.6mである。出土遺物なし。

S F - 5 [第30～32図]

N-71°30' - E方向に延びる、長さ約11.0m、幅0.4m、検出面からの高さ約0.04mの硬化体である。T Y P e Aの土が硬化したもので、S F - 6と合流しながら南西方向に延びている。なお、S F - 3はこの道路状遺構から派生したものである。出土遺物なし。

S F - 6 [第30～32図]

S F - 5と合流するT Y P e Aの硬化体である。長さ約9.7m、幅0.3m、検出面からの高さ約0.04mで、主軸方向はN-63°30' - Eである。出土遺物なし。

S F - 7 [第30～33図]

S D - 18に並走する硬化面である。断面形が浅いU字形を呈しているので、溝状遺構の床面が硬化したものと考えられ、御池降下軽石層上面（第1次）、T Y P e Aの埋土上面（第2次）、文明降下軽石層上面（第3次）の3面の硬化面を確認している。また、第1・3次硬化面上では規則的に並ぶ柱穴が検出されているが、その用途については全く不明である。主軸はN-38° - Eで、今回確認した部分は、長さ約7.5m、幅0.9m、深さ約0.4mである。出土遺物なし。

### <土 坑>

S C - 5 [第30・37図]

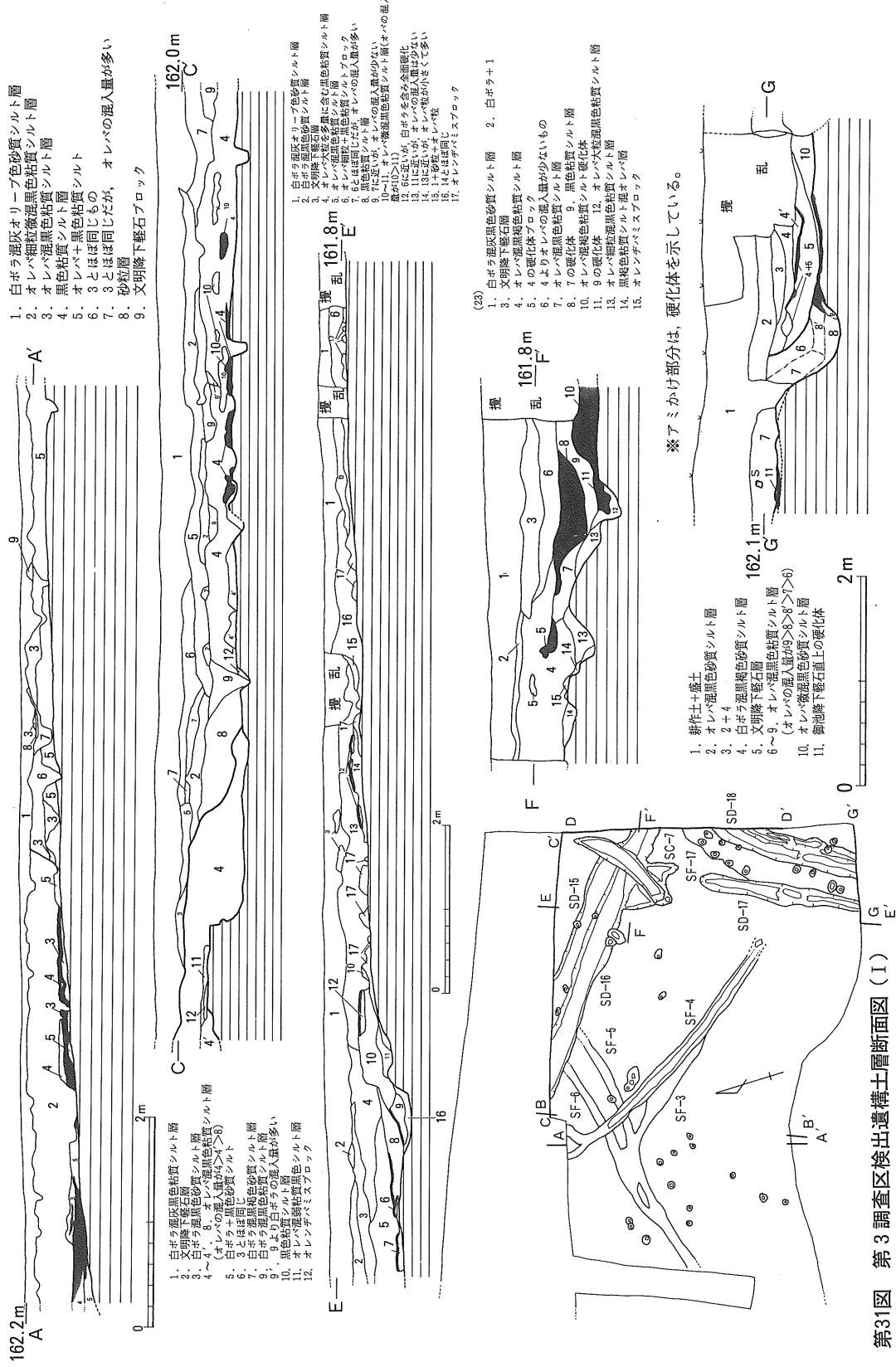
主軸方向N-30° - E、長軸約1.8m、短軸約1.0m、深さ約0.35mの隅丸方形状の土坑である。柱穴とかなり切り合っているが、本来の断面形はやや尖底ぎみのU字形を呈していたようである。基本的な埋土はT Y P e Aである。遺物は、上層から土師器・坏4点、小皿1点が、中層から鉱滓の多量に付着した凝灰岩製のふいごの羽口が1点、土師器・坏が1点出土している。

S C - 6 [第30・38図]

主軸方向N-40° - E、長軸約1.5m、短軸約0.8m、深さ約0.42mの楕円形状の土坑である。埋土は、S C - 5と同じT Y P e Aである。土師器・坏が、上・下層からそれぞれ1点ずつ出土している。

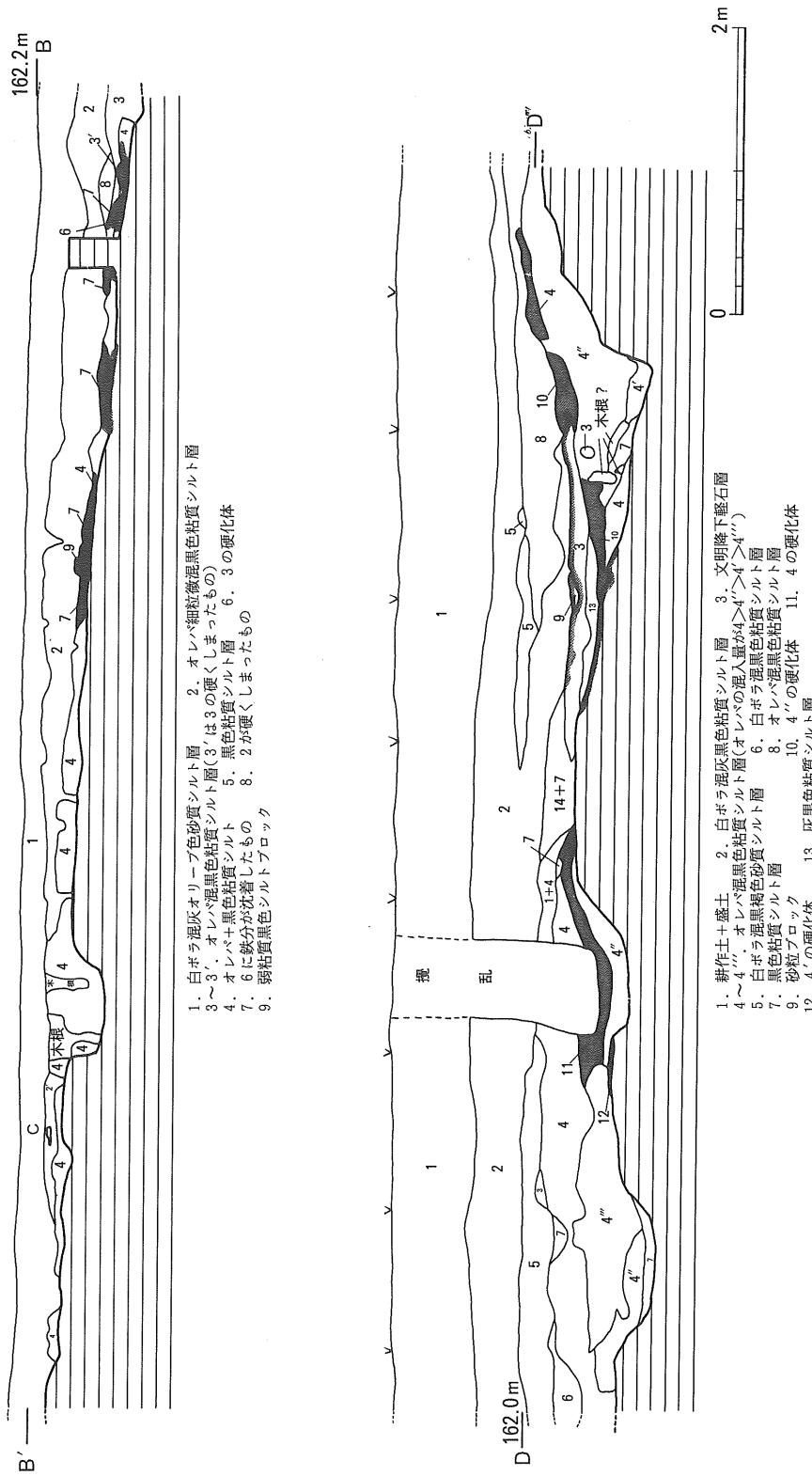
S C - 7 [第30・31図]

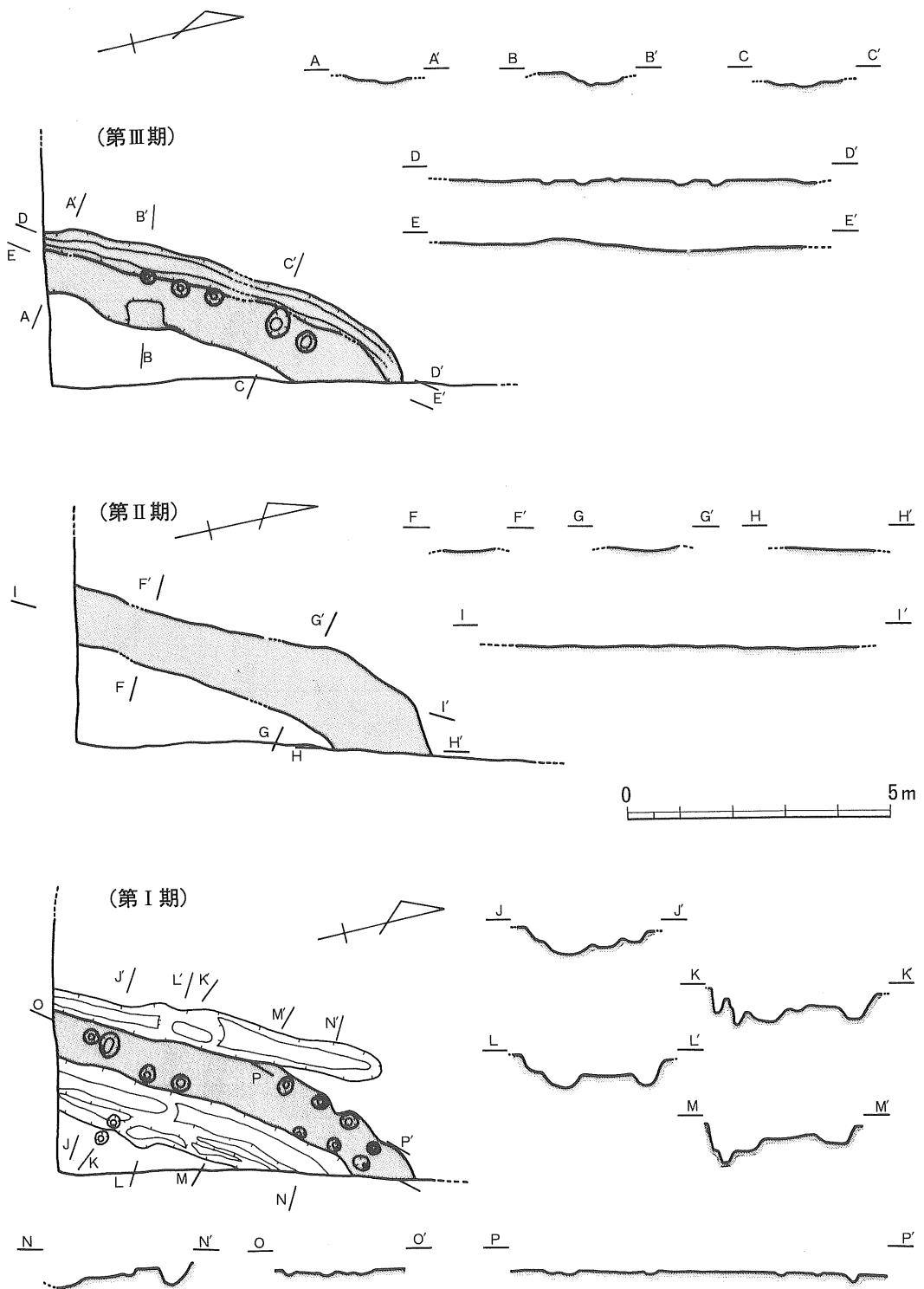
S D - 15・16を切る三日月形の土坑である。断面形はテラスを有する尖底で、埋土は上層までがT Y P e Aで、埋没後（最上層）に文明降下軽石が堆積している。主軸方向N-61° - E、長軸約4.6m、幅約0.6～0.8m、深さ約0.56mである。出土遺物なし。



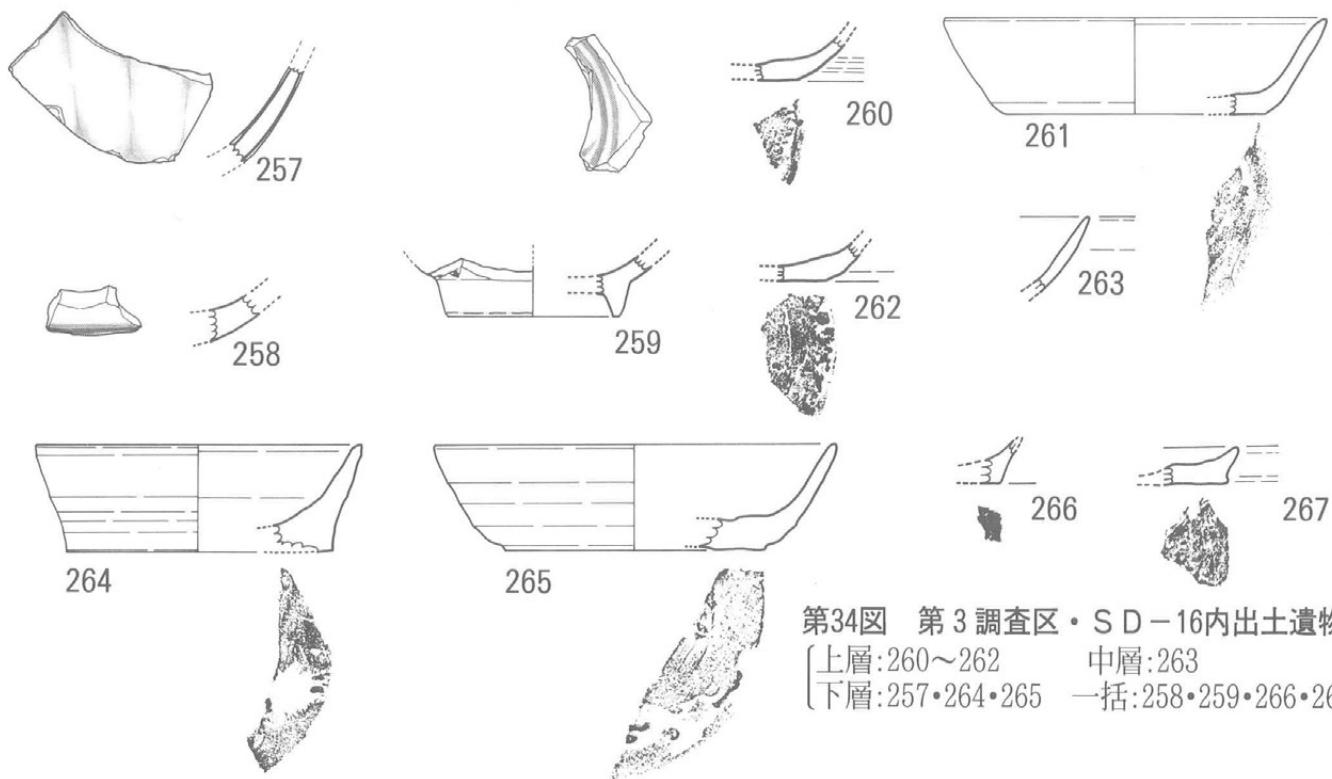
第31図 第3調査区検出遺構土層断面図 (I)

第32図 第3調査区検出遺構土層断面図（II）

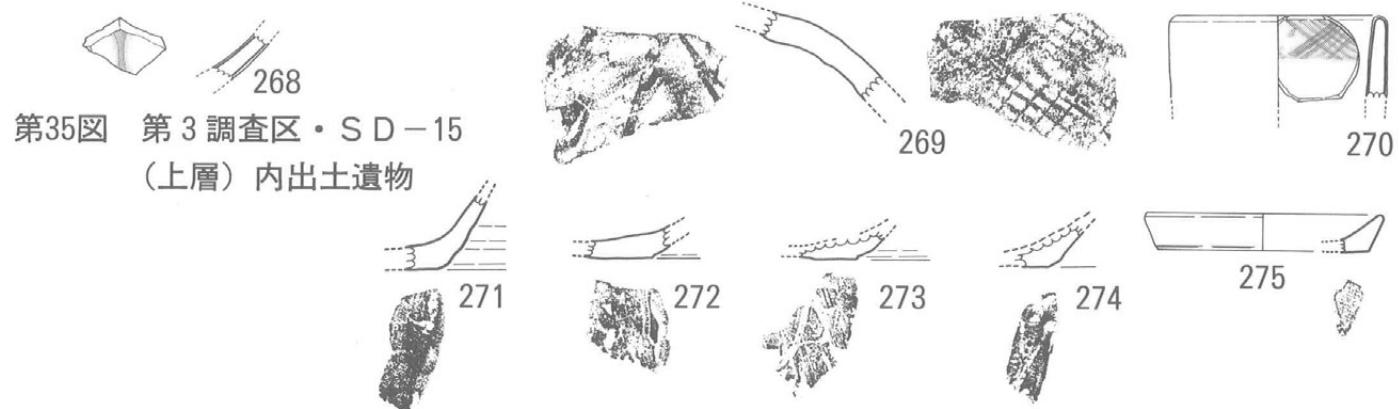




第33図 SF-7 硬化体変遷図 (レベルはすべて162m)

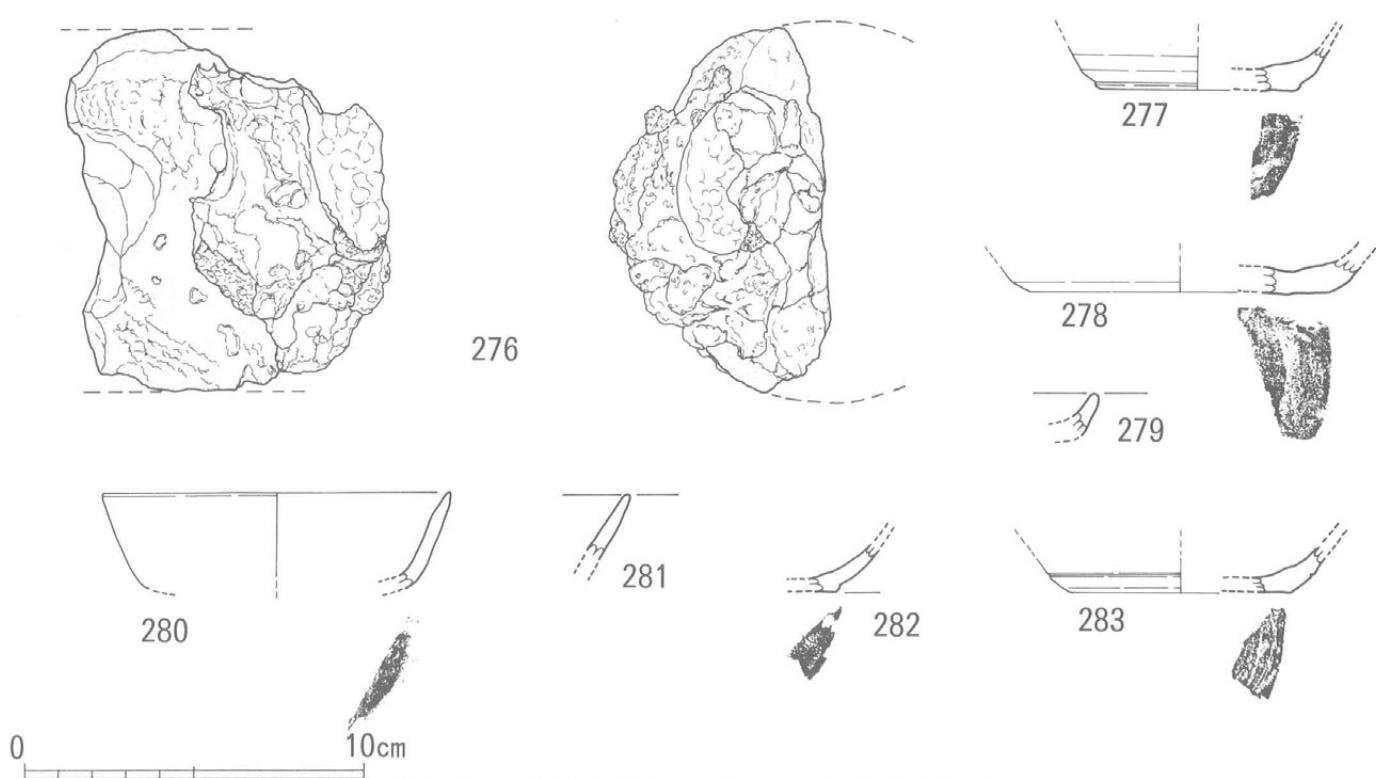


第34図 第3調査区・SD-16内出土遺物  
〔上層:260~262 中層:263  
下層:257・264・265 一括:258・259・266・267〕

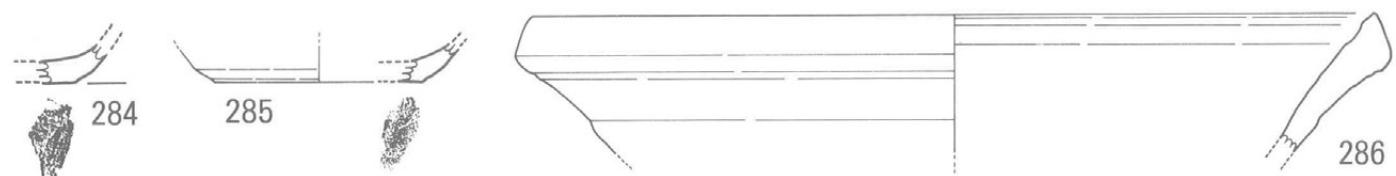


第35図 第3調査区・SD-15  
(上層) 内出土遺物

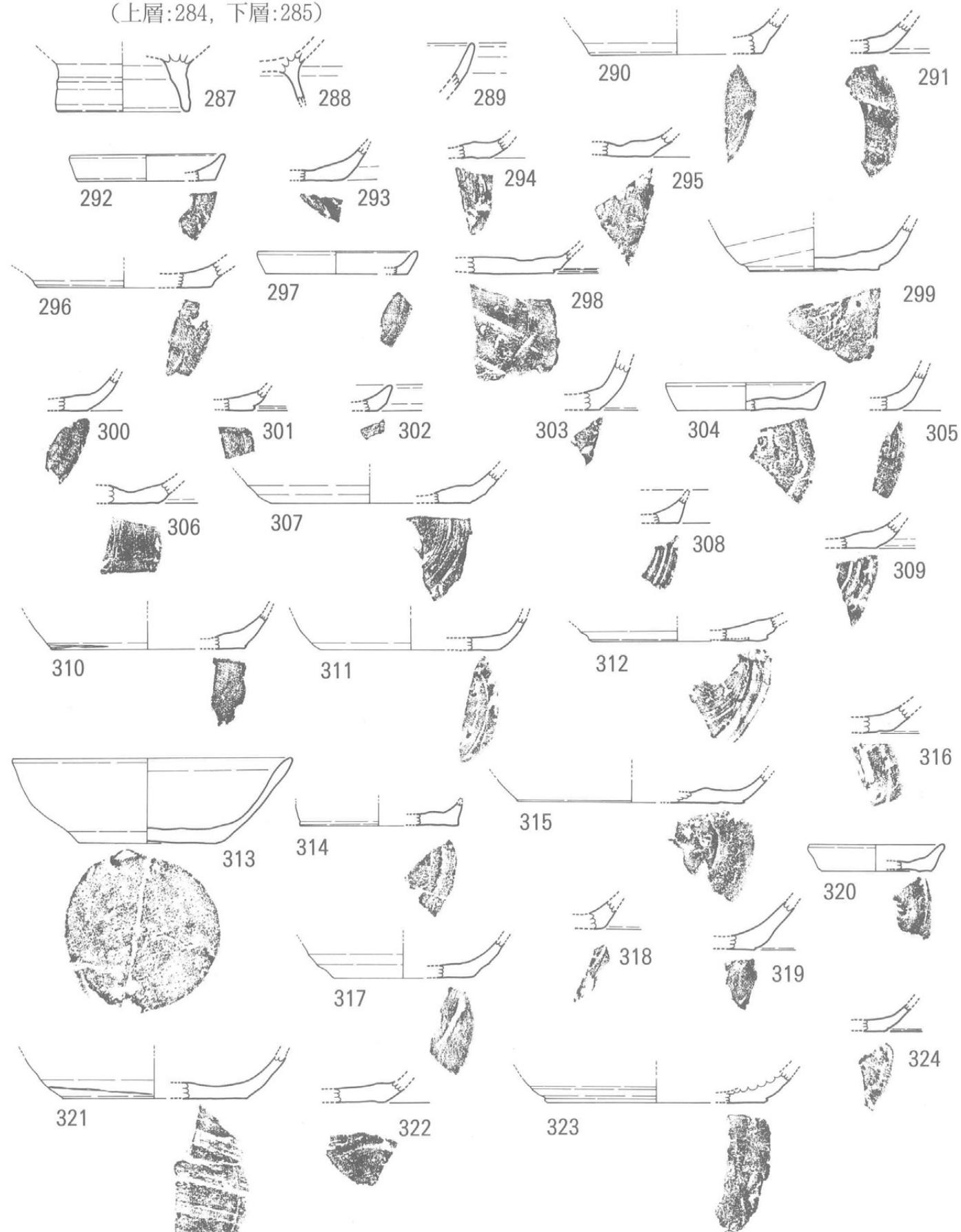
第36図 第3調査区・SF-3 内出土遺物 (上面:269~274, 下面:275)



第37図 第3調査区・SC-5 内出土遺物  
(上層:277~281, 中層:276・282・283)

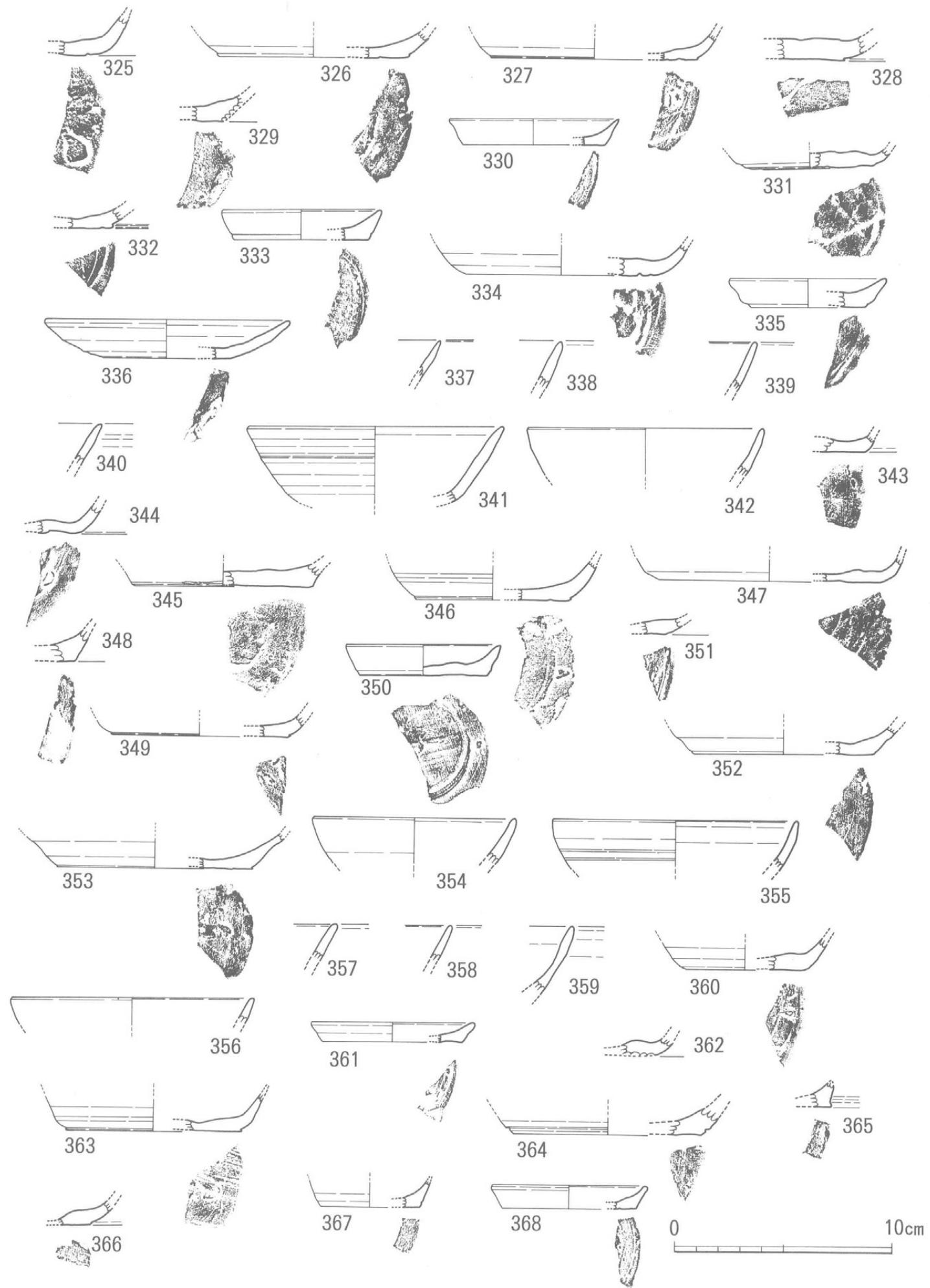


第38図 第3調査区・SC-6内出土遺物  
(上層:284, 下層:285)

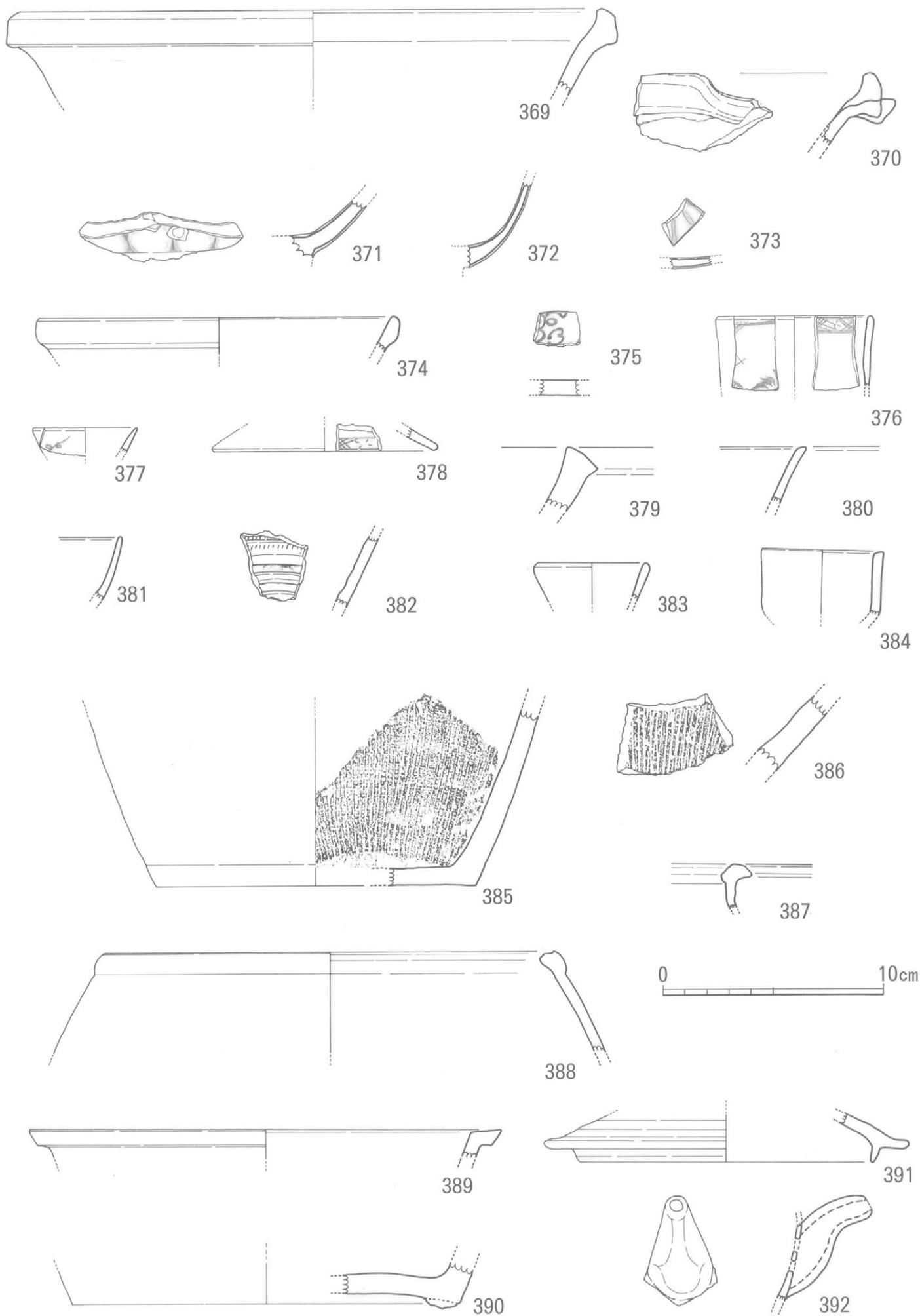


第39図 第3調査区・Piti群内出土遺物(1)  
〔最上層:289, 上層:290~311, 中層:312~324〕  
〔一括:286~288〕

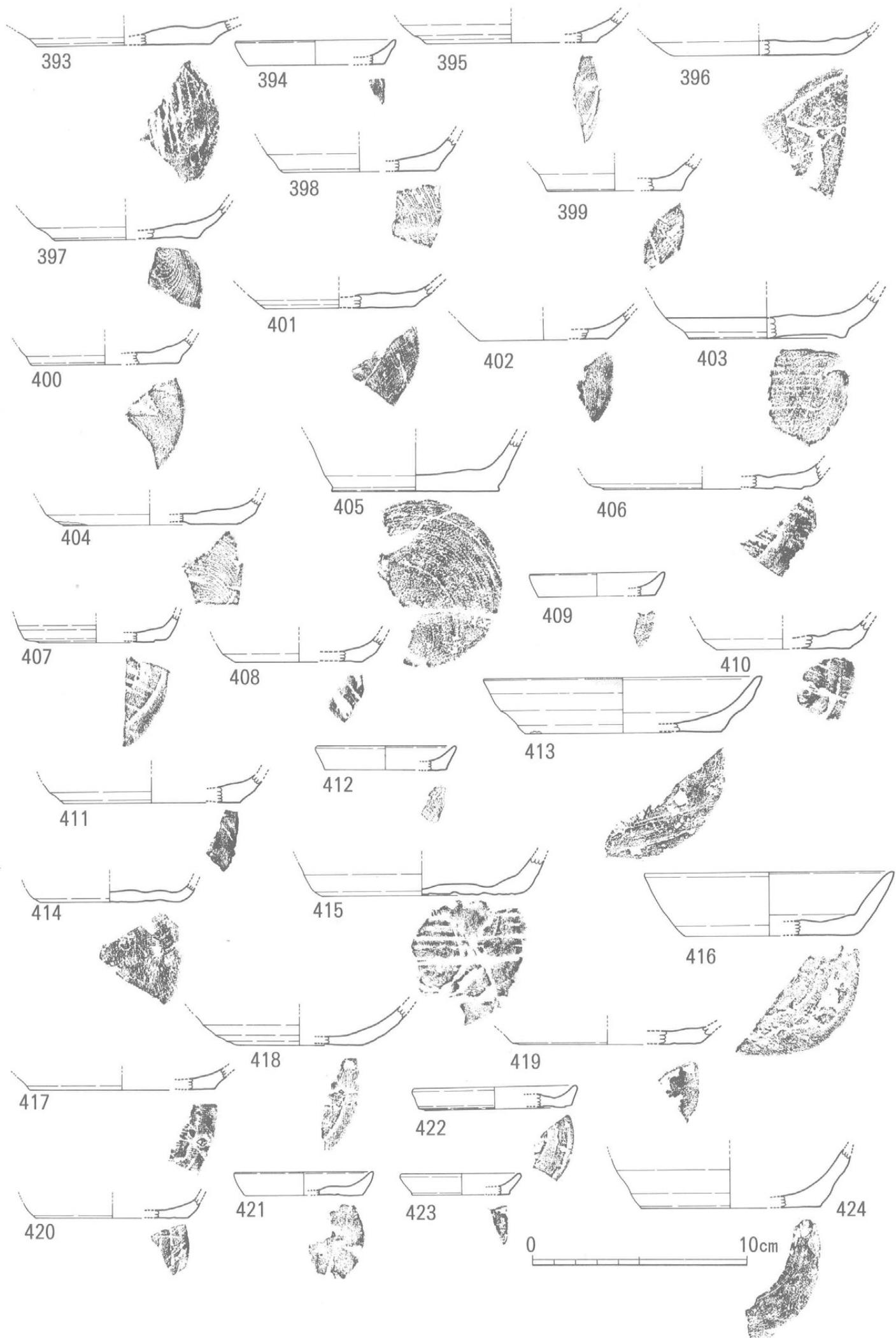
0 10cm



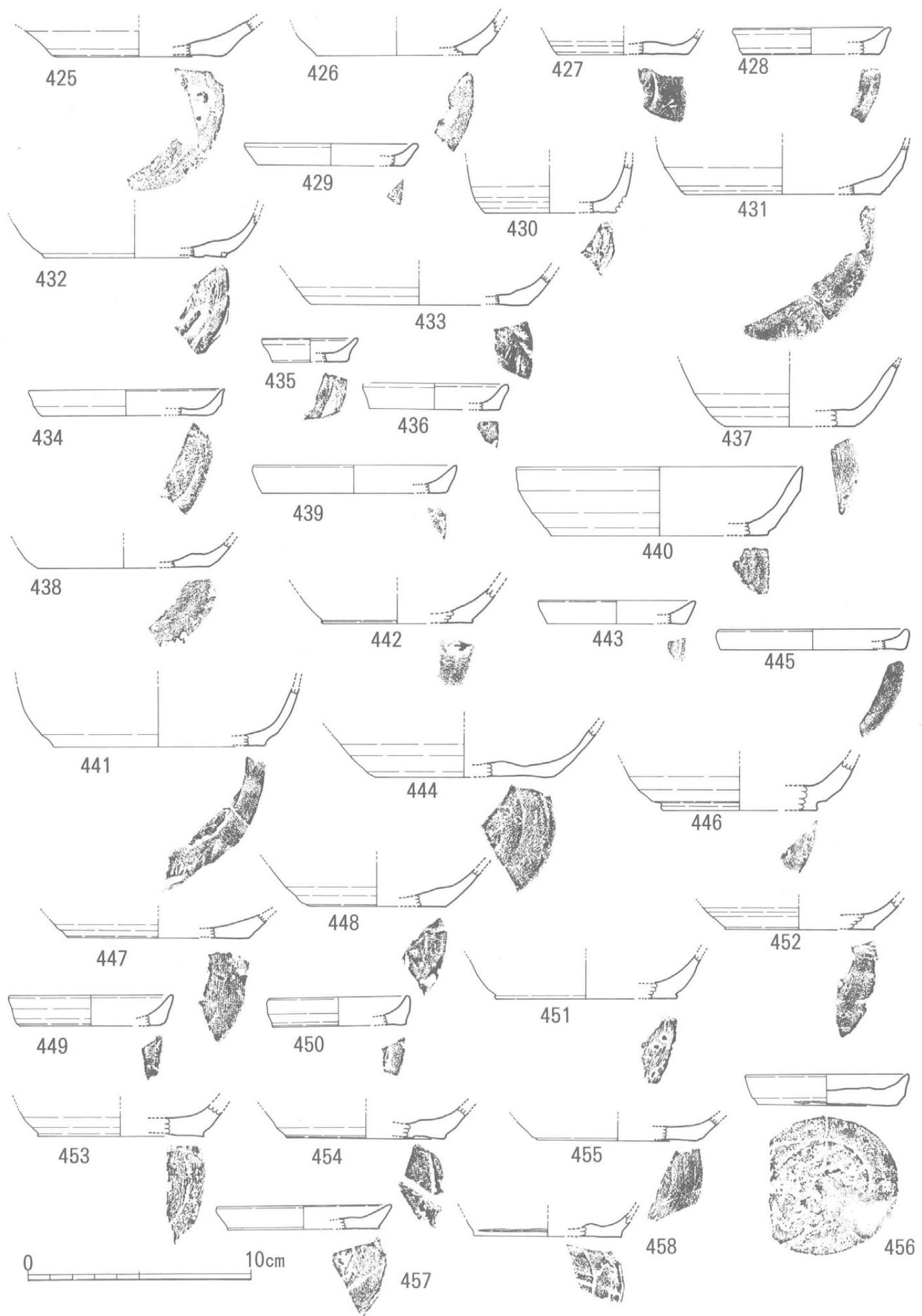
第40図 第3調査区・P.i.t群内出土遺物(2)  
(中層:325~342, 下層:343~359, 一括:360~368)



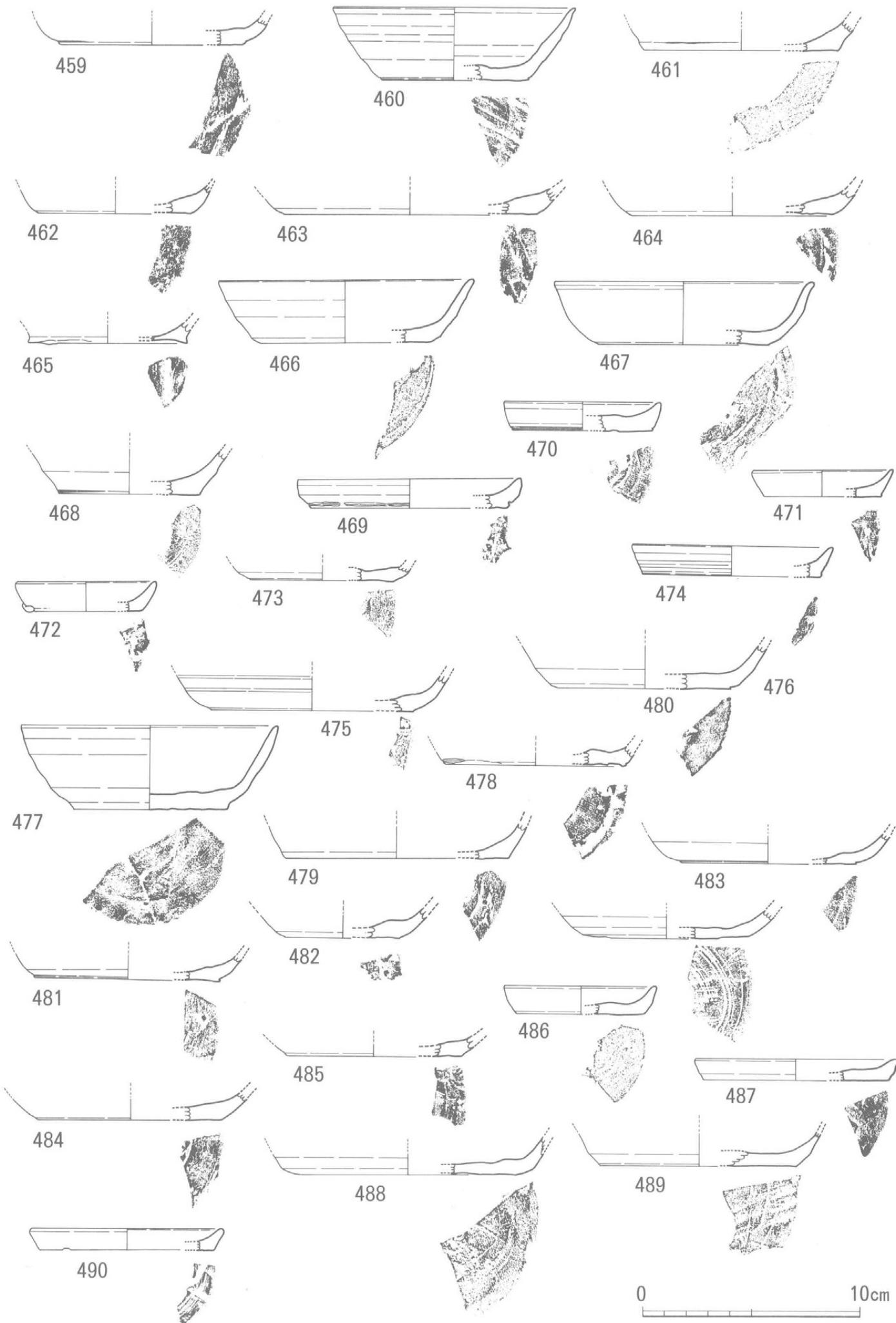
第41図 第3調査区・包含層内出土遺物(1)



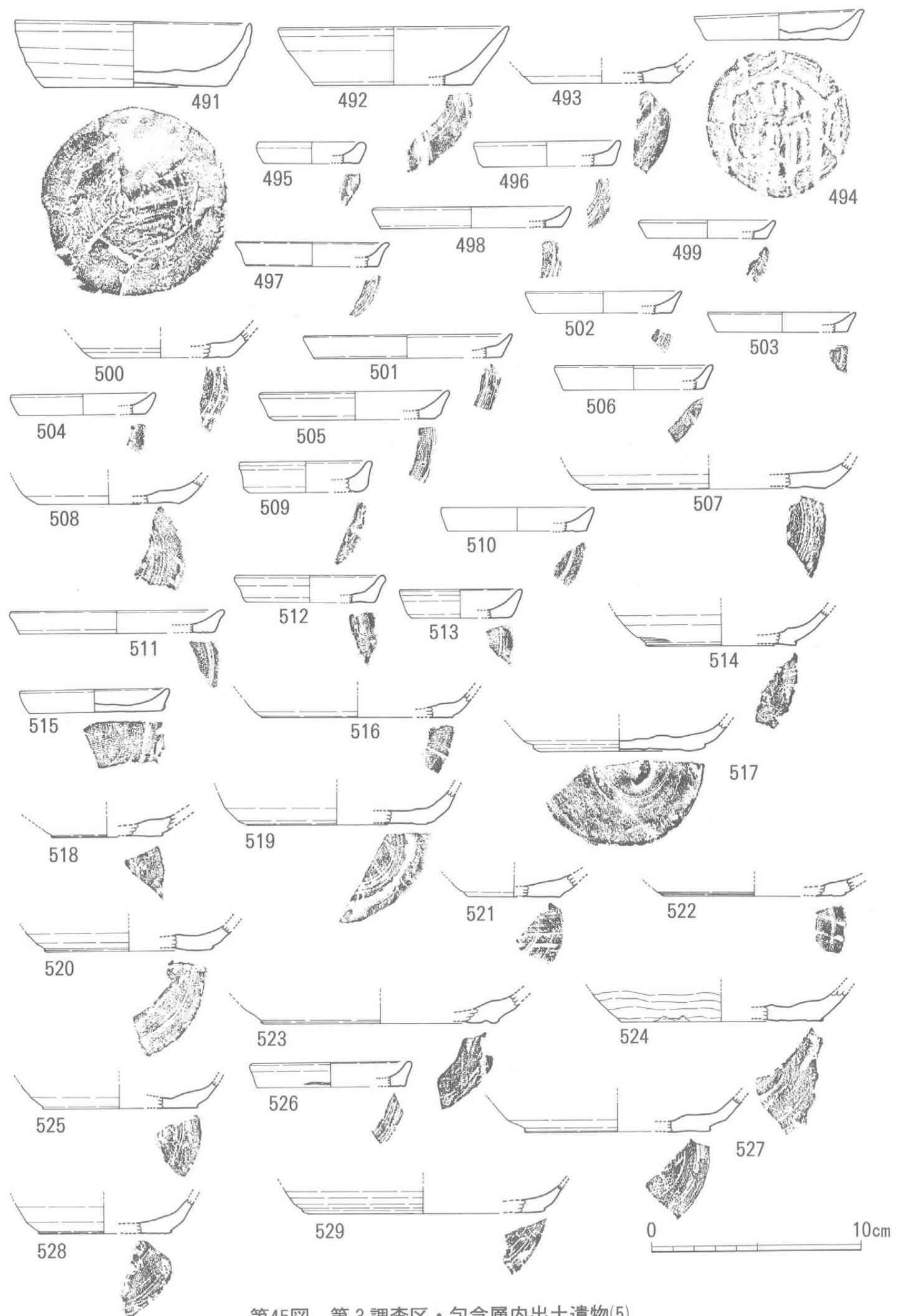
第42図 第3調査区・包含層内出土遺物(2)



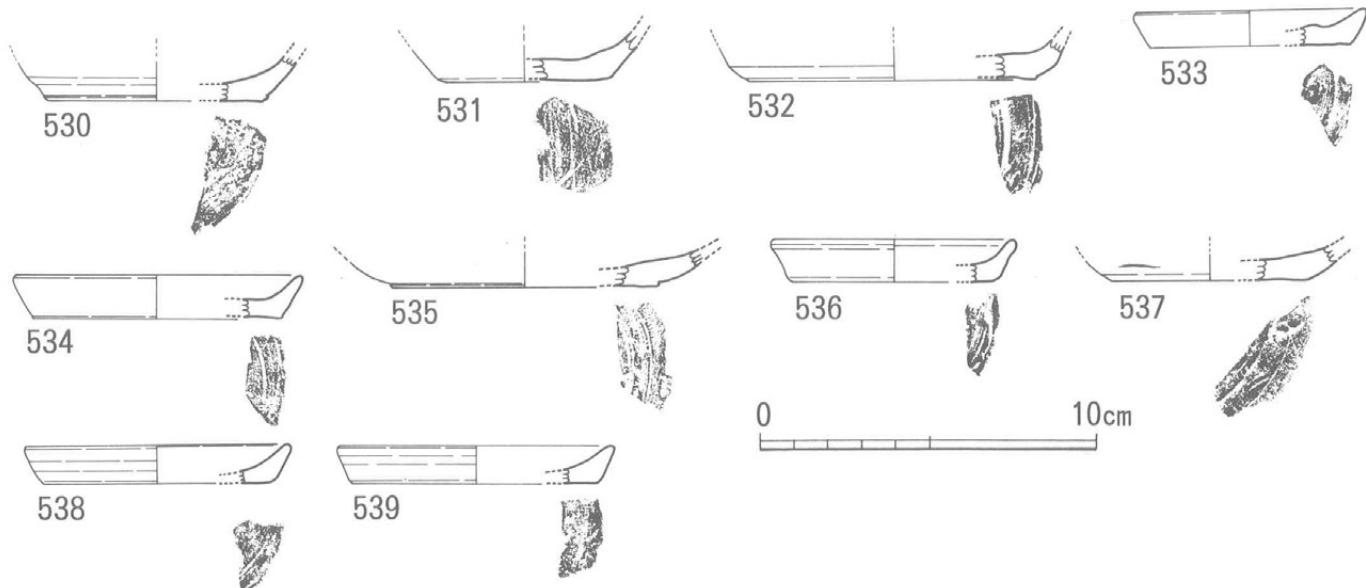
第43図 第3調査区・包含層内出土遺物(3)



第44図 第3調査区・包含層内出土遺物(4)



第45図 第3調査区・包含層内出土遺物(5)



第46図 第3調査区・包含層内出土遺物(6)

#### <柱 穴> [第39~40図]

調査区中央部付近を中心に約50箇の柱穴を検出しているが、他の調査区同様、掘立柱建物跡と確認できるものはなかった。なお、埋土中からの出土遺物としては、最上層から土師器・壺が1点、上層から土師器・壺15点、小皿7点、中層から壺25点、小皿6点、下層から壺15点、小皿2点が出土している。また、一括遺物としては、東播系の須恵質・捏鉢1点、土師器・高台付碗2点、壺4点、小皿5点がある。

#### 2) 包含層内出土遺物 [第41~46図]

##### ①須恵質土器

東播系の須恵質土器（捏鉢・口縁部片）が2点出土している。口縁部はいずれも肥大化し、わずかに内傾している。頸部以下を欠損しているため、体部の傾きや器壁などは不明であるが、口径や口縁部の特徴などから推量する限りでは、井沢氏分類のIV-1 b類（13C後半～14C代）ないしはIV-2 a類（14C初頭～14C中頃）\* の鉢に該当するのではないかと考えている。

##### ②陶磁器

出土陶磁器の総数は22点で、内訳は舶載磁器4点、国産磁器4点、国産陶器14点である。備前焼の擂鉢（14C後半～15C前半頃）が1点あるものの、第1調査区と同じように、遺物の年代は大きく2時期（12C～14C前葉頃：舶載磁器類、18C～19C代：国産磁器、国産陶器類）に分けることができる。ただし、上限期については、第1調査区の陶磁器類が13C後半頃以降のものであるのに対して、第3調査区の舶載磁器類は12C中葉から後葉頃まで溯ると考えられることから、隣接する樺山・郡元地区遺跡で検出されている遺構の傾向や、調査面積に対する遺構密度が南から北に向かって高くなっている点などを併せて、今回の調査で検出した遺構群に先行し、当遺跡の北側を中心を持つ集落の、拡大過程を想定することも可能かもしれない。

##### ③土師器

第3調査区では、約500点の土師器が出土しているが、ここでは図化可能な壺91点、小皿56点

のみを掲載した。なお、各類の割合は、下記の通りである。

坏 (91点)			小皿 (56点)				
I類	10%	I'類	3%	I類	2%	I'類	0%
II類	32%	II'類	23%	II類	30%	II'類	18%
III類	12%	III'類	20%	III類	36%	III'類	14%

	坏	小皿
板状圧痕あり	41%	25%
板状圧痕なし	59%	75%

全体的な傾向としては、第1調査区の様相と大差はないが、小皿の切り離し技法でII類よりIII類が卓越している点や、I・I'類の割合がやや高い点などが、当区の傾向としてあげられる。

※井沢洋一 1987 「福岡地方の須恵質・瓦質土器について」『中近世土器の基礎研究III』

日本中世土器研究会

番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考	番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考
257	R-10(SD-16)	下層	青磁・碗	鎬蓮弁文	13C~14C中葉頃	290	P- 9(Pit)	上層	土師器・坏		I bSM4類
258	一括( " )		染付・碗	肥前系	16C中葉~後葉頃	291	" ( " )	"	"		II aSM6類
259	" ( " )		"	"	"	292	" ( " )	"	土師器・小皿		"
260	R-10( " )	上層	土師器・坏		II bHM6類	293	" ( " )	"	"		II bHP1類
261	" ( " )	"	"		II bSP4類	294	" ( " )	"	土師器・坏		II bHM1類
262	" ( " )	"	"		II' bHP1類	295	P-10( " )	"	"		II bHM4類
263	" ( " )	中層	"		SP4類	296	P- 9( " )	"	"		II bSM6類
264	" ( " )	下層	"		II bHP5類	297	" ( " )	"	土師器・小皿		"
265	" ( " )	"	"		II' bSP4類	298	" ( " )	"	土師器・坏		II' aHP6類
266	一括( " )		土師器・小皿		II bHP1類	299	" ( " )	"	"		II' aSP1類
267	" ( " )		"		III aHP1類	300	" ( " )	"	"		II' bHP1類
268	R-10(SD-15)	上層	青磁・碗	鎬蓮弁文	12C~14C初頃	301	" ( " )	"	土師器・小皿		II' bHP4類
269	R-10(SF-3)	上面	須恵器・壺	格子目タタキ		302	P-10( " )	"	"		II' bHM4類
270	" ( " )	"	青磁染付・湯呑碗	肥前系	18C後半頃	303	P- 9( " )	"	土師器・坏		II' bSM6類
271	" ( " )	"	土師器・坏		II aSP4類	304	" ( " )	"	土師器・小皿		"
272	" ( " )	"	"		II' bHP1類	305	P-10( " )	"	土師器・坏		III bHM4類
273	Q- 9( " )	"	"		III' aHP4類	306	P- 9( " )	"	"		III bSM6類
274	R-10( " )	"	"		III' bHP1類	307	" ( " )	"	"		III' bHM7類
275	Q-10( " )	下面	土師器・小皿		III' bHP4類	308	" ( " )	"	土師器・小皿		"
276	P-9(SC-5)	中層	ふいごの羽口	凝灰岩製、鉄滓付着		309	" ( " )	"	土師器・坏		III' bSM4類
277	" ( " )	上層	土師器・坏		II' bHM6類	310	" ( " )	"	"		III' bSM6類
278	" ( " )	"	"		III' bSP4類	311	" ( " )	"	"		III' bSM7類
279	" ( " )	"	土師器・小皿		HP1類	312	" ( " )	中層	"		I' bHM4類
280	" ( " )	"	土師器・坏		SP1類	313	" ( " )	"	"		I' bSP4類
281	" ( " )	"	"		SP4類	314	" ( " )	"	土師器・小皿		II aSP1類
282	" ( " )	中層	"		II' bSM4類	315	" ( " )	"	土師器・坏		II bSP6類
283	" ( " )	"	"		III' bHP1類	316	" ( " )	"	"		II bSP7類
284	P-9(SC-6)	上層	"		III bHP1類	317	" ( " )	"	"		II bSM6類
285	" ( " )	下層	"		II bSP4類	318	" ( " )	"	"		"
286	R-10(Pit)		須恵質・捏鉢	東播系	13C後葉頃	319	" ( " )	"	"		II bSM7類
287	P- 9( " )		土師器・高台付碗			320	" ( " )	"	土師器・小皿		"
288	" ( " )		"			321	" ( " )	"	土師器・坏		II' aHP1類
289	R-11( " )	最上層	土師器・坏		HP1類	322	" ( " )	"	"		"

第5表 第3調査区出土遺物一覧表(1)

番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考	番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考
323	P- 9(Pit)	中層	土師器・坏		II'aHP1類	368	一括(Pit)		土師器・小皿		III bHP1類
324	" ( " )	"	"		II'bHP1類	369	R-10	IV	須恵質・捏鉢	東播系	13C後半~14C前葉頃
325	" ( " )	"	"		II'bSM4類	370	Q- 9	"	"	"	14C前半頃
326	Q-10( " )	"	"		II'bSM6類	371	R-10	"	青磁・碗	鎬蓮弁文	13C~14C前葉頃
327	P- 9( " )	"	"		"	372	Q-10	"	"	"	"
328	" ( " )	"	"		"	373	R-10	"	青磁・皿	劃花文	12C~13C
329	" ( " )	"	"		III bHP1類	374	一括	"	白磁・碗	玉縁口縁	"
330	" ( " )	"	土師器・小皿		III bSP1類	375	P- 9	"	染付・皿	肥前系	18C末~19C初頭
331	" ( " )	"	土師器・坏		III'aSM6類	376	一括	"	染付・筒型碗	"	1780年~1810年代
332	" ( " )	"	"		III'bHP4類	377	"	"	染付・小杯	"	幕末期
333	" ( " )	"	土師器・小皿		III'bHM4類	378	"		青磁染付・蓋	"	18C後半頃
334	" ( " )	"	"		III'bSM4類	379	R-10	IV	陶器・擂鉢	備前焼	14C後半~15C前半頃
335	" ( " )	"	"		III'bSM6類	380	一括	"	陶器・碗	白薩摩	
336	" ( " )	"	土師器・坏		HP 2類	381	R-10	"	陶器・茶器	薩摩焼	18C~
337	" ( " )	"	"		HP4類	382	一括	"	陶器・碗	トビガンナ、薩摩焼	19C代
338	" ( " )	"	"		HM6類	383	R-10	"	陶器・猪口	薩摩焼	18C~
339	R-10( " )	"	"		"	384	一括		陶器・小杯	"	19C代
340	P- 9( " )	"	"		"	385	Q-10	IV	陶器・擂鉢	底部無釉、薩摩焼	18C~
341	" ( " )	"	"		"	386	R-10	"	"	スス付着、薩摩焼	"
342	" ( " )	"	"		SP4類	387	一括	"	陶器・半胴甕	薩摩焼	17C~18C
343	" ( " )	下層	土師器・小皿		II bHP1類	388	R-10	"	陶器・甕	"	18C~
344	" ( " )	"	土師器・坏		II bSM6類	389	一括	"	陶器・鉢	"	"
345	" ( " )	"	"		II'aHP4類	390	"	"	スラグ付着、薩摩焼	19C~	
346	" ( " )	"	"		II'bHP4類	391	S-10	IV	陶器・土瓶蓋	薩摩焼	18C~
347	" ( " )	"	"		II'bSP1類	392	R-11	"	陶器・土瓶注口部	"	19C代
348	" ( " )	"	"		"	393	P- 9	"	土師器・坏		I aSM1類
349	" ( " )	"	"		II'bSM7類	394	一括		土師器・小皿		I bHM1類
350	" ( " )	"	土師器・小皿		III aSP7類	395	Q-10	IV	土師器・坏		I bHM4類
351	" ( " )	"	土師器・坏		III bHP1類	396	"	"	"		I bSM1類
352	" ( " )	"	"		III'bHM6類	397	一括		"		"
353	" ( " )	"	"		III'bSP4類	398	P- 9	IV	"		"
354	" ( " )	"	"		HP1類	399	"	"	"		"
355	" ( " )	"	"		HP4類	400	"	"	"		I bSM4類
356	" ( " )	"	"		HP6類	401	"	"	"		"
357	" ( " )	"	"		HM6類	402	一括		"		"
358	" ( " )	"	"		"	403	P- 9	IV	"		I'aSP6類
359	" ( " )	"	"		SM6類	404	"	"	"		I'bHM1類
360	一括( " )	"			II bHP1類	405	"	"	"		I'bSM6類
361	" ( " )	土師器・小皿			"	406	R-10	"	"		II aHP1類
362	" ( " )	"			"	407	P- 9	"	"		"
363	" ( " )	土師器・坏			II'aHP1類	408	一括		"		"
364	" ( " )	"			II'bHP1類	409	"		土師器・小皿		"
365	" ( " )	土師器・小皿			"	410	"		土師器・坏		II aHP4類
366	" ( " )	土師器・坏			"	411	"	IV	"		"
367	" ( " )	土師器・小皿			II'bHM6類	412	"		土師器・小皿		"

第 6 表 第 3 調査区出土遺物一覧表(2)

番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考	番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考
413	R-10	IV	土師器・坏		II aHP6類	458	一括		土師器・小皿		II'aHP1類
414	Q-10	"	土師器・小皿		II aHM6類	459	P-10	IV	土師器・坏		II'aHP4類
415	P- 9	"	土師器・坏		II aSP4類	460	R-10	"	"		II'aSP4類
416	"	"	"		"	461	P- 9	"	"		II'aSM6類
417	"	"	"		II aSM6類	462	"	"	"		"
418	"	"	"		II bHP1類	463	一括		"		"
419	一括		"		"	464	"		"		"
420	P- 9	IV	"		"	465	"		土師器・小皿		"
421	一括		土師器・小皿		"	466	R-10	IV	土師器・坏		II'bHP1類
422	R-10	IV	"		"	467	R- 9	"	"		"
423	一括		"		"	468	P- 9	"	"		"
424	R-10	IV	土師器・坏		II bHP4類	469	一括		土師器・小皿		"
425	P- 9	"	"		"	470	"		"		"
426	"	"	"		"	471	P- 9	IV	"		"
427	一括		土師器・小皿		"	472	"	"	"		"
428	"	IV	"		II bHM1類	473	"	"	"		"
429	"		"		"	474	一括		"		II'bHM1類
430	P-10	IV	土師器・坏		II bHM4類	475	"	IV	土師器・坏		II'bHM6類
431	R-10	"	"		II bHM6類	476	Q-10	"	"		II'bSP4類
432	P- 9	"	"		"	477	P- 9	"	"		II'bSP5類
433	一括		"		"	478	"	"	"		II'bSM6類
434	P- 9	"	土師器・小皿		"	479	Q-10	"	"		"
435	"	"	"		"	480	P- 9	"	"		"
436	一括		"		"	481	"	"	"		"
437	P- 9	IV	土師器・坏		II bHM 7類	482	一括		"		II'bSM6類
438	"	"	"		II bSP1類	483	P- 9	IV	"		IIIaHP1類
439	一括		土師器・小皿		II bSP2類	484	"	"	"		"
440	R-10	IV	土師器・坏		II bSP4類	485	一括		"		"
441	"	"	"		"	486	P- 9	IV	土師器・小皿		"
442	一括		"		"	487	"	"	"		"
443	"		土師器・小皿		"	488	"	"	土師器・坏		IIIaHP4類
444	P- 9	IV	土師器・坏		II bSP6類	489	"	"	"		"
445	一括		土師器・小皿		II bSM4類	490	一括		土師器・小皿		"
446	P- 9	IV	土師器・坏		II bSM6類	491	P- 9	IV	土師器・坏		IIIaSP4類
447	O- 9	"	"		"	492	"	"	"		"
448	R-10	"	"		"	493	一括		"		IIIaSP6類
449	一括		土師器・小皿		"	494	P- 9	IV	土師器・小皿		IIIaSM6類
450	P- 9	IV	"		"	495	一括		"		"
451	"	"	土師器・坏		II bSM7類	496	"		"		IIIbHP1類
452	"	"	"		II'aHP1類	497	"		"		"
453	"	"	"		"	498	"		"		"
454	"	"	"		"	499	"		"		"
455	P-10	"	"		"	500	"	IV	土師器・坏		IIIbHP4類
456	P- 9	"	土師器・小皿		"	501	"		土師器・小皿		"
457	"	"	"		"	502	"		"		"

第7表 第3調査区出土遺物一覧表(3)

番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考	番号	地 区 (遺構)	層	種 別	特徴など	備 考
503	一括		土師器・小皿		IIIbHP4類	522	一括		土師器・坏		III'aHM6類
504	"		"		"	523	"		"		III'aSM6類
505	"		"		IIIbHM4類	524	Q-10	IV	"		III'bHP1類
506	"	IV	"		IIIbHM6類	525	P- 9	"	"		"
507	P- 9	"	土師器・坏		IIIbHM7類	526	"	"	土師器・小皿		"
508	P-10	"	"		IIIbSP4類	527	P- 9	IV	土師器・坏		III'bHP4類
509	一括		土師器・小皿		IIIbSM4類	528	"	"	"		"
510	"		"		IIIbSM6類	529	一括		"		"
511	"		"		"	530	P- 9	IV	"		III'bHM6類
512	"		"		"	531	一括	"	"		"
513	"		"		"	532	P- 9	"	"		"
514	P- 9	IV	土師器・坏		III'aHP1類	533	一括	"	土師器・小皿		"
515	"	"	土師器・小皿		"	534	P-10	IV	土師器・小皿		III'bHM6類
516	一括		"		"	535	Q- 9	"	土師器・坏		III'bSP1類
517	P- 9	IV	土師器・坏		III'aHM4類	536	一括		土師器・小皿		III'bSP6類
518	一括		"		"	537	P- 9	IV	土師器・坏		III'bSM6類
519	P- 9	IV	"		III'aHM6類	538	一括		土師器・小皿		"
520	一括	"	"		"	539	"		"		"
521	"		"		"						

第8表 第3調査区出土遺物一覧表(4)

## V. ま と め

当遺跡の所在する都城盆地東部の開析扇状地一帯では、これまでにも多くの中・近世遺跡が確認されており、広範囲に亘って当該期の集落が展開していたと推測されている。今回の調査では、中世の建物群を検出することはできなかったが、遺構の分布状況や出土遺物の様相などから、隣接する樺山・郡元地区遺跡などで確認されている中世集落との密接な関係を想定することができる。そこで、ここでは中世遺構の変遷について概観するとともに、多量に出土した土師器について簡単に触れ、まとめにかえたいと思う。

### 1. 中世遺構の変遷について

先に触れたように、今回検出した中世の遺構は溝状遺構や道路状遺構が中心で、これらに伴う掘立柱建物跡は確認されていない。また、他の遺構についても明確な機能や用途等を限定できるものは少なく、第2調査区で検出したSD-1を除くと、規格性の乏しいものが大半を占めている。各々の時期については、決定材料となる遺構内出土遺物が限られているため、遺構周辺の包含層出土遺物や文明降下軽石の堆積箇所などを考慮しながら推測せざるを得ないが、上限は概ね

12世紀末～13世紀前葉頃（同安窯系青磁碗や玉縁口縁の白磁碗の時期），下限は16世紀後半頃（肥前系染付碗の時期）と考えられる。以下，各調査区の遺構を，切り合い関係や文明軽石の堆積位置などをもとに大きく3段階に分け，その前後関係について示してみた。

なお，以上の年代を推定するにあたり，包含層出土遺物を多用したため，各々の時期幅が多少前後している可能性は否めない。

第1段階：堆積土中に文明軽石を含まない段階。（12世紀末頃～14世紀代）

第2段階：遺構堆積土の中層から最上層にかけて，文明軽石の1次堆積が認められるもの。

（14世紀後半～15世前半頃）

第3段階：遺構堆積土の下層ないし床面直上に文明軽石の堆積が認められるもの。また，文明軽石層上にできた硬化面（道路状遺構）。（15世紀後葉～16世紀代）

#### ①第1調査区

##### <第1段階>

[SD-7・8・12]⇒[SD-4・10, SC-3・4]⇒[SD-9・11・19, SC-2,  
SF-1(第1次硬化面)]⇒[SF-8]

##### <第2段階>

[SD-6]⇒[SD-2・3]⇒[SD-5]

##### <第3段階>

[SC-1]⇒[SF-1(第2次硬化面)]⇒[SF-1(第3次硬化面)]

#### ②第2調査区

##### <第1段階>

[SD-1・14-1]⇒[SD-13・14-2]⇒[SF-2(第1次硬化面)]⇒[SF-2(第2次硬化面)]

##### <第2段階>

[SD-12]

#### ③第3調査区

##### <第1段階>

[SD-16・17, SC-5・6]⇒[SD-18, SC-7(第1次硬化面)]

##### <第2段階>

[SD-15]⇒[SF-7(第2次硬化面)・3・5・6]⇒[SF-4]⇒[SC-7]

##### <第3段階>

[SF-7(第3次硬化面)]

各調査区ごとの遺構の変遷は上記の通りであるが，今回は遺跡全体での前後関係を相対的に示すまでには至らなかった。しかしながら，先に想定した遺構の時期幅（12世紀末～16世紀後半頃）の中でも，当遺跡における遺構構築のピークは，舶載の青・白磁や東播系捏鉢などが少量ずつながらも集中して出土する段階（13世紀後半～15世紀前半頃）であり，文明軽石の降下（15世紀後葉頃）を境に，集落の再編に伴って当遺跡一帯が徐々に空白地帯と化していく様子がうかがえ

る。なお、16世紀末以降の様相については、17世紀代が遺構・遺物の全く認められない完全な断絶期となっており、樺山・郡元地区遺跡において集落の集約化に伴い、遺構の集中域が偏っていく傾向と合致している。<sup>\*1</sup> 17世紀代におけるこうした特徴的な集落形成の在り方は、同じ開析扇状地上に立地している松原地区遺跡や久玉遺跡の状況とも符合しており、少なくとも都城盆地の東部地域においては、中世から近世への過渡期に何らかの制約・目的の下、集落の再編成が行われたものとも推察される。18世紀後半から19世紀代にかけては、当時大量に流通していた薩摩焼の出土が認められるものの、当該期に位置付けられる遺構自体が皆無であることから、当地域一帯の集落再編後はほぼ完全に廃棄され、集落辺縁部の畠地などに利用されていたと推測される。

## 2. 土師器について

今回の調査では、細片も含めて800点以上の土師器が出土している。その卓越した出土量は近隣の中・近世遺跡の中でも群を抜いており、同一集落と考えられている樺山・郡元地区遺跡とも全く対照的な様相を示している。<sup>\*2</sup> そのため、当遺跡の性格付けを行う上で、こうした土師器の大量出土はきわめて重要な意味を持つものと考え、遺構との関係には留意したが、一部の溝状遺構（S D - 4・8）[第1調査区] や、土坑（S C - 5）・柱穴群 [第3調査区] の埋土中、及びその周辺の包含層に集中する傾向は認められたものの、遺構との間に意図的廃棄などといった明確な関連性を指摘するまでには至らなかった。

次に、これらの年代については、大半の土師器は遺構年代の集中している13世紀後半～15世紀前半頃の範囲内に収まるものと考えているが、わずかに共伴する舶載磁器類の年代から上限を12世紀末頃、下限を文明降下軽石層上部からの出土が皆無であるため15世紀中葉頃と想定している。また、これらを第III章で示した項目にもとづいて分類すると、様々な技法や胎土との関係がかなりバリエーションに富んでいることから、この範囲内でさらに何段階かの変遷過程を追うことも可能であると考えた。そこで、ここでは本書に掲載した土師器（476点）[坏 : 274点、小皿 : 202点]について、各技法の割合や胎土との関係などを器種ごとに示すとともに、比較的まとまった出土量があり、遺構の前後関係も明らかなS D - 4・8内出土の土師器を用いて、技法上の特徴や使用胎土の変遷について簡単に触れておきたいと思う。

なお、一覧表中の網かけ部分は、特に注目すべき箇所を示している。

①切り離し技法の割合（切り離し技法のわかる439点 [坏 : 245点、小皿 : 194点] を使用）

切 り 離 し 技 法	器 種	
	坏	小 皿
糸 切 り： I類（25点[5%]）	23点（9%）	2点（1%）
ヘ ラ 切 り： II類（249点[57%]）	140点（57%）	109点（56%）
疑似糸切り： III類（165点[38%]）	82点（34%）	83点（43%）
総 数	245点	194点

※（ ）内は各器種の総数に占める割合 [%]を示す。

※ [ ] 内は各類の総数に占める割合、( ) 内は各類の器種ごとの総数に占める割合を示す。

②切り込みを有する割合

切り離し技法	各切り離し技法ごとの 総数とその割合	器 種	
		坏	小皿
糸切り：I類	7点 [28%]	7点 (30%)	0点
ヘラ切り：II類	100点 [40%]	68点 (49%)	32点 (29%)
疑似糸切り：III類	84点 [51%]	52点 (63%)	32点 (39%)
総数	191点 [44%]	127点 (52%)	64点 (33%)

③板状圧痕を有する割合

切り離し技法	各技法の総数 に占める割合	器 種	
		坏	小皿
糸切り：I類	3点 [12%]	3点 (13%)	0点
ヘラ切り：II類	65点 [26%]	44点 (31%)	21点 (19%)
疑似糸切り：III類	53点 [32%]	29点 (35%)	24点 (29%)
総数	121点 [28%]	85点 (35%)	45点 (23%)

④切り込み・板状圧痕を有する割合

切り離し技法	各技法の総数 に占める割合	器 種	
		坏	小皿
糸切り：I類	1点 [4%]	1点 (4%)	0点
ヘラ切り：II類	36点 [14%]	28点 (20%)	8点 (7%)
疑似糸切り：III類	24点 [15%]	17点 (21%)	7点 (8%)
総数	61点 [14%]	46点 (19%)	15点 (8%)

⑤切り込み・板状圧痕を有するものと胎土との関係

切り離し技法	両技法を有するもの	混土系（P系）	单土系（M系）
糸切り：I類 (1点)	坏 1点	1点 (4%)	0点
	小皿 0点	0点	0点
ヘラ切り：II類 (36点)	坏 28点	22点 (16%)	6点 (4%)
	小皿 8点	7点 (6%)	1点 (0.9%)
疑似糸切り：III類 (24点)	坏 17点	5点 (6%)	12点 (15%)
	小皿 7点	6点 (7%)	1点 (1%)
総数 (61点)	坏 46点	28点 (11%)	18点 (7%)
	小皿 15点	13点 (7%)	2点 (1%)

⑥胎土と切り離し技法との関係 ※ () 内は各器種の総数に対する割合を示す。

〈 坏 〉

混 土 系 58 %	I 系	3点 (1%)	I 類	0点
			I' 類	3点 (1%)
	II 系	93点 (38%)	II 類	47点 (19%)
			II' 類	46点 (19%)
	III 系	48点 (19%)	III 類	21点 (8%)
			III' 類	27点 (11%)
单 土 系 42 %	I 系	20点 (8%)	I 類	16点 (7%)
			I' 類	4点 (2%)
	II 系	47点 (19%)	II 類	25点 (10%)
			II' 類	22点 (9%)
	III 系	34点 (15%)	III 類	13点 (6%)
			III' 類	21点 (9%)

〈 小 III 〉

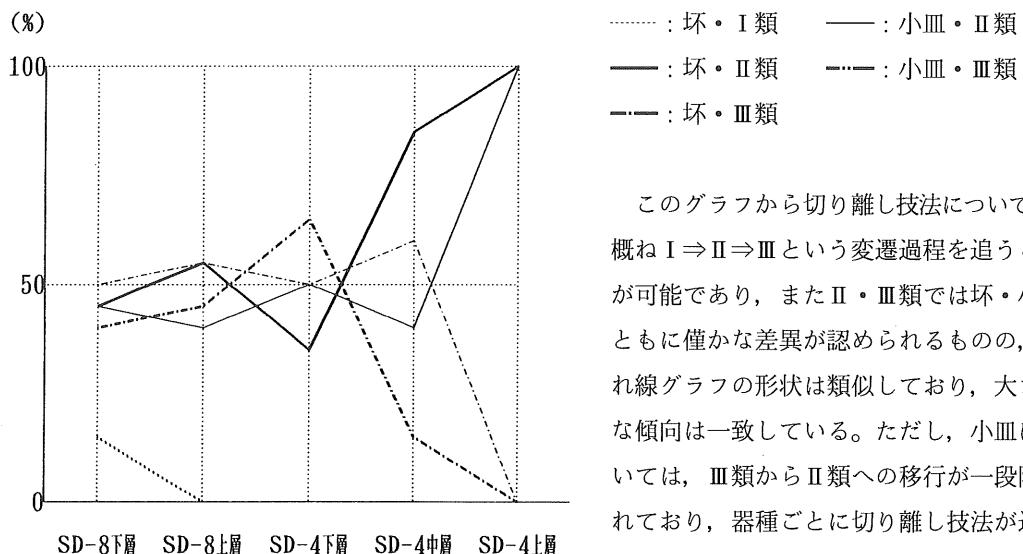
混 土 系 71 %	I 系	1点 (0.5%)	I 類	1点 (0.5%)
			I' 類	0点
	II 系	81点 (42%)	II 類	57点 (29%)
			II' 類	24点 (13%)
	III 系	55点 (28.5%)	III 類	33点 (17%)
			III' 類	22点 (11.5%)
单 土 系 29 %	I 系	2点 (1%)	I 類	2点 (1%)
			I' 類	0点
	II 系	27点 (14%)	II 類	19点 (10%)
			II' 類	8点 (4%)
	III 系	28点 (14%)	III 類	17点 (8.5%)
			III' 類	11点 (5.5%)

切り離し技法についてはヘラ切り（II類）が過半数を占める傾向にあるものの、体部下端に認められる切り込みは、主に壊の場合、疑似糸切り（III類）と密接な関係にあるように思われる。また、板状圧痕については、割合的にはII類・III類とも大差ないが、切り込みとの共存関係という点ではIII類よりもII類の方が両種の共存化が進んでいるように解される。

次に、こうした切り離し技法や各種の特徴の変化が、時期差によるものかどうかを確認するため、今回の調査で唯一まとまった資料が出土しているSD-4・8内の土師器を堆積層によって5段階に分け、①器種ごとの切り離し技法の消長、②器種ごとの各種特徴の消長、③使用胎土の変化、の順に割合の変化を折れ線グラフで示した。なお、SD-4・8はともに第1段階（12世紀末～14世紀代）とした遺構群の中に位置付けられ、SD-8がSD-4に先行している。

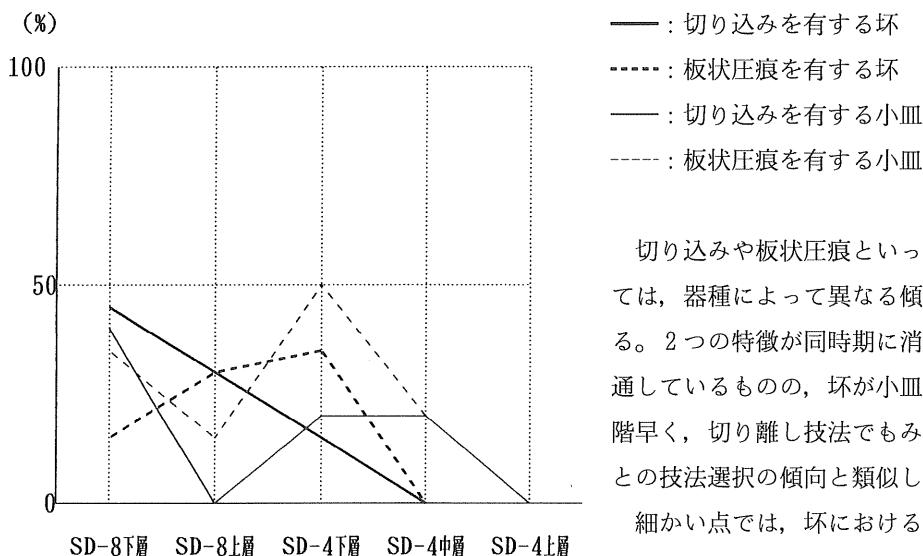
※グラフの縦軸は各器種の総数に占める割合（%）を示している。

## ①器種ごとの切り離し技法の消長



このグラフから切り離し技法については、概ね  $I \Rightarrow II \Rightarrow III$  という変遷過程を追うことが可能であり、また  $II \cdot III$  類では壊・小皿ともに僅かな差異が認められるものの、折れ線グラフの形状は類似しており、大まかな傾向は一致している。ただし、小皿については、 $III$  類から  $II$  類への移行が一段階遅れており、器種ごとに切り離し技法が選択的に用いられていた可能性を示唆するものとして、とくに注目したい。

## ②器種ごとの各種特徴の消長

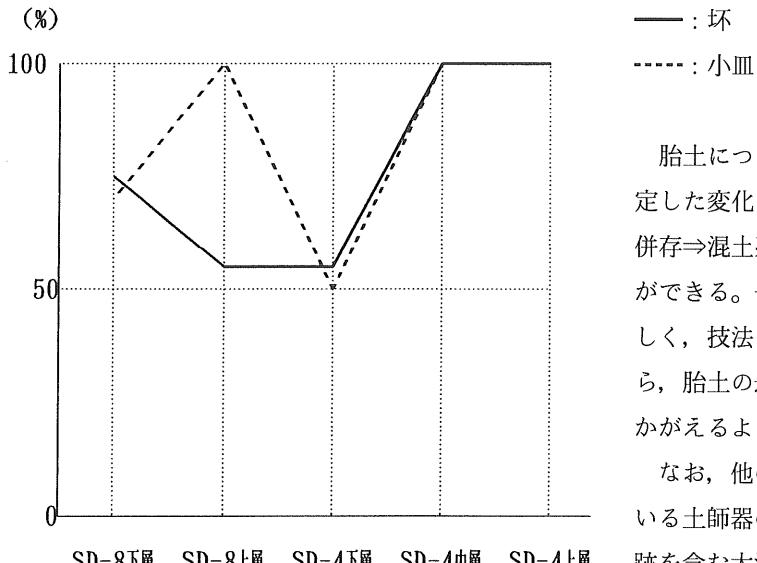


切り込みや板状圧痕といった特徴については、器種によって異なる傾向をみせている。2つの特徴が同時期に消失する点は共通しているものの、壊が小皿よりも1段階早く、切り離し技法でもみられた器種ごとの技法選択の傾向と類似している。

細かい点では、壊における板状圧痕の消長と、 $III$  類の傾向とが合致しており、これらの関連性が想定できる。また、小皿では

混土系の増加と反比例する形で両特徴が減少する傾向にあることから、こうした技法上の特徴と胎土との間にも密接な関係があると考えられよう。

### ③使用胎土の変化：混入系（P系）が占める割合



胎土については、坏の場合ある程度安定した変化をみており、混土・单土系併存⇒混土系主流という動きを追うことができる。一方小皿の場合は、変動が激しく、技法・特徴とも密接に関係しながら、胎土の選択がなされている様子がうかがえるようである。

なお、他の中・近世遺跡から出土している土師器の胎土に着目すると、都之城跡を含む大淀川西部域では、城郭・集落といった遺跡の性格や切り離し技法の別

を問わず、該期を通して单土系が主流を占めているようである。それに対して、当遺跡を含む早水地区や中・近世集落の集中している郡元地区では、单土・混土系の共存状態から、ある時期を境に混土系が卓越して増加するが、近世に入ると西部域同様に单土系主流の状態に安定するといった傾向が読み取れよう。中世段階における大淀川を挟んだ東西両地域でのこのような差異は、胎土や切り離し技法、および器形の変化などと同様に、胎土がその時代のニーズや階層差<sup>※3</sup>に合わせて使い分けられていた可能性や、全く異なる生産集団が2つの核を成して併存していた可能性などを想定することができるのではないだろうか。今後、当時の社会背景や勢力構造を明らかにしていく上で、こうした遺物に表れた傾向にも注意していく必要があろう。

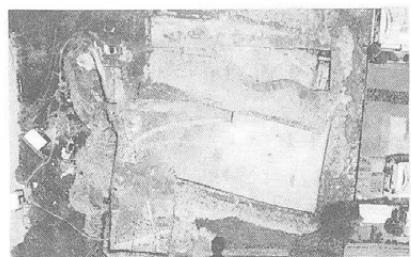
以上のように、当遺跡で出土した土師器については、時期あるいは器種ごとに一定の傾向を見いだすことができた。ただし、ここに表れた傾向はあくまでもかなり限定された区域・時期内の資料を用いた結果であるため、当遺跡はもとより都城盆地で出土している中世土師器すべてに共通するわけではない。良好な一括資料が不足している現状としては、資料の増加に期待する他はないが、今回の試みも含めた、さらなる資料の細分化と比較検討を進めていくことが、緊急かつ重要な基礎作業であると思われる。

※1 樺山・郡元地区遺跡では「15~16世紀に入ると遺跡一帯に集落（屋敷地）が広がり、17世紀以後はIV区とした場所に集約されていく状況がうかがえる。」と指摘されている。

※2 樺山・郡元地区遺跡は、当遺跡に比べ陶磁器類が種類・出土数ともに多いのに対して、土師器は当遺跡はもとより同時期の他の遺跡と比較してもかなり少ない。

※3 墓に副葬された土師器から、糸切りを有力層、ヘラ切りを一般庶民層と想定している。

図版 1



第1・3調査区 全景(真上より)



第1調査区 南半部遺構群(真上より)



第1調査区 南半部遺構群検出状況(北東より)



第1調査区 北半部遺構群(真上より)



第1調査区 南半部遺構群況(西より)



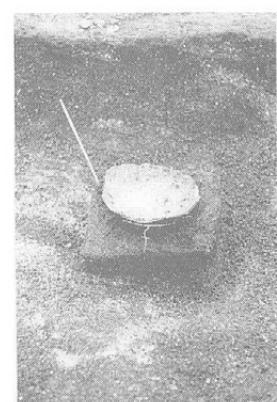
第1調査区 SD-7・8検出状況(西より)



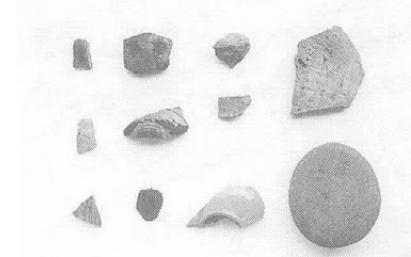
第1調査区 SC-1断面



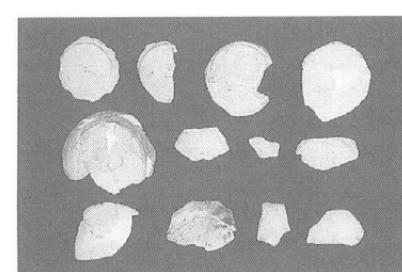
第1調査区  
SD-4(北より)



第1調査区  
SD-8内土師器出土状況



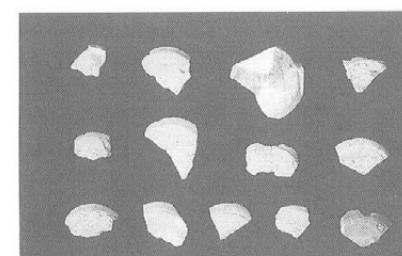
第1調査区 SD-4・7・8内出土遺物



第1調査区 出土土師器①(壺類)

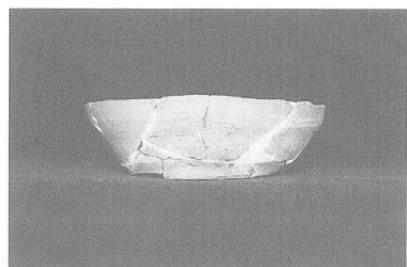


第1調査区 包含層中出土遺物

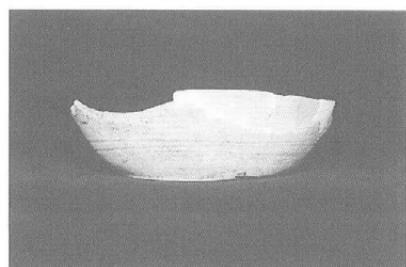


第1調査区 出土土師器②(小皿類)

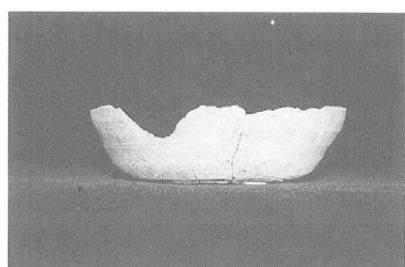
## 図版 2



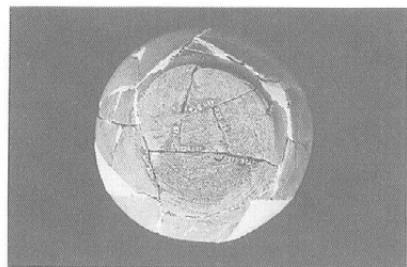
坯・I aHM類(143)



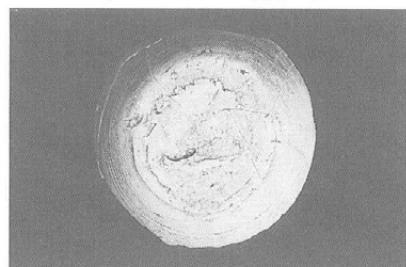
坯・II bSM類(54)



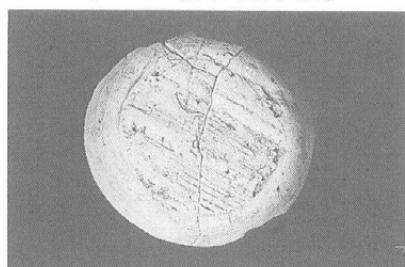
坯・II' aHP類(191)



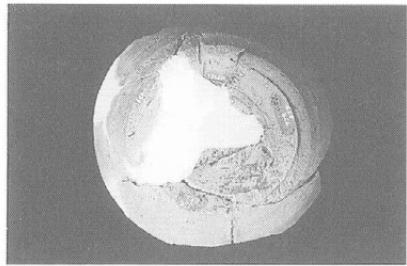
坯・II' bHP類(78)



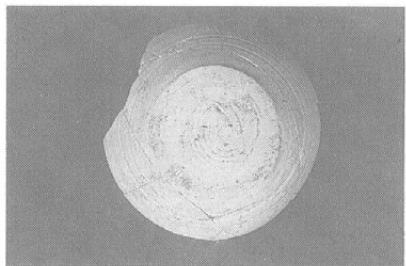
坯・II' bHP類(196)



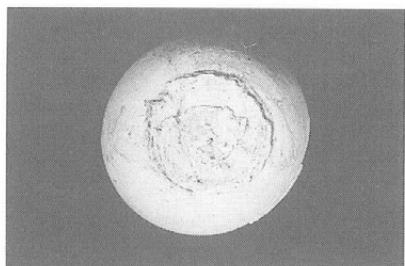
坯・III' bHP類(89)



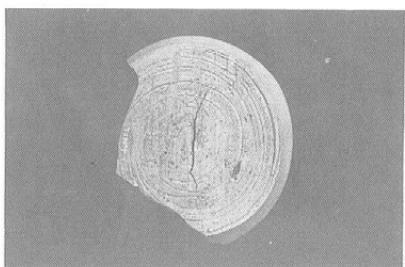
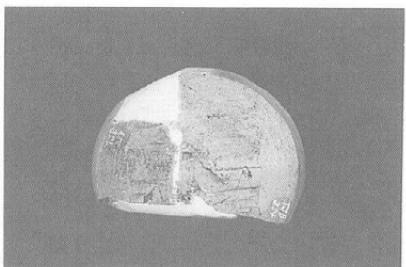
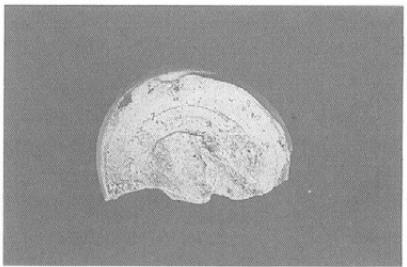
小皿・II' aHP類(192)



小皿・III aHP類(81)

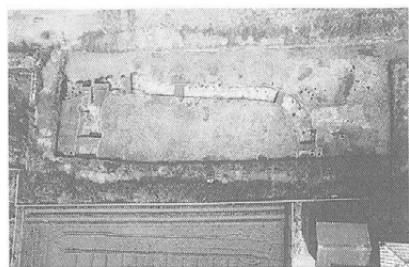


小皿・III' aHP類(86)

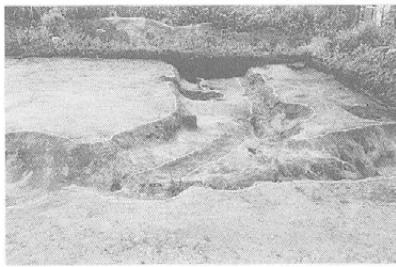


## 第1調査区 出土土師器

### 図版 3



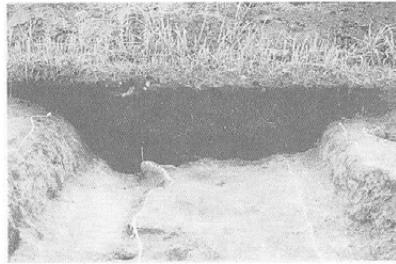
第2調査区 全景(真上より)



第2調査区 SD-1・12・13・14切合部



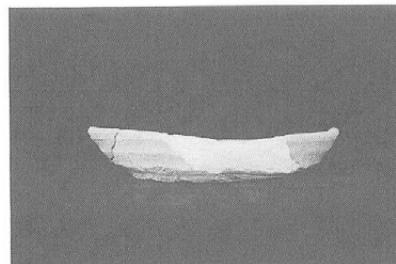
第2調査区 遺構検出状況(北東より)



第2調査区 SD-1・12断面



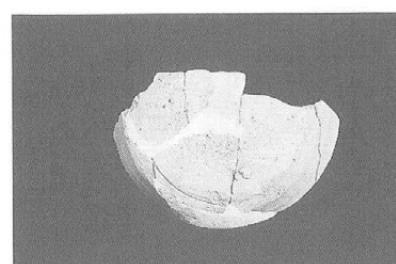
第2調査区 遺構完掘状況(北西より)



坏・I bSM類(256)



第2調査区 遺構完掘状況(南東より)



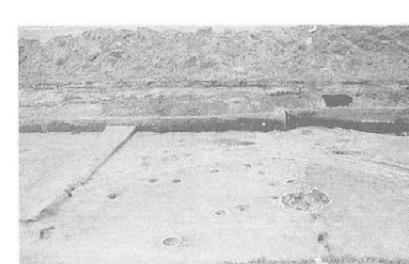
第2調査区 出土土師器



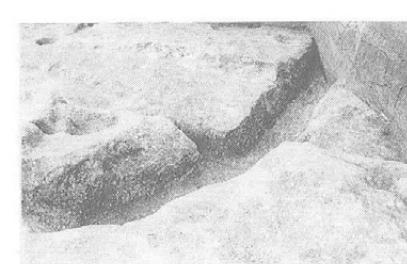
第3調査区 東部遺構群(真上より)



第3調査区 SD-15・16完掘状況(西より)



第3調査区 SF-3～6完掘状況(南より)



第3調査区 SD-15・16とSC-7の切合部

## 図版 4



第3調査区 SF-7(第1次硬化面)検出状況(南より)



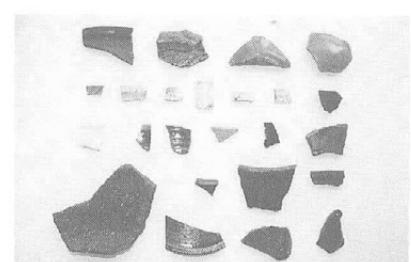
第3調査区 SF-7(第3次硬化面)検出状況(北より)



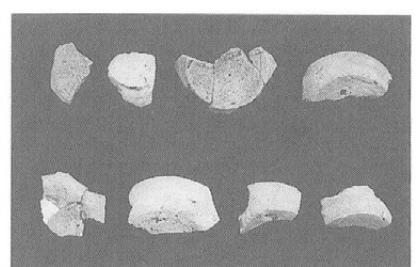
第3調査区 SF-7(第3次硬化面)検出状況(南より)



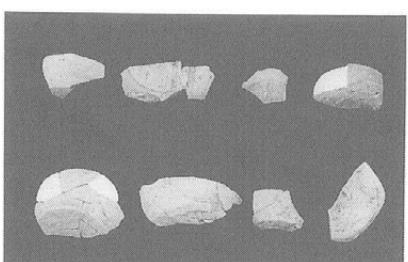
第3調査区 SD-15・16, SF-3, SC-5・6内出土遺物



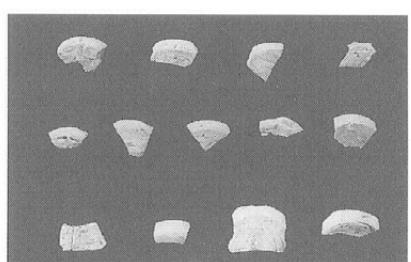
第3調査区  
包含層中出土陶磁器



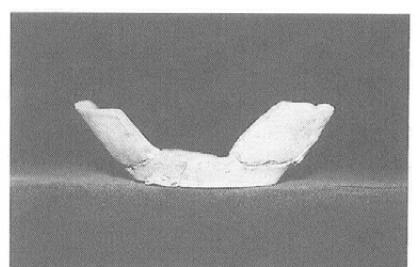
第3調査区 出土土師器①  
(坏類)



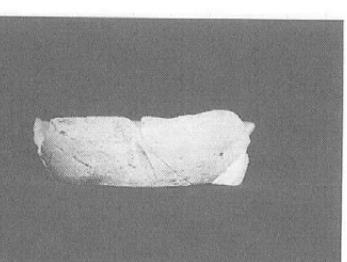
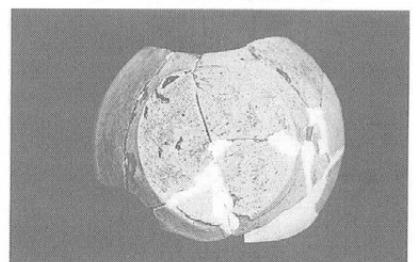
第3調査区 出土土師器②  
(坏類)



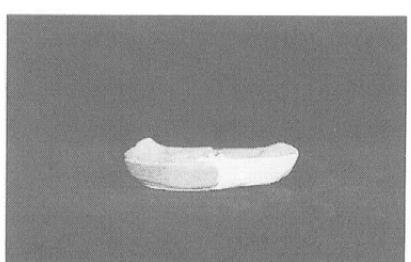
第3調査区 出土土師器③  
(小皿類)



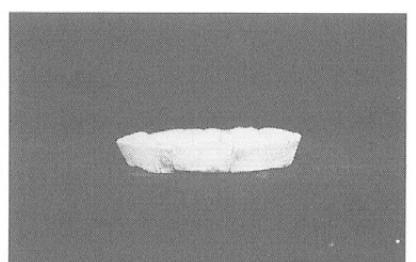
坏・I' bSP類(313)



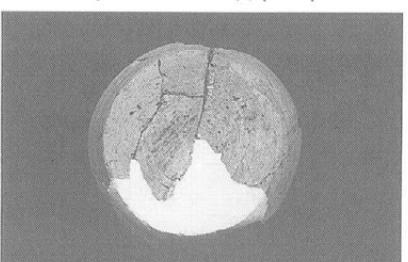
坏・III aSP類(491)



小皿・II' aHP類(456)



小皿・III aSM類(494)



第3調査区 出土土師器

## 天神原遺跡

都城市文化財調査報告書第23集

平成5年3月31日

編集 宮崎県都城市教育委員会  
発行 〒885 宮崎県都城市姫城町6街区21号

TEL (0986) 23-2111 (内線554)

印刷 有限会社 文昌堂

都城市東町18街区1号

TEL (0986) 22-1121